

キャンプ収容 Camp Concentration

T. M. ディッシュ^{*1} 著 翻訳: 野口幸夫^{*2}

2006年7月22日

^{*1} ©1970 Thomas M. Disch

^{*2} ©1980 季刊 NW-SF 15号-18号 連載。

本書は感謝と共に
二人のよき作家
ジョン・スラデックとトーマス・マンに捧ぐ

さて、読みびとよ、これにてわが夢はすべてお聞かせ申し上げた。
いかがかな、これを解きあかしてみては下さるまいか、それがしに
或は貴君自身にか、また隣人に。ただくれぐれも
誤訳はなさらぬよう。さもなくば、ためになる
どころか、貴君に弊害のあるばかり故。
解き誤れば悪しきものいで来たる。

またくれぐれも行き過ぎたもうことなけれ
わが夢のうわべに興ずるその上で。
わがなぞらえや、ものの讐えに
笑うたり恨みたりなどしたもうな。
そは稚き者、愚か者らに譲られよ。そうして貴君におかれては、
わが事の本質をこそ見られたし。

帷かきわけ、わがヴェールの裡を見て
わが隠喩をそば掘りおこしたまえ、誤ることなく、
そこに、尋ぬれば見出しうべき事どもが
正直なる心の扶けとなるであろう。

見つけしがわが鉱石ならば、容赦なく
捨てつべし、されど黄金は納められよ。
わが黄金が鉱石の裡に包まれてあらば何となさる？
芯あればとて林檎捨てさる人はなし。
されどもし貴君が空しとてすべて擲げさらんや
われ知らじ、ために再び夢に帰ることあらざらんとは。

ジョン・パニヤン「天路歷程」

目次

第 1 章 一冊目	1
第 2 章 二冊目	89

第 1 章

一冊目

五月十一日

私の係の青年看守でモルモン教徒の RM がやっと配給の紙を持ってきた。最初に頼んでから三か月めだ。不可解なり、この心境の変化。アンドレアが彼に賄賂を使えるようになったのか。リゴル・モーティスはそれを否定する。さもありません。二人で政治談議。RM が洩らしたヒントから、どうやらマクナマラ大統領が”戦術”核兵器の使用に踏み切ったらしいと推察できた。たぶん、だからこの紙の恩はアンドレアではなくてマクナマラにあるわけだ。シャーマン将軍、お気の毒なシャーマン将軍が適切な攻撃手段を封じられていることに、RM はここ何週間も不平をこぼしていたのだから。きょうのように RM が上機嫌の時は、あのぞっとする微笑、完全なしゃれこうべの齒の上に固く引かれた薄い唇に、ほんのかすかなユーモアのつもりらしきものがちらつく。なぜ私の知っているモルモン教徒はみんなあの同じふんづまりの微笑をするのだろうか？ しものしつけが並はずれて厳しいのか？

これは私の日誌だ。ここでは遠慮なしでいられる、遠慮なくいおう。私はこれ以上はないというほどみじめだ。

五月十二日

日誌というものは、以前に試みた限りでは、単純に訓戒的なものになってしまう傾向がある。ここでは最初から筆まめになるよう心せねばならぬ。かの高遠なる獄中生活記録「死の家の記録」をお手本にして。ここでは些事にこだわることは容易なはずだ。身辺雑事にこれほど虐げられるのは実に子供の頃以来なり。毎日、夕食前の二時間は恐れと希望のゲッセマネの中で過ごす。あのいやらしいスパゲッティがまた出されはしないかという恐れ。シチューを配る柄杓にすてきな肉のかたまりが入っているかもしれない、デザートにリンゴが出るかもしれないという希望。”えさ”よりひどいのは巡察にそなえて毎朝やる

気がいじみた房内の拭き掃除。房内はフィリップ・ジョンソンの夢(グランド・セントラル・バスルーム)みたいにピカピカだが、われわれ囚人は腐りかけて廃物化した自分の肉体の信じられないようなしみついた臭いと一緒にいるのだ。

しかし 。ここでの生活は徴兵に応じていた場合にわれわれが今この壁の外で送っているであろうものほどひどくはない。胸くそわるい牢獄ではあるけれど、それなりに利点はある そんなに速やかに、そんなに高い確率で死に至ることがないという点だ。正義というはかり知れぬ強みについてはいうまでもない。

あ、そうだ。この”われわれ”というのは誰のことか？ 私のほかにここは良心的徴兵拒否者は十人あまりしかいず、団結心の生じるのを避けるために用心深く引き離されている。囚人 本当の囚人たちはわれわれを軽蔑している。彼らには正義よりももっと長続きする強みがある 罪悪だ。こうしてわれわれの孤立、私の孤立はなおさら絶対的なものになっている。そして、おそらく私の自己憐憫も。RM が来て議論の相手になってくれないものかと願いながらここに坐っている晩もあるほどなのだ。

四か月！ そして私の刑期は五年……これがわが全思考のゴルゴンなり。

五月十三日

スミードのことを語らねばならぬ。刑務所長スミード、わが最大の敵、いまだに私の読書の特典を認めず新約聖書と祈禱書だけしか許可しない専断者スミード。まるで、子供の頃によくそういっておどかさされたように、大嫌いなモリス叔父のところにも夏休みの間あずけられてでもいるかのような(叔父は両親に本の読みすぎで私の”眼がつぶれる”と忠告した)。はげで、威勢がよくて、挫折した運動選手特有の肥満体 それがスミード。こんな名前を持っているというだけで彼を軽蔑してもおかしくないだろう。きょう、検閲官(スミード?)に塗りつぶされずにすんだアンドレアからの月々の便りの断簡から、私のもとへ送られてきた、「スイスの高原」のゲラが囚人との通信に関する規則文をつけて出版元へ送り返されたことを知った。三か月も前のことだという。今では本になっている。書評にもとり上げられたそうだし(出版社がこんなにも急いだのは裁判で少しは無料の宣伝になるとあてこんだからではないかと思う)

検閲官は当然のことながら、アンドレアが同封した書評を抜きとっていた。虚栄の苦悶。十年間、私はおそまつな博士論文のウインスタンレー論以外には著書を持たずにいた。いま私の詩集が本になっている そしてそれを目にすることが許されるまであと五年かかるかもしれないのだ。スミードの眼など、春のじゃがいもみたいに腐るがいい！

あんな奴はマレレシア中風でよいよいになっちまえ！

”セレモニー”のタイトルに同調しようと試みた。ならず。井戸はからから。

五月十四日

スパゲッティ。こんな夜（私はこうしたメモを消灯後、便器の上の二十ワットの常夜灯のあかりのもとで書く）思うのは、ここに来ることを選んだのは正しかったか、ばかな真似をしているのではないか。これはヒロイズムのなせるわざ？ それともマゾヒズムの？

私生活では私の良心は決してそんなに良心的なものではなかった。だが、くそ、この戦争は間違っている！

私は、自発的にここへ来ることはトラピスト修道院に入るのと同じようなものだと、自由意志で選べば権利の喪失も耐えやすいものであるはずだと考えていた（自分に信じこませていた）。妻ある身としていつも悔やまれることの一つは、瞑想的な生活がその清浄なほうの側面で私には許されていないということだった。私は禁欲を何か稀少な贅沢だと、靈的なトリュフのようなものと空想していたのだ。とんだお笑いぐさ！

下の寝棚でプチブル・マフィア（脱税で捕まった）が寝言をいっている。日にみえる闇の中でベッドがきしむ。私はアンドレアのことを考えようとする。、高校の時、修道士ウィルフレッドが、みだらな想いが湧いたときには聖処女に祈りなさいと助言していた。たぶん彼には効果があったのだろう。

五月十五日

まさに *Nel mezzo del camin di nostra vita*（わがいのち半ばに至れり）！ 三十五回目の誕生日、そして些かおぞましい。今朝、数瞬のあいだ、ひげそり用の鏡の前にもう一人の私、ルイ二世が立ち現われた。彼は下品な言動で嘲笑し、あたりちらし、忠誠の旗を汚した。希望についてはいうまでもない（最近ではすっかり汚れきっている）。十五歳の時の暗鬱な夏を思い出した。ルイ二世が私の魂を単独支配した夏。暗鬱？ 実のところ、*Non serviam*（服従せず）をいったときにはとても愉快だった。この浮きたつような気分はいまも私の最初のセックスの記憶と入り混じっている。

現在の状況がそれと大きく異なっているだろうか？ ただ、今は慎ましくも、神にではなくカエサルに”服従せず”といっている。

教戒師が告解を聞きにきたときはこんな心の咎めのことは話さなかった。無邪気にも彼は冷笑的なルイ二世の側を受け入れようとしたものだ。だが彼も今では知恵がついて、私に対してとぼしい一般論の蓄えを動員しようとはせず（こいつもうしろ向きのアイルランドの聖トマス派だ）私の道徳観を受けいれるふりをしている。「だが気をつけよ、ルイス」と彼は私の罪を許す前に助言した。「知の驕りに気をつけよ」つまり知性に用心しろとい

うことだなと私はいつも思っている。

徳義と我意をどう区別すればよいのか？ 二人のルイを？ ひとたび己を委ねてしまった疑問を、どうすればとめることができるのか？ (それが疑問だ。)RM らはこんな疑問を抱いているか？ 彼は生涯において一度も疑問を持ったことがないかの如き印象がある

そしてモルモン教徒たちはそれだけになお多くの疑うべきものがあるようだ。

私は慈悲の心にはほど遠い。この井戸も干あがりかけている。

五月十六日

きょう、われわれは労役で監獄の外に出され、枯死した木を伐って燃やした。新しいウィルス、あるいはわれわれ自信のウィルスが迷い出たのだ。監獄の外の風景は、春だというのに中とさして変わりのない荒涼としたものだ。戦争は遂にこの豊かな国を貧り、日々の暮らしまで損ないはじめているのだ。

戻るとき、医務室を通して最新の予防接種を受けねばならなかった。当直医はみんなを帰したあとまで私をひきとめた。瞬時の狼狽。私の中に新しい戦争の病気の徴候でもみつかったのだろうか？ さにらず、「高原」の書評を見せてくれるためだった！ なんとなんと、「ニュー・ディセント」のモンズなり。彼女は気にいってくれていた（万歳）がフェティッシュな作品に対してはやはり別だった。また、あんなにも腐心したりルケへの言及も認めてくれていなかった。嗚呼！ 私が書評を読んでいる間、親切な医師は何千CC とも思える正体不明の液を太ももに注射した。うかれていた私はほとんどそれに気がつかなかった。書評にとりあげられた。私は実在するのだ！ モンズに手紙を書いて礼をいわなくては。たぶん RM が投函してくれるだろう。ことによると私はまた詩作を再開できるようにすらなるかもしれない。

五月十七日

マフィアと私がしぶしぶわれわれの（いまにわかるが彼らのではない）房を共有しているホモの二人が、急におたがいに口をきかなくなった。ドニイは一日中便器に坐ってブルースを叩いている。ピーターは寝棚にひきこもってくよくよしている。時おりドニイが私に、本当か空想かわからないピーターの浮気について大声で不平を訴える（不貞をはたらくような機会があるのだろうか？）。年下で黒人のドニイは女役で、うだうだと愚痴っぽいところまで女じみていて見事に中味がからっぽだ。ピーターは三十歳でいまもかなりの美男子だが、顔にはうらぶれて老けた表情がある。二人とも麻薬で捕まったのだが、ただピーターは以前、殺人で裁判にかけられたことがある。彼の悔俊はみせかけだけのもの

のような印象がある。二人の情熱には、本心からのものであるにはあまりにも必要に迫られたような要素が多すぎる。あなたがこの世でただ一人の男で、私がやはりただ一人の存在であるのなら。さて、誰が愚痴をいったりするだろう？

私はしかしいわざるをえない。この種のことはそのものずばりでないほうが好ましいようだ。たとえばジュネの場合のように。私のリベラルさは本物のそれを前にするとたじろいでしまうのだ。

この場合、私にはでぶだという利点がある。よほどの変わり者でもなければ誰もこんな肉体は求めないだろう。

以前、太った人のための「十五人の著名なでぶ」という霊感的な本を書こうと考えたことがある。ジョンソン博士だとかアルフレッド・ヒチコック、サリンジャー、トマス・アキナス、メルヒオール、釈迦、ノーバート・ウィーナーといった顔ぶれだ。

今夜はベッドのきしみは少ない。だが時おり、マフィアのいびきのあいまにドニイカピーターが吐息をもらす。

五月十八日

夕方、若きリゴル・モーティスと一時間を過ごす。このあだ名（“死後硬直”）は不当なものかもしれぬ。RM は私がここでみつけた友人に最も近い存在なのだから。正統派信者でかたぶつながら善意の人で、われわれの会話はレトリックの演習以上のものだと思う。私の側では、彼を改心させようとする伝道者的な衝動以上に、彼を理解したいというほとんど必死の願望を自分が抱いていることに気づいている。なぜなら RM やその同類こそ、この途方もない戦争を推進し、そうすることで道義的な務めを果たしているのだと、私の疑問など寄せつけぬ誠実さで信じている人たちなのだから。それとも私はこの新たなミルズ主義者（というよりは新たなマキャベリアン）たちのテーゼを受けいれるべきなのか。選挙民などは操られるべきもの、この世界的なドラマの立見の観衆にすぎず、世論などはワシントンのオリュンボスにいる彼らの秘密の主人たちが新聞を（これはいかにもそのとおり）操作するように簡単に作り変えてしまうのだと主張するこの連中を？

そうであればいいと私は願ってすらいるのかもしれない。説得がそもたやすきわざであるなら、数少ない正義の声もあるいはなにほどこかの効果を望めるかもしれないからだ。だが現実はいえ、私も、また 一方的平和委員会 で知り合った連中も、この戦争の愚かしさと不道徳性を誰かに得心させたことなど一度もなく、実のところ人はすでに心同じゅうせず、説得ではなく安心立命をのみ必要としていたのだった。

たぶんアンドレアが正しいのだろう。戦争などは政治屋や扇動屋に 専門家と称される連中にまかせておくべきなのだろう。（ちょうど、アイヒマンがユダヤ人問題の”専門

家”として知られていたように。なにしろ彼はイーディッシュ語が話せたのだ!) 議論などやめて、私はミュージックにのみ才能を捧げればいいのか。

そして魂は悪魔に？

そうじゃない。異議申し立てが望みえぬことであれ、黙従はなお悪しきことであるはずだ、ヤンガーマンの場合をみよ、彼は黙従した、現状を放置した、良心を圧殺した。イロニーが彼を支えていたのか？ それともミュージックか？ きみが開会の辞を述べるために立ちあがる時聴衆の半ばが歩み去れば、そのとききみの高尚なる無関心はどこにあるのか、ねえ詩人君？ そして彼の最後の本は ひどい、まったくひどいものだ！

だがヤンガーマンは少なくともおのが沈黙の意味を知っていた。私が RM に話すとき、言語そのものが変化してしまうようだ。意味を掴もうとすると、溪流のウグイのように身を翻して逃げ去ってしまう。もう少しいい比喻でいうなら、恐怖映画でおなじみのあの秘密の扉のようなもの。書棚の一部のようにみえるが隠されているばねをはずすとくるり一回転、裏側はざらざらの石の面。このイメージ、繰りひろげてみねばならぬ。

RM について最後の一言。われわれはおたがいを理解していないし、おそらく理解できないだろう。時どき思うのだが、その理由は彼が愚かだからというような単純なものではないようだ。

五月十九日

詩神が降臨 その特徴として、下痢の発作というすさまじい仮装をし、頭痛に支援されて。オーデンがどこかで(「パイロン卿への手紙」の中で?)いかにしばしば詩人のよりよき空想の飛翔が流感のおかげ/ランプティ・タンプティ・タンプティであることかといっている。

いささかパラドクスながら、この数か月そんなに気分がよかったことはなかったのはいうまでもないだろう。せつかくの折だから、ささやかな詩を書きとめておこう(実に片々たるものではあるけれど、ああ! この前に書いてからいかに久しいことだろう)

蚕の唄

どうすれば私は 喜んで入れるようになるのか

あの杉の箱に 明らかではない

今はその時でない

私は今が盛りだ

露はまだ個れてはいない 私の耳のうしろに

ことばでは言いあらわせぬわが涙
 そして歌声
 聴くがいい
 石さえも黙している 慌惚として
 どうすれば私は 降りていけるのか
 あの闇の中 魂を置き去りにじて
 歌声に聴き入れ 蝶よ
 そして壊れた壺は
 箱に入れ
 いやいや私はやめることはない 紡ぐことを
 蝶や壊れた壺のこと とこのボツ

（ここでルイス・サケッティの日記の手書き部分は終わっている。以下の文章はサイズや紙質の異なる紙にタイプで打たれていた。 編者）

六月二日

私は虜囚だ 法の定める刑務所から獲われて、いるべからざる牢獄に運び込まれている。弁護士に相談することも認められない。抗議は気が狂いそうになる穏やかさで黙殺される。子供の頃、ガキ大将がやって以来、久しくみられなかったことだ、ゲームのルールがかくも完膚なきまでに傲然と破棄されるのは。そして私はなすすべもない。誰に訴えればよいのか？ ここには教戒師すらいないといわれた。今では神だけが私の聴き手だ、そして看守が。

スプリングフィールドでは私は罪状が確定し刑期の定まった囚人だった。ここ（がどこであるにせよ）では何も確定していず、規則へもない。スプリングフィールドへ帰せとひっきりなしに要求しているのだが、返ってくる答は顔の前で振られる一枚の紙切れ、スミードが署名した私の移管承認書だけ。スミードめ、どうせなら私のガス室送りを承認すればよかったのだ。くたばれスミード！ くたばれ、こんな小ぎれいな黒い、区別のつかぬ制服の中での新たな無名姓なんぞ おれもくたばれ、こんなことが起こりうる状況の中に身を置くほど愚かしかつたのだから。ずる賢く立廻るべきだったのだ、ラーキンやリヴィアのように、そして精神病を装えば軍隊に入らずにすんだのだ。ここにも私のおためごかしの姦しい道徳性がつきまとう 姦られっぱなしだ！

そいつに蓋をするのがこれだ、私が定期的に引き出されて会見する結構なご年配の凡人が、ここでの体験の記録をつけてくれという。日記だ。私の書き方に感服しているとおお

せられる！ 私には言葉に対する真の天分がある、とこの年配の凡人はのたもう。そうとも！

一週間以上も私はれっきとした戦争犯罪人 名前も階級も社会保険の番号もある存在らしく振舞おうとしたが、そいつはモントゴメリー拘置所にいるときに試みたハンガーストライキのようなものだ、四日間続けて絶食できない人間はハンストなんてやろうとするものじゃない。

さあこれがあんたの日誌だ、くそ爺い。どうとでもするがいい。

六月三日

奴は私に感謝した。こともあろうに。奴はこうのたもうた。「あなたがこれを大変混乱したことだと思っておいでなのはよく理解できますよ、サケッティさん」(おまけにサケッティさんときたもんだ!)「信じていただきたいのですが、私たちはこのキャンプ・アルキメデスでの私たちの権限の及ぶ限り、転換をより容易なものにするためのあらゆることをしたいのです。それが私の 役目 ですつあなたの 役目 は観察すること。観察して解釈することです。しかし今すぐ始める必要はありません。新たな環境に適応するには時間がかかるもので、それはよく理解できます。ただこれだけははっきりと申し上げておきましょう、適応してしまえばあなたはこのキャンプ・アルキメデスでの生活を、いまスプリングフィールドでなさることになっていたであろうよりもはるかにエンジョイなさるはずですよ あるいは実際にスプリングフィールドでしておいでになった以上に。あなたがあそこでつけておられた数少ない手記を拝見しました、それはご存じでしょう 」

私は知らないと言をはさんだ。

「ああ、そうでした、スミード所長がご親切にも送って下さって、私はそれを読んだのでした、大変ためになりました。実は、あなたがあの日誌をつけはじめるのを許されたのは私の依頼があったればこそなのでして。私は、いわばあなたの作品のサンプルが欲しかったのですよ、ここにお連れする前にね、あなたはスプリングフィールドでの生活の実に悲惨な情景を描いておられた。正直申し上げて私はショックを受けました。お約束いたしましょう、サケッティさん、ここでは決してあんな非道なめにあわせたりはいたしません。それにあんな穢らわしい変質者も一人もおりません。めっそうもない！ あなたはあの刑務所でご自分を空費しておられたのですよ、サケッティさん。あそこはあなたのような知的な才能のある人がいるべき場所ではありません。私もR&D局の専門家のはしくれです。大才といえるようなものではありませんよ、そこまではとてもとても。しかし専門家であることは確かです」

「R&D？」

「リサーチ・アンド・デベロップメントですよ、ご存じでしょう。私は才能に対して鼻が利きましてね、ささやかながら少しは知られているんですよ、この方面では。ハーストと申します、Aの二つあるハースト」

「まさか、ハースト將軍じゃないでしょうね？」私は訊いた。「あの太平洋の島を取った人では？」私が思ったのは、もちろん、軍が結局私を手に入れたのだということだった（そして今わかる限りでもそれはそのとおりなのかもしれない）。

彼は視線を机の面に落とした。「以前はそうでした。でも今はもう老いぼれですよ、あなたもそう指摘しておられたように思いますがね？」と恨みがましく見上げて、「あまりにも年配で……軍にもいられない」年配という言葉を一音節のように発音した。

「まだ少しは軍にもつてはあって、今も私の意見を尊重してくれる友人がいますが、みんな私と同じ年配です。私の名からアウアウイを連想させたのには驚きました。一九四四年といえはあなたが生まれるより前でしょくに」

「でも本で読んだし、あれが出たのは……いつだったかな？……一九五五年ですよ」私がひき合いに出したその本というのは、ハーストにはすぐにわかったのだが、フレッド・ベリガソの「マルスの^つ合」で、アウアウイ作戦に関するほとんど扮飾のない記述だった。出版から何年ものちに私はあるパーティでベリガンに会ったことがある。素晴らしい情熱的な男だったが、ひどく悩んでいる様子だった。自殺のわずか一カ月前のことだった。これはまた別な話だ。

ハーストは渋い表情をした。「私はあの頃も才能に鼻が利いた。ところが才能というやつは時に反逆と結びつく。しかしまあ、あなたとベリガソの件について論じ合っても得るところはないでしょうな、あなたもどうやらそう判断しておいでのようにだし」

彼はそして“歓迎ワゴン”役に戻った。私に蔵書を認める。週に五十ドル支給(!)して酒保で使えるようにする。火曜と木曜の夜は映画。ラウンジでコーヒー。といったようなこと。何より、自由な気分にならねばならない。自由な気分。ここがどこにあるのか、なぜ私がここにいるのか、解放されたリスプリングフィールドに送還されたりする望みがあるとすればそれはいつなのか、といったようなことについてはこれまで通り説明を拒んだ。

「ただいい日誌をつけることですよ、サケッティさん。それがわれわれの求めるすべてです」

「おや、ルイと呼んで下さっていいんですよ、ハースト將軍」

「それは、ありがとう……ルイ。では私のことはHHと呼んでもらえませんか？友人はみんなそうしとるもので」

「HH」

「ハンフリー・ハーストの略ですよ。ただハンフリーという名はこのあまりリベラルならざる時代にはよからぬ連想を誘うものでね。ところで 日誌の件だが、中断した箇所、ここへ連れてこられた時点まで戻って空白を埋めてはもらえないだろうか。日誌はなるべく徹底したものであってほしいんでね。事実を、サケッティ 失礼、ルイ 事実をね！ 天才とは、格言にもあるように、労をいとわぬ無限の能力のこと。何というか、この……キャンプの……外にいる誰かにですな、きみの身の上に起こっていることを説明するといった感じで書いてもらいたい。そして思いきり正直になってもらいたいんですよ。つまり、思ったままをね。私の感情を付度することはない」

「そうしてみましょ」

力ない微笑。「ただ、一つだけ原則を常に心にとめておいてもらいたい。あまり、何というか……曖昧になりすぎんようにしてもらえんかな？ よろしいか、われわれが求めるのは事実だ。決して……」彼は咳ばらいした。

「詩ではない？」

「私自身は、わかってもらいたいのだが、決して詩を嫌うものではない。好きなように書いてくれることは大歓迎だ。実のところ、是非ともそうしてもらいたい。ここには詩の好きな連中が少なくない。ただ、日誌の中ではほどほどにしてもらわないと困るのですよ」
くそったれHH。

(ここで子供時代の思い出を挿入せねばならない。新聞配達をしていた頃、十三ぐらいの時だ、受持ちの配達先に退役軍人がいた。木曜の午後が集金日で、老ユーアット少佐は私が薄暗い記念品だらけの居間に入って話を聞いてやらないと払ってくれなかった。彼が好んで独白するものが二つあった。女と車だ。第一の主題について、彼の感情はアンビバレントだった。私の幼いガールフレンドたちにうずうずするような好奇心を示しながら、その合間に性病についての神託じみた警告を織りまぜる。車はもっと好きだった。彼のエロチシズムは恐怖によって複雑化されてはいなかった。彼はそれまでに持った全部の車の写真を札入れに蔵っていて、私にそれを見せてはいとおしげに悦に入る。過去の征服の戦果を愛撫する老好色家。私はいつも思うのだ、二十九の齢になるまで車の運転を習わなかったのはこの男を恐れていたからではなかったろうか。

この逸話の要点はこうだ ハーストはユーアットの鏡像なり。二人とも同じ型紙から切り抜かれている。キーワードは**壮健**。ハーストが今でも毎朝二十回腕立て伏せをして、美容用自転車で仮想上の数キロを走行するさまが思い浮かぶ。雛だらけの顔の皮は太陽灯でこんがり焼きあげて。白くなりかかった薄い髪はクルーカットにして。彼は、死などというものはないのだというマニャックなアメリカ的信条を極限にまで押し進める。

そして彼はおそらく癌の園だ。そうじゃないのかい、HH?)

追記

われ屈服せり。図書館(国会図書館? 広い!)へ行って三十冊余り借り出して、それが今、私の部屋の棚を飾っている。部屋なのだ、独房なんてものじゃない。ドアは昼も夜も開けばなしだ。この窓のない迷宮世界に昼とか夜とかいえるようなものがあるとすればの話だが。窓のあるべきところには代りに扉がある。無限に退いていく白。アルファヴィル風の通路、そこに穿たれた番号付きのドア、その大半は閉ざされている。青髭公の居城。開くドアの奥にあるのは私のとそっくりの部屋、ただ明らかに居住者はいない。私は尖兵? 着実なエアコンの捻りが通路にづきまとっていて、いわば夜になると、眠れと歌いかけてくる。ここは地底のペルシダー? そんながらんどうの通路を探険しながら、私は消音された恐怖と消音された浮きたつ気分との間を揺れ動く。ちょっと説得力不足だが不出来ではないホラーショーを観ているような、そんな感じだ。

私の部屋は(事実をお求めだ、事実を得るがいい)

大好きだ。見よ、なんと暗いことか。闇とよべそうなくらい。

白ペンキの白はもう無効。

なぞらえるならむしろ月光

白ペンキではないだろう。

気が遠くなってしまいそう

になる、これを見ていると。

私は思う、これは黄色だ

だがそれをいうことはできない。

HHは喜ぶまい、これはいえる。「正直なところ、HH、これはたまたまそうだったんだ」即興の詩として「オジマンディアス」の域にはとても及ばないが、まあ、慎ましく小成に甘んじておこう。

わが部屋は(もう一丁やってみよう)

薄い黄灰色(要するに事実と詩には差がございます)。この黄ばんだ壁にはオリジナルの抽象的の油絵があり、非の打ちどころのない企業好みのニューヨーク・ヒルトン風、中味はとらえどころなく、空虚な壁と同じくロールシャッハ・カード風。高価なデンマーク近代派風の桜材の厚板、そのそこかしこに桜挑色のストライプの立方体のクッションがあしらわれている。腿せた黄土色のアクリルのカーペット。このうえもなく贅沢に浪費された空間、何も無い隅。見積りでは床面積は五〇〇平方フィートというところ。ベッドは小文字のL字型で、部屋の本体から味気ない花模様のカーテンで仕切られるように

なっている。まるで、四方の腿せた自壁はみんな片面ガラスで垂れさがった電球のミルク色の球型の傘にはどれもマイクが仕込まれているような感じがする。

どうかな？

すべてのモルモットの舌の先にある疑問。

ここの図書の購入係はインテリア・デザイナーより趣味がいい。なんとなれば、一冊ではなく二冊でもなく三冊も「スイスの高原」が書架にあったからだ。おまけに、神もご照覧あれ、「ジェラード・ウインスタンレー、ピューリタン・ユートピスト」まで。「高原」を通読したところ、嬉しいことに一つも誤植がなかったが、フェティッシュな詩の配列に誤りがあった。

追追記

読むのに苦労している。本を手にとるのだが、二、三節で興味が失せてしまう。次から次へとわきに押しやる。パルグレイヴ、ホイジンガ、ローウェル、ウイレンスキー、化学のテキスト、パスカルの「プロヴァンス書簡」、タイム誌。(恐れていたとおり、現在では戦術核兵器が用いられている。オマハで抗議に立ちあがった学生が二人殺された) こんなぞわそわした気分になったのはバード大の二年の時に一学期に三回専攻を変えた時以来だ。

眩暈が全身を冒している。胸にはぼっかり空洞があり、のどはからから、まったくとんでもない時に笑いだしたくなる。

つまり、何がそんなにおかしいのか？

六月四日

しらふの二日酔い。

ハーストのリクエストどおり、移行期の出来事を記述することにする。願わくは彼への反証とならんことを。

「蚕の唄」の翌日 五月二十日になるはずだ まだ加減が悪くて房に残り、ドニイとピーター(もう仲直りしていた)とマフィアは作業に出ていた。スミードの部屋へ呼び出され、身の回りの品の人った包みを受けとった。彼は私にそれを入所した日に作った目録と一つ一つ突き合わせさせた。やけどしそうなほどに沸きあがる希望。抗議の世論が法の良心か、何かの奇跡が私を解放したのではないかと想像した。スミードが私と握手し、喜び狂った私は彼に感謝した。目に涙をうかべて。

あの野郎、さぞかし面白かったにちがいない。

彼はそれから私を、囚われの肉体と同じ病的な黄色の封筒(サケッティ身上調書というやつだろう)と一緒に二人の衛守に引き渡した。黒い制服に銀のふちどりがあってとても

ドイツ的で、言い慣わしに従うなら、ごっつい。膝までのブーツ、なめし革製の本物の装具、ミラーサングラス、揃い一式。ピーターなら羨望の、ドニイなら欲情の、うめき声をもらしただろう。一言も口をきかず、職務一直線。手錠。カーテン付のリムジン。私は二人にはさまれて坐り、石のような顔とおおいのかけられた眼を不審に思った。飛行機。鎮静化。かくして、パン屑の道しるべさえもないルートを経てこのキャンプ・アルキメデスの結構な小独房へ。ここでは魔法使が極上の食事をふるまってくれる(ベルを鳴らすだけでルームサービスのご入来)。

ここへ着いたのは二十二日だとのこと。HHの最初の接見がその翌日。あたたかい励ましと頑強なはぐらかし。ご承知のように私は六月二日までコミュニケーション不能状態だった。そんな九日間でパラノイアの最高天で過ぎたわけだが、あらゆる熱情の例にもれず、衰え、弱まってありきたりの月並な恐怖になり、そして不安まじりの好奇心に変わってきた。告自すべきだろうか、どんな状況でもそれなりのたのしみは得られるものであり、どうせなら不思議なお城のほうが昔なじみの地下牢よりはやはり興味深いのだと？しかし誰に告白するのか？ HHに？ 今ではほとんど毎日、鏡で対決せねばならないレイ二世にか？

いや、あくまでもこの日誌は私だけのものだというふりをすべきだ。私の日誌なのだ。

ハーストがコピーを欲しいのなら、ハーストはカーボン紙を支給せねばなるまい。

追記

「蚕の唄」を読み返してみよう。五行目はこれでいいのだろうか。陰にこもった情感の効果が欲しい。たぶんこれでは常套句にしかっていない。

六月二日

ハーストが オフィス間メモ で知らせてくれた。私の使っている電動タイプライターはマスター＝スレイヴ連動装置に組みこまれていて、タイプするものはすべて自動的に別室で第二、第三、第四の増刷をうみだしているという。HHは刷りたての日誌を手に入れているわけだ。私にカーボン紙を支給せずに済ませて、それで浮く費用のことでも考えているのだろう。

きょう、年代記風に綴るに値するものがここにもあるということの、最初の証拠がみられた

ハイファイ装置(B & Oか、それ並み)にかけるテープを取りに図書館へ行く途中、わが新たなる地獄のこの圏に住まう霊の一人に遭遇した。ダンテ流の、しかるべき順序どおりに経めぐっていくのだとしたら第一の獄 リンボー ということになり、あの男

は、アナロジーをもう少し拡張するなら、この幽冥の辺境のホメロスということになるだろう。

実際、暗かったし、というのはあたりの廊下の部分の蛍光灯がとりはずされていたからだが、森の小径さながらにたえず一定の冷風が純粋ユークリッド空間を吹きぬけていて、何か通気システムに変調があったのだと思う。男は行く手を遮適ようにして立ち、顔を手に埋めていて、トウモロコシの穂の毛のような白い髪を神経質な指にからませて、身を揺るがし、自分に囁きかけていたように思う。かなり近寄っても男が瞑想からめざめないで、「やあ」と声をかけてみた。

それでも何の反応もないので、もっと大胆に、「ぼくは新入りでしてね。スプリングフィールドで囚人でした。兵役拒否で不法にもここへ連れてこられたんですよ。何のためかは神のみぞ知るところですけど」

彼は顔から手をはなして私を見た。眼をしかめ、もつれた髪の間から。幅の広い、若い顔だった。スラブ系で、飾らない。エイゼンシュテインの史劇の傍役のヒーローの一人といった感じ。幅広の唇が開いて、冷たい、まだ附におちないような微笑になり、舞台の月の出のようだった。右手をあげて私の胸の中央に三本の指で触れ、まるで私の実在を確認しようとするかのようなようだった。それを確かめると、微笑に真実味がこもってきた。

「ご存じありませんか」私はせつつくようにたずねた。「ここはどこなんです？ われわれはどうなるんです？」

曇ったような眼が端から端へと動いた。どぎまぎしたのか不安のせいかな、私にはわからなかった。

「どこの都市です？ どの州です？」

またもあの寒々しい認識の微笑。私のことばが彼の理解への長い道のりに橋をかけたようだった。「そうだなあ、いえるのはせいぜい山間の州のどこかだってことぐらいだな。そのタイムのおかげだよ」彼は私の手にしていだ雑誌を指さした。ひどく鼻にかかった中西部説りの発音で、教育や旅行で矯正された様子もない。風、朱に加えて話しぶりも典型的なアイオワの農村青年だった。

「タイムのおかげ？」私はやや面くらってききかえした。そして表紙の顔を（北マレーシアのフィー・ファイ・フォー・フム将軍が誰か、黄禍だったが）まるでその人物が説明してはくれないものかというように見たのだった。

「そいつは地方版だろう。タイムはいくつかの地方版を出してるんだ。広告の都合でね。で、おれたちの手に入るのは山間州版ってわけさ。山間州というのはアイダホにユタ、ワイオミング、コロラド……」とギターを弾く弦でもかき鳴らすように列挙していく。

「あ！ そうか、もうわかりましたよ。ぼくも鈍いなあ」

彼は深々とためいきをついた。

私が手をさしだすと、彼は気乗りせぬ様子を隠さずにそれを見た（一部の地方、特に西海岸では、細菌兵器のせいで握手はもはやよき挨拶とはみられていないのだ）。「サケッティといいます。ルイス・サケッティ」

「あ！ あ、そうか！」彼は痙攣したように私の手をとった。「あなたが来るってモルデカイがいったんだ。お会いできてとてもうれしいです。なんていったらいいのか」急に黙りこんで真赤になって手をひっこめた。

「ワグナーです」と思い出したようにぼそぼそという。「ジョージ・ワグナー」それから、ちょっと自嘲的に、「でもお聞きになったことはないでしょうね」

この種の前口上には、朗読会やシンポジウムなどでリトルマガジン作家や大学の助手、私よりまだ格下の連中相手に何度もお目にかかっているのだから、私の反応はほとんど自動反射的なものだった。「どうもそうらしいね、ジョージ。残念ながら。驚いたなあ、本当にきみがぼくの名を聞いたことがあるなんて」

ジョージはくすくす笑った「彼が驚いた……」ゆっくりとひっぱるようにいう。「……本当に……ぼくが彼の名を聞いていたんで！」

これには少なからず困惑させられた。

ジョージは眼を閉じた。「すみません」と、ほとんど囁くようにいった。「光です。光が明るすぎるんです」

「きみがいったモルデカイというのは…？」

「ぼくがここへ来るのが好きなのは風のせいです。また息ができる。風を吸いこめる。ほっとして」それとも「そっとして」といったのだろうか。続けてこういった。「静かにしていると彼らの声が聞こえる」

私はとても静かにしたが、聞こえるものといえば貝殻の中の海鳴りのようなエアコンの音、部屋の連なる通路を吹きぬけていく冷気の荒涼たる風音だけだった。

「誰の声？」少しぞくっとしながら訊いてみた。

ジョージは白い眉をひそめた。「え、天使たちですよ、もちろん」

狂っている、と私は思った　そして、ジョージが私の詩を引用してみせていたのだと気がついた　私が「ドゥイノの悲歌」に対しておこなった本歌取り兼パロディなのだ。このジョージが、純朴なアイオワの若者が、私の詩集未収録作品の一節をこうも軽がると引き出してみせようとは、彼の気がふれているのだというような単純な推測などよりもはるかに私を動揺させることだった。「あの詩を読んだのか？」と私はたずねた。

ジョージはうなずき、するとまるではにかんだようにトウモロコシの穂の毛のもつれが光沢の弱い眼にかぶさった。

「あまりいい作品じゃないよ」

「ええ、そう思います」ジョージの手が、今までは背中では結ばれあっていたのが、顔のほうへと徐々に上昇しはじめた。眼にかぶさっている髪をはらいのけるところまで行くと、ひたいのてっぺんで畏にでもかかったように動かなくなった。「でもこれは本当ですよ……彼らの声が聞こえるんです。沈黙の音が。それとも息吹きか、どちらでも同じですけど。モルデカイは呼吸も詩だといってます」手がゆっくりと光の弱い眼の前まで降りる。

「モルデカイ？」ややもどかしさをこめて私は繰り返した。この名をいつかどこかで聞いたことがあるような、そんな印象をふりはらうことができなかった。今もできない。

だがそれは、潮流によって抗し難く運び去られていくボート上の人間に話しかけるようなものだった。ジョージは身をわななかせた。

「行って下さい」彼は唾いた。「お願いします」だが私はすぐに立ち去らなかった。彼の前にしばらく立っていた。しかし彼はもう私のことをすっかり忘れてしまっているようだった。そっと前後に身をゆすっていた。踵から足の指のつけねへ、そしてまた踵へと。ほそい髪が通風孔からの着実なヒューと鳴る排気にそよいでいた。

彼は声に出してひとりごとをいっていたが私にとらえることのできたのはほんのわずかだけだった。「連鎖する光、通廊、階段……」単語には耳慣れた響きがあったが、私はそれを位置づけることができなかった。「存在の空間と至福の遮蔽」

不意に彼は顔から両手を離し、私をみつめた。「まだいたんですか？」と問うた。

すると、答は自明だったのに、私は、うん、まだいたんだよ、といった。

通路の薄闇の中で彼の虹彩は拡がっていた。たぶんそのせいだろう、彼はひどく悲しげにみえた。またも私の胸に三本の指を置いた。「美は」と彼は荘重にいった。「われわれがかろうじて耐えることのできる恐怖の始まりにほかならない」そしてこのことばとともにジョージ・ワグナーは相当な量の朝食のすべてをあの純粹ユークリッド空間に吐きもどしたのだった。ほとんど直ちに衛守たちがわれわれを、この黒い母鶏のヒナどもをとりかこんで、ジョージに口をすすがせ、あたりをモップで掃除し、二人をそれぞれの方向に導いていった。私にも何か飲むものをくれた。トランクライザーだろうと思う。でなければこんなふうには気を鎮めてあの出会いについて書きしるしてなどはいられないはずだ。

だがなんと不思議な男だったことか！ リルケを引用する農村青年とは。農村青年でもホイッティアぐらいは、あるいはカール・サンドバーグまでも、暗誦するかもしれない。しかし Duineser Elegien となると？

六月六日

三四号室

と無感覚なステンレスの番号がが無味乾燥な薄いろ材の扉に貼りつけられ、その下方には、四角い黒のプラスチック板に彫られた白い文字(ちょうどあの銀行の窓口に置かれていて片側に係の氏名がありもう一方に 隣の窓口へどうぞ とあるのにそっくりな)

Dr・A・バスク

看守たちは私を中へ案内すると、二つの椅子の厳しい保護に委ねた。クロムめっきの鋼の枠組から蜘蛛の巣状にぶらさがったこの黒い革製の椅子は、しかし看守たちの精華を抽出したもの いわば花の香油 にほかならなかった。ハーレー・ダビッドソン製作になる椅子。ハードな描線の絵画が幾つか(こんな椅子を嘉して選ばれたものだ)壁にぺったり貼りついていて、不可視になることを渴望していた。

ドクター・A・バスクは大股で部屋に入ってきて私に迫るように手をさしのべる。握手に応じるべきなのか? いや、彼女はただ席に着くよう手真似で示しているだけなのだ。

私が坐ると彼女も席に着き、脚を組んでひょいひょいとスカートのへりをひっぱりながら微笑する。ちょっと薄すぎてきっぱりしすぎていて、優しいとはいえないにしても確かな微笑だ。高くてすっきりとしたひたいと、でしゃばらない眉はエリザベス朝の高貴な婦人のもの。四十歳? むしろ四十五といったところか。

「ごめんなさい、お手をさしだせなくて、サケッティさん、でもそんな偽善は最初から排除しておいたほうがお互いにずっとうまくやっていけるでしょう。あなたはここで休暇をすごしているわけじゃないんですものね? あなたは囚人、そしてわたしは.....何かしら? わたしは監獄よ。これが、しごく快適とはいかないにしても正直な付き合いの始まりというものでしょう」

「正直ということになると、ぼくもあなたに失礼なことをいっていいのかな? 」

「罰はございませんことよ、サケッティさん。売りことばに買いことば。ここでなさろうとお暇な折に日誌の中でなさろうと。わたしのもとへ第二の写しが送られてきますから、ご心配なく、どんなに不快なことをおっしゃろうと決して無駄にはなりませんわ」

「こころしておきましょう」

「ところで、二、三わたしたちがここで行なっていることについて知っておいていただきたいんですけれど。きのう、ワグナー青年にお会いになりましたわね。ところが日誌上では、彼のかなり注目すべき振舞いについては一切のスペキュレーションをきっぱり自制してしまっている。何かお考えになったにちがいないのに」

「なるほどそうにちがいない」

ドクター・A・バスクは唇をゆがめ、クリップボードにはさまれた封筒をぎざぎざの指の爪でたいた。サケッティ身上調書、再び登場。「遠慮はぬきにしましょうよ、サケッティさん。ジョージ青年の行動が完全に一貫したものではないということはあなたも注目なされたにちがいないし、そんな一貫性のなさを、わたしの同僚のハースト氏が洩らしたここでのあなたの役割についての発言と関連づけて考えてみたにもちがいない。彼は、まあ、うっかり洩らしたわけじゃないんですけれどね。要するにあなたはこう疑うようになったにちがいないのよ、ジョージ青年はここで行なわれている実験計画の被験者 対象のひとつではないのか、ってね？」彼女は控えめな、もの問いたげな眉を上げた。私はうなずいた。

「まさかここまででは思い到らなかったでしょうけれど だからたぶん、知れば気が楽になるんじゃないかしら？ ジョージ青年は志願してここへ来たんですよ。彼、台北で休暇中に軍隊を脱走したのよ。兵隊と娼婦によくある、みじめったらしいお話。もちろんみつげだされて軍法会議にかけられたわ。判決は五年の懲役。寛大な判決よ、それはあなたも認めるでしょう。正式な交戦中だったら、射殺されていたかもしれないんですものね。ええ、きっとそうになっていたはずよ」

「すると、軍なのか、ぼくを誘拐したのは？」

「正確にはそうじゃないわ。キャンプ・アルキメデスはある私的な財団からの援助のもとに運営されているのよ。ただ、秘密保持の必要上、かなり自治性が強いけれど。財団の役員で、わたしたちの研究の本質を正確に知っているのは一人だけ。あとの役員たちにとってまた、軍にとっても ここでのことは兵器開発というあの何でも包括してしまえるカテゴリーに入っちゃってるわけ。かなりの数の人員が 衛守の大半と、それにわたしもだけど いわば借り入れられているのよ、軍からね」

こんなご教示、彼女の属性のすべて ごしごし磨きたてられた顔、糊のきいた身ごなし、男性化した声 が合わさって、ひとつの有力なイメージになった。「あなたはWACの隊員なのか！」

これに対する答は、皮肉な敬礼だった。「それで、話を元に戻すと、かわいそうなジョージは営倉入りしたわけだけど、そこでめでたしめでたしとはならなかった。彼は、わたしの同僚のハースト氏の口ぐせを借りるなら、適応することができなかったのね、営倉の環境に。キャンプ・アルキメデス入りの志願の機会が訪れたとき、彼はそれにとびついた。なにしろ、近頃の実験というのは大半が免疫学の方面のものだし、新しい病気の中には極端に不快なものもあるわけだから。というのがジョージ青年のお話。ほかの被験者たちにも会うことになるでしょうけど、来歴はおして知るべしってところね」

「この被験者はそうじゃない」

「あなたは実験材料じゃないわ、正確にはね。でもなぜここへ連れてこられたのかを知るためには、まず実験の主旨を理解してもらわなきゃならないわね。これは学習プロセスについての調査研究なのよ。国家の防衛努力という面での教育の根本的な重要性は、あらためて説明するまでもないでしょう。窮極的には知的能力なのよ、一国の最も重要な資源となるのは。そして教育は、知能を最大限にまでひきあげるプロセスとみることができる。ところが実際にはほとんど例外なく失敗に終わっている。それはこの第一の目的が社会への適応という目的の犠牲になっているからなのよ。知能が最大化される場合には、ほとんど常に社会適応のプロセスが犠牲になっている。この点に関しては、あなたのケースを例にあげてもいいんじゃないかしら。そうなると、社会のほうから見ればほとんど得るところがないということになってしまう。きびしいジレンマね。

このジレンマを解消して、社会的な有用性をそこなうことなしに知能を最大化すること、これこそが心理学という学問の主要な任務じゃないかしら。これで明解といえるかしら？」

「キケロその人だってこれほど純粋なラテン語の語法を持っちゃいなかったでしょうな」

La・バスクは意味が掴めなくて、高い、眉墨をひいていない眉にしわを寄せたが、やがてこれは要するに反社会的な軽口で追求するほどのものでないと判断したらしく、寄せたでこぼこを解消して話を続けた

「そういうわけでわたしたちはここで新しい教育法の開発に取り組んでいるわけなのよ、成人教育のテクニックの開発にね。おとなの場合には社会化のプロセスは完成している。二十五歳を過ぎて著しい人格形成を示す被験者はほとんどいない。だからもしそこで知能の最大化のプロセスを開始させることができれば。いわば、ないがしろにされていた創造的な素質を目覚めさせることができたなら。そのときわたしたちは、これまで一度も活用されたことのないあの最も貴重な資源、つまり心を開発できるようになるんじゃないかしら。

不幸なことに、わたしたちに与えられる研究材料は欠陥品ばかりだった。実験材料の供給を軍の営倉に頼らざるをえないとなると、どうしてもそこに一定の偏向が持ちこまれてしまう。そんな連中の場合、明らかに社会化のプロセスが失敗していたわけですものね。そこで、思いきり遠慮なくわたしの意見をいわせてもらえば、そんな選択上の歪みのせいですでに不幸な結果が出はじめている。これをあなたの日誌に書きとめていただきたいわけなのよ」

私はそうしようと彼女に請けあった。それからこらえきれずに。おかげでどんなに好奇心をそそられてしまったのかを示して、彼女を満足させたりはしたくなかったのだけ

ど こう質問した。「新しい教育のテクニクというのは、つまり薬品のことだと思っ
ていいのかな？」

「あら、あら。だったら少しはこの問題について考えてくれたわけね。そう、たし
かにドラッグよ。あなたが想像しているような意味でのものとはたぶん違うでしょうけれ
ど。近頃では大学の一年生なら誰でも知っていることだけど、法律の枠の外から入手され
るドラッグの中には、記憶力を一時的に二百パーセントも拡大できたり、ほかの学習プロ
セスをその割合でスピードアップさせたりするようなものがある。でもそんなドラッグの
場合、連用していると学習曲線のカーブがにぶってきて、やがては効率漸減点に達し、し
まいにはまるで効かなくなってしまう。そんな薬もあれば、また別な、たとえば LSD の
ようにうわべだけの全知の感覚をもたらすものもある。でもそういうドラッグについて
は、あなたにお話するまでもないでしょう、サケッティさん？」

「そいつもぼくのプロフィルに入っているのかい？ 何でもお見とおし、といわざるを
えないね」

「あら、あなたについて存じ上げないことはごくわずかでしてよ。あなたがここに連れ
てこられる前に、もうお察しでしょうけれど、わたしたち、あなたの過去の小さな汚れた
裂けめまですっかり調べ上げたんですよ。ただの兵役拒否者を連れてくるというんじゃ
なかったんですよ。あなたが無害だってことを確かめなきゃならなかったもので。あ
なたのことはおもても裏も存じてましてよ。学校や親戚、友人、何を讀んだか、どこへ
行ったか。フルブライト留学資金でスイスやドイツへ行った時に泊ったホテルの部屋もみ
んなわかっている。バード大の頃やその後にデートした女の子たちのこと、それぞれとど
の程度まで行ったかってこともね。あまりご立派な品行だったとは、とても申せませんこ
とね。それにこの十五年間にどれだけの収入があったか、それをどうつけたかというこ
とも実に詳しくね。政府の気持次第では、脱税のかどでスプリングフィールドへ逆戻りと
いうことにもなりかねませんわね。二年間の心理療法の記録も手に入れてますし」

「懺悔も盗聴したのかな？」

「スプリングフィールドに入ってからだけですけれど。おかげで奥さんの中絶のことや、
あのミス・ウェッブとのいやらしい関係のこともわかったわ」

「でも美人だったろう？」

「おつむの弱いタイプがお好きならね。でも今はビジネスの話に戻りましょう。ここで
のあなたの仕事は実に単純なものよ。被験者たちの中にまじって彼らと話し合い、できる
かぎり日々の生活を共にしていただくことになります。そして、簡潔に報告してくだされ
ばいいのよ。彼らの心を占めている問題だとか、彼らの娯楽、そしてあなたご自分で評
価する……何ていったらいいのかしら？……ここでの知的風土といったようなことをね。

この作業、あなたのお気に召すんじゃないかしら」

「たぶんね。でもなぜぼくが？」

「被験者の一人が推薦したのよ。さまざまな候補者を検討した中で、あなたが最もこの仕事に向いているらしいということになったわけーそれに、いちばん手がかからないでしようね。白状すると、わたしたちはずっと……被験者とのコミュニケーションの問題で手をやいているのよ、そこへ彼らの中心人物が　モルデカイ・ワシントンというんだけど　提案してきたのね、あなたをここへ連れてきて、いわば仲介者、通訳になってもらったらどうかって。モルデカイのこと、おぼえていて？　五五年に一年間だけ同じ高校に行ってるんだけど」

「中央高校かな？　名前にはおぼろげに聞きおぼえがあるような気がするけれど、はっきりしないな、出席簿で読み上げられるのを聞いたのかもしれないけれど、友人じゃなかったよ。名前を忘れてしまうほど大勢の友だちを持ったことはないし」

「ここにはその穴埋めをする機会はたっぷりあるわ。まだほかに質問はございますか？」

「うん。A というのは何の略ですか？」

彼女はきょとんとしていた。

「ドクター・A・バスクのさ」と私ははっきりさせた。

「ああ、そのこと。エイミーの略よ」

「それから、ここに資金を供給しているのはどういう財団？」

「いってもかまわないけれど、ねえ、サケッティさん、知らぬが仏よ。被験者たちにも指示してあるんですよ、あなたのために。事柄によってはあなたと話し合わないほうがいいこともあるって。だってあなたは、いつかはここを出たいと思ってらっしゃるんでしょう？」

ドクター・エイミー・バスクはしゅるっとナイロンのきぬずれをたてて、組んでいた脚をとくと立ちあがった。「衛守たちがすぐに上の階までお送りいたします。遅くとも来週またお会いしましょう。それまででも、わたしの答の欲しい質問がございましたら、どうぞ遠慮なくおこしてください。では、サケッティさん」きびきびした鉄のような歩調で三歩進むと、彼女は部屋を出ていった。このラウンドのポイントを総ざらいして。

追記

日誌の出だしをタイプして一時間とたたぬ間にHHからメモが届いた。「彼女は三十七だ。HH」

部局間の対抗意識？（答は無用）

六月七日

私の偏頭痛は明らかに心身相関的なものだから、精神療法で悪魔払いできたと思っていたのだが、ゆうべ猛烈なしっぺがえしを伴ってぶりかえしてきた。以前の痛みが一とすれば、今は七だ。たぶん La・バスクは、神秘への手ほどき係として、ドクター・ミエリスの治療への何らかの対抗呪文を働かせることができたのだろう。あるいは単に、駄文書きの発作のせいで二時すぎまで起きていたためなのか。私はまだ、できた作品にそれだけの価値があるかどうかを判断できるほどの距離を得ていない。だが誰が知ろう？ たぶん偏頭痛こそが詩をもたらしたのだと。

精神生活はまあそのくらいにして、この目の特記すべき出来事とはいうと、朝食（正午の）直後の、伝説の人モルデカイ・ワシントンのご到米だ。衛守の先づれもなしにやってきて、ノックはしたがどうぞというのを待ちしなかった。「いいかな？」と訊きはしたがそのときにはもう入ってしまった。

面と向かいあっても、また彼の声、偏頭痛にがんがん響く大声を聞いても、これがくだんの高校時代の友人だとは、また誰であるのかもわからなかった。

第一印象　。器量はよくない。私の美の規準が白人中心のものであることは認めよう。しかしそれでも、モルデカイ・ワシントンを見ればとみるニグロがそんなにいるとは思えない。とても黒くて、ほとんど黒紫といえそうなくらいだ。おもながで、あごが突きでて、唇は塗りたての漆喰のよう（しかしこちらは突きでるといよりは、むしろ顔に押しつけられたようにひしゃげている。垂直な唇、とでもいえようか）、鼻は極小、もじゃもじゃのネオ・マオリ・ヘア。胸は一世紀前なら肺病やみといわれたろう。なきにひとしい肩、がにまたの脚、でか足。砂利をひっかきまぜるような声、これは人形芝居のせむし男パンチにそっくり。しかし眼は綺麗だ（だが醜い連中にこれを認めるのはいつの場合にもたやすいことだ）。

それでも、これは桁はずれの眼だといわずにはすまされない。潤んでいると同時に生きいきして、奥の深さを暗示はするが決して顕示はしない、矛盾した眼なのである。

「いや、そのまま、そのまま」と彼はベッドから出ようとする私を制した。部屋の端からひきずるようにして椅子をベッドの脇に寄せる。「何を讀んでるんだ？ ああ、絵本か、あんたがとっくにここへ来てるのに、誰もいってくれなくってね。ジョージの話でわかったんだ。残念ながらおれはここんところ……」と頭の上でそれとなく手をふった。（彼の手は、足と同様、不釣合に大きかった。指は先ひろがりにそりかえっていて職工ふうだが、動きは敏捷で、はためかんばかり。しぐさはとかく演技過剰になりがちで、のっぺりと無表情な顔の埋めあわせをしようとしてもするかのようだ）「……ちょっとイカれていて

ね。ダメだったんでね。沈滞しててね。昏睡しててね。けどもうすっかりよくなったよ。で、あんたがここにいる。うれしいよ。おれ、モルデカイ・ワシントン」

厳肅に彼は手をさしだした。私はこのジェスチャーにあるイロニーを感じないではいらなかった。これに応じれば、私はこの喜劇役者の引立て役を演じることになってしまうのではないかと、そんな気がしたのだった。

彼は笑った。かん高い、オウムのような笑い声で、話し声より二オクターブ高い。まるで、笑う部分だけ別人が代演しているかのようだった。「おや、さわってもいいんだぜ。汚い徴菌を移したりはしないさ。そうじゃござんせんよ、大将」

「そんなことは思ってもみなかったよ……モルデカイ」(見知らぬ相手に気軽にファーストネームで呼べたためしがない)

「おやまあ、おぼえててくれるとは思ってなかったぜ。まあ、悪い気はしないもんさ。そんなに tutoyer してみせなくてもいいんだぜ、まだ」これは底知れぬフランス語で。「けど、おれはあんたをおぼえてた。直観像というやつさ、恐怖映画の一つの場面が目には焼きついちまうみたいだね。たとえば『サイコ』とか。あんた『サイコ』をおぼえてるかい？」

「うん、浴槽のシーンをね。あの頃のぼくはトニー・パーキンスに似てたかい？ とんでもない」

「あんたはあんたなりに恐ろしかったさ。おれにとっちゃな。おれたちはホームルームが一緒だった。スキンリン先生だよ、おぼえてるかい？」

「スキンリン先生！ うん、ぼくは大きらいだったよ、あの女」

「でぶの赤毛の婆さんで あんたが嫌ったよりもおれのほうがずっと憎んでたぜ、兄弟。あいつのおかげでおれの英語は 10-C さ。サイラス・マーナー、ジュリアス・シーザー、老水夫行。なんてこったい、おれはこのくそつたれな国語をしゃべるのをほとんどやめちまったくらいだぜ、それほどあいつのせいでいやになっちまったんだ」

「ぼくと『サイコ』にどんな共通点があったのか、まだ説明してもらってないんだけど」

「まあ、代わりに『ドノヴァンの脳髓』でいこうか。ガラスのタンクの中の脳みそさ。蛸みたいな知性体がさ、奨学金を嗅ぎまわってさ、答はみんな知っていて、スキンリンたちがシャベルで投げこむ糞を全部がつがつむさぼってさ。セルベラス級のセレブラムだよ」地獄の番犬ケルベロス級の脳か。せつかく気のきいたことをいったのに、単語の発音を二つとも間違えたので台なしになってしまった。

「それにあんたは、そうしたいときにはスキンリン婆さんみたいな連中をぎゃふんといわせることができた。おれはというと、ただ坐りこんで奴らの糞を受けとらなきゃならなかった。糞だったことはわかってたさ、けどどうすりゃいいというんだい？ 手も足も出やしなかったよ。」

あんたのことで、おれの胸にぐさりと突き刺さったのは　くそ、おかげで人生変わっちゃったんだぜ！　五五年の春のある日のことさ、あんたが、いつもまわりにはべらせていたユダヤ人のスケを二人ばかり従えてさ、放課後にペチャクチャやってたんだよ、ゴードがいるかいにかについて。あんたがそう呼んだんだぜ　ゴードってな。あんたはあの頃、ほんとに嘘っぽいアクセントをしてたよ　ロレンス・オリヴィエの映画のみすぎのせいだろうな、きっと。おれはお仕置きをくらって部屋の奥に坐ってたんだ。暗くてさ、人目につかなくてさ、おれの人生みたいに。どうだい、少しはよみがえってきたかい？」

「その日に限ったことじゃないんだ。あの年にはやたらとゴードについて吹聴していたよ。啓蒙、ということになるのかな、そんな発見をしたばかりだったのさ。でも女の子たちのことはおぼえているよ。バーバラと　もう一人は誰だった？」

「ルースさ」

「すごい記憶力だな」

「そのほうがあんたにくらいつくのには便利でござんしてね。それはともかくとして、話を戻すとあの二人のスケが古めかしい議論を持ちだしてさ、宇宙は時計みたいなもので、時計というのは時計職人がいなきゃできない、ってやつさ。造物主は第一原因なり、他の原因が原因するにあらず、というやつだよ。あの日までおれは時計作りのことなんて聞いたこともなかったよ。それで、スケどもがこれを持ちだしたときに思ったね。『さあ、これで、おなじみのドノヴァンの脳髄もおしまいだぜ』って。ところがどっこい　あんたはそんなガタピシした三段論法を」　またまた発音違い　「こっぴみじんに打ち砕いちまったんだ。スケどもにゃそれはわからなかったさ、古くさいごたくを並べているだけだったんだからな　けど、おれにはわかったんだ。あんたはおれをつまずかせ、あの昔の信仰からころがりださせてしまったんだよ」

「すまない、モルデカイ。本当にすまないと思う。気がつかなかったのだよ、いかに人が自らの過ちと思いなす所業によって、多くの他者の生まで毒してしまえるかを。どう詫びたらいい心のか　」

「すまない？　おいおい、おれはあんたに感謝してたんだぜ。妙ちくりんな感謝の仕方と思えるかもしれんがね、こんな地中の穴ぐらへハイジャックしてこさせたりするなんて。けど今頃スプリングフィールドで送っているよりはいい暮らしだろう。あそこであんたがつけてた日誌をハーストが見せてくれてね。あそこを出てよかったんじゃないのかい。あんたをここへ連れてくるようにおれがハーストに頼んだのは、愛他心だけによるわけじゃなかったってことは認めるがね。おれにとってもビッグチャンスだったのさ、第一級の、本物の、詩集が出版されてる詩人に会えるなんて。ほんとに立派になったもんじゃ

ないか、え、サケッティ？」彼がこの一つの問につめこんださまざまな感情をえり分けるのは不可能だ。賞賛もあれば軽蔑や嫉妬もあり、また　これはモルデカイが私にいったほとんどすべてのことにみられるのだが　傲岸な喜悦とでもいうようなものがある。

「という、『スイスの高原』を読んだわけかな？」と私は返礼した。相手のことばのほしをとらえる最初の機会を掴むのなら、作家の虚栄心におまかせあれ！

モルデカイはあるかなしかの肩をすくめた。「ああ。読んだよ」

「だったらぼくがああ頃の青くさい唯物論から脱却したことは知っているわけだ。神は、アキナスにはまったく関わりなく存在する。信仰は三段論法の修得以上のものなんだ」

「信仰くそくらえ、あんたの警句もくそくらえだ。あんたはもうおれのビッグ・ブラザーじゃない。おれはあんたの二年先輩なんだぜ、お仲間さんよ。あんたのその後の篤信につづいていうなら、おれがあんたをここへ連れてこ、させたのは、それにもかかわらず、なんだぜ。また、なにやらけったくそわるい詩にもかかわらず、だよ」

たじろぐ以外に何ができたろう？

モルデカイは微笑した。彼の怒りは、表出するとたちまち消えうせてしまっていた。

「なにやらけったくそいい詩もいくつかあったがね。あの本は、全体としちゃあおれ以上にジョージが気に入ってたな。こういうことについてはジョージのほうがよく知ってるしね。一つには、奴のほうにここに長くいる。あいつのこと、どう思う？」

「ジョージのことかい？　彼は……とても烈しかったな。あんなにも何もかもいっぺんには、ぼくはとても応じきれなかったんじゃないかな。いまでも難しいと思うよ。ここではみんな、ずいぶん気ままなんだな。スプリングフィールドの完全な真空状態のあとでは、特にそう感じるよ」

「むちゃくちゃにな。ところであんた、IQはいくつだい？」

「何になるというんだい、この齢になってIQの話なんかして？　五七年にあるテストで一六〇をとったことがあるけど、そんな標準曲線でどこまでぼくを測定できるのかはわからない。でも今、印刷したテストがどんな違いをうむというんだい？　問題は、自分で自分の知能をどうするか、それがすべてだろう」

「ほう　そいつは嫌味かい？」彼がこれをさらりと受け流したところから、私はどうやらこの会話ではじめて、モルデカイが何らかの真剣さをもって考えているテーマに自分がふれたような気がした。

「きみはここで何をしているんだい、モルデカイ？　この、ここで。それにここは何なんだ？　ハーストやバスクはきみたちから何をしようとしているんだ？」

「ここは地獄さ、サケッティ、知らなかったのかい？　というか、その控えの間だな。奴らはおれたちの魂を買い占めようとしてるのさ、それで肉体をソーセージに使えるよう

にな」

「彼らはきみたちに、ぼくが知るべきではないことがあるといったそうだが　それが
そうなのかい？」

モルデカイは私から顔をそらせ、部屋の端にある書棚まで歩いていった、「おれたちや
鷺鳥さ、そしておれたちの食道にハーストとバスクは西洋文化をせっせと詰めこむ。科学
に芸術に哲学に、詰めこめるものなら何だってな。それでも

私は満たされない、私は満たされない
胃はあふれかえり、またあふれかえる
のに、それなのに私はおさえきれない
わが糧を、私は加減できないのだ、ああ！
私は満たされない」

モルデカイが引用したのは私自身の詩だった。私の反応は揺れ動いていた。一方では、
彼がこの一節を選んで暗論したことに、くすぐったい嬉しさをおぼえ（とても自慢に思っ
ている箇所だから）ながら、彼がいまいったことの中に、それは私が最初にいったものな
のに、それにもまして身にしむ辛辣さがあつたことを無念に思ったのだった。私は何も答
えなかった。それ以上質問もしなかった。

モルデカイはだらりと寝椅子に倒れこんだ。「この部屋はえらくまとまりがないんだな、
サケッティ。どの部屋も最初はみんなこんな具合だったが、なにも我慢することはないん
だぜ。もっと上等なのが欲しいとハーストにいつてやれ。カーテンが脳波に干渉してくる
んだ、ってな。ここじゃおれたちは室内装飾みたいなことには白紙委任をとりつけてるん
だ　いまにわかるがね。せいぜいそいつを活用するこつたな」

「スプリングフィールドに較べたら、これでも実に優雅なものに思えるけどね。それを
いうなら、これまでぼくが住んだどこに較べたって。リッツでの一日だけは、まあ例外に
しても」

「そうかい、詩人てのはそんなに稼ぎがよくねえのかい？　おれのほうがずっといい暮
らしをしてたってわけだ　兵隊にとられちまう前はな。どくされちんぼこ！　ありゃひ
でえ間違いだったぜ、兵役にひっかかちまうなんてな」

「きみは、ジョージと同じ道をたどってキャンプ・アルキメデスに来たわけなんだな、嘗
倉経由で？」

「そうとも。士官をぶんなぐってな。あのガキやあ、自業自得ってもんだが。奴らはみ
んないつだって求めてるんだが、決して受けとりゃしない。まあ、あのガキは受けとっ
たわけだがね。乳歯を叩き折ってやったんだ、二本ばかり。ひでえ格好だったぜ。嘗倉は

もっとひどい有様だった 意趣ばらしに寄ってたかってなぶりもんだ。それで志願したのよ。六か月、七か月前のこった。時どき思うよ、こいつはそんなにひどい間違いじゃなかったんじゃないかってな。これは、奴らがくれたものに対していうんだがね ありゃ効くぜ、エルエスなんてめじゃない。エルエスの場合だと何もかもわかったような気がするだけだ。こいつがあればほんとにわかちまうんだよ。けど、そんなにしょっちゅう、いいところもちになれるってわけじゃないんだぜ。たいがいは苦痛。HHのおっしゃるように 『天才とは苦痛を受けいれる無限の能力なり』」

私は笑った。彼のレトリックの緩急自在さにすっかり眩惑されながら、警句の底にあるものを噛みしめていた。

「けど、やっぱり間違いだったんだ。おれは低能のままにいたほうがよかったんだ」

「低能？ 実際にそんな状態にあったというわけじゃなさそうだけど」

「おれは百六十なんてIQを持ったことはなかったもんな。この原版は、な」

「なるほど、でもああいうテストはぼくみたいな中産階級のWASP用に考案されているからね。いや、むしろWASCというべきかな。知能の測定は血液検査みたいに簡単にできることじゃないよ」

「そういつてくれるのはありがたいがね、ほんとにおれはイカレポンチの低能だったんだ。おまけに、それ以上に無知だった。いまいろんなことがわかるのは、あんたとこんなふうには話ができるのは こいつはみんなあのPa 連中がくれた薬のおかげなんだぜ」

「みんな？ まさか」

「こんちくしょう、みんななんだよ！」彼は笑った。最初の時より静かな笑い方だった。

「あんたと話ができうれしいよ、サケッティ。あんたはおれの汚いことばにいちいちたじるぐ」

「そりゃそうさ！ これが、まあ、中流階級の躰というものでね。アングロサクソン系の単語で、印刷されたものにならかなり慣れているけれど、どういうわけか話しことばとなると……反射作用なんだろうな」

「あんたが見てるその絵本 ついてる文も読んだかい？」

私はウイレンスキーの「フランドルの画家たち」の第二巻を拾い読みしていた。これには図版が入っている。第一巻は文章だけだ。

「読みはじめたんだが、行き詰まってしまっただけ。まだ何かに集中できるほどおちついていないんだな」

これに対するモルデカイの反応は度はずれて真剣なもののように思えた。答えて何かをいったというわけではなくて、実際には一呼吸間をおいてから、最初の考えどおりに押し進んだのだが。「その中に恐ろしい一節がある。読んでやろうか？」すでに彼は書棚から

第一巻をとりだしていた。「ヒューゴー・ファン・デル・グースについてなんだがね。彼について知ってるかい？」

「最初期のフランドル派画家の一人だということだけはね。でも作品はみたことがないと思うよ」

「当然だよ。ひとつも残ってないんだからな。とにかく署名のあるのはひとつもない。話はというと、一四七〇年頃に気が狂って、やたら荒れ狂って、悪魔にとりつかれそうになったとか、そんなことばかりでね。その頃にはもうブリュッセルの近くのこの修道院に住んでいて、ブラザー連中は楽を奏して彼を鎮めようとしたんだな、ダビデとサウルみたいに。その連中の一人が彼の狂気のことを書いてて　ぜんぶ読むだけの価値はあるんだが　おれがほんとに好きな部分は……ここだ、こいつを読ませてくれよ

『ブラザー・ヒューゴーは火と燃える想像力の故に白昼の幻想や幻覚に向かう性癖があり、その結果、脳の病いを患うに至った。それというのは、聞くところによれば、小さなデリケートな器官が脳の近くにあることによるという。これは創造や想像の力で制御されており、われわれの想像が旺盛になりすぎたり空想が奔放になりすぎたりするとこの小さな器官が冒され、負担が限界に達すると狂気や錯乱がもたらされることになる。このような回復不可能な……』

モルデカイはこの単語を発音するときにつっかえた。

『……危険におちいらないようにするためにわれわれは空想や想像、疑念を制限し、その他いっさいの、脳を刺激するような空疎で無益な思考を排除せねばならない。われらはみな凡人にすぎぬ。かのブラザーの上に、彼の空想と幻想の故にあのような災厄がふりかかったのであれば、それがわれらの上にもふりかからぬといいきれようか？』

すごいだろう？　まったく、この爺さんのことは想像がつくね、こんなふう書いて気を休めてるんだ。『だからいったではないか、ヒューゴー！　そんな絵は危険だといつもいったであろうか？』けど、あんたは彼がなぜ発狂したと思う？」

「誰だって気が狂うことはあるさ。画家の特権じゃないよ。詩人のでもない」

「なるほど、そこまでくしゃあ、まあ、誰でも気持ちがいつてことになるだろうな。うちの連中なんか、見事に狂ってたもんな。マミーは　みんなこう呼んでたんでね、ご勘弁を！　マミーは精霊きちがいで、おやじは精霊なしの気持ちがいった。兄貴たちはヤク中でよ、それで狂っちまう。狂って狂って狂って狂って」

「どうしたんだ？」私はききながらベッドから起きあがってモルデカイに近寄った。彼はこの演説中に次第に昂奮がたかまって、遂には身を震わせ、眼をきつく閉じ、片手を心臓にあてて、ことばも衰弱して、窒息したような呼吸の雑音にすぎなくなってしまっていた。重い本が左の手から床へ落ち、この衝撃で眼が開いた。「おれは……大丈夫だ、しばらく……坐っていれば。ちょっとめまいがしただけ」

私は彼をソファにもたれさせ、ほかにましな薬もないのでコップに水をくんでくると、彼はありがたそうにそれを飲んだ。コップを持つ手がまだ震えていた。

「それでもな、いいか……」と彼は静かに話を再開した。コップの表面の縦みぞに、へらのような指先を這わせていた。「……ファン・デル・グースには何かがあったんだ。少なくともおれはそう思いたいね。もちろん芸術家特有の何かだ。「種の魔法だなー文字どおりの意味で。自然の記号を解きあかし、同じ-秘密を息吹きにして戻す。そんなもんじゃないのかい？」

「わからないな。ぼくの場合はそうじゃないと思う、そんなふうになるのが好きな芸術家も少なくないだろうけど。ただ、魔法で問題なのは、効いてくれないってことだよ」

「からっきしな」モルデカイは静かにいった。

「神をあざけてデーモンを信じるなんてことができるのかな？」

「デーモンたあ何だい？ 自然の霊なら信じるぜ。シルフ、サラマンダー、オンディーヌ、ノーム 自然の四大元素の象徴だな。あんたは微笑して、ふふんと笑って、大学の物理の居心地のいいジェスイット流の宇宙にぬくぬくとまるまっているがいいさ。物質について、あんたには何の神秘も残されていないのか、結構なこった！ 精神の場合とおんなじことだよ。みんなこぎれいでわかちまってるんだな、おふくろの味みたいになるほど、駝鳥だって宇宙でのほほんとしているわな、ただ駝鳥にはそれが見えていないがね」

「信じてくれ、モルデカイ、ぼくだってシルフやサラマンダーの世界にいられたらどんなに幸福なことか。どんな詩人だってそうだろう。きみは、ぼくらみんながこの二百年間、何に苦しんできたと思うんだ？ ぼくらは追い立てをくらってしまったんだよ」

「けどあんたはそれでもことばを鼻先であしらう。あんたにとっちゃロシアのバレエに、ベルの音にすぎないんだよ。だがおれは見たんだぜ、サラマンダーを、炎のまっただなかに住んでるのを」

「モルデカイ 炎が元素だという観念そのものがナンセンスなんだ。化学を一学期でもやればそんな考えは消え失せてしまうよ。高校の化学でいい」

「炎は変革の元素だ」昂揚した、陶然とした口調で彼はいった。「霊と肉の変容の元素だ。物質と精神の間の橋だ。ほかに何が住んでるんだ、あんたのでっかいサイクロトロン
の心臓には？ それとも太陽の中心に？ あんたは天使を信じるんじゃないのかい こ

の天体と最も遠い天体の間にいるものを。ところで、おれは連中と話をしたんだ」

「最遠の天体　ゴッドの住む、あれかい？」

「ゴードさ、ゴード！　おれは身近な霊のほうがいいがね　この連中は話しかけたら答えてくれる。手の中の二羽は藪の中の一羽の価値がある、というわけさ。けど、議論してもはじまらない。まだ今のところは。おれの実験室を見るまで待つこった。おたがいに理解しあえるように語彙を調整しなきゃ、シクとヌンの間で揺れ動き続けるだけだよ、くそつたれな終末の日まで」

「すまない　いつもはこんなに融通がきかないわけじゃないんだ。これは筋のとあった異議というよりはむしろメンタルな自己防衛がそうさせているんだと思う。きみのレトリックに身をゆだねて押し流されていくのもわるくないよ。これは、ほめてるつもりなんだけどね」

「てこずってるんだらう、おれのほうがおつむの回転がいいんで？」

「きみは困らなかったかい、モルデカイ、形勢がひっくりかえったとき、最初にぼくを知ったときに？　それに……」このことにいい顔をしようとして微笑みながら、「……きみのほうがいいのかどうかはわからないよ」

「いいや、おれのほうがいい、おれのほうが。信じるよ。なんならテストしてみろよ。いつだっていいぜ。武器の選択はあんたにまかせる。種目を選べよ、何だっていい。国王の在位年月日を知ってるかい、イギリス、フランス、スペイン、スウェーデン、プロシヤの？　フィネガンズ・ウエイクの坂をよじのぼるってのはどうだい？　俳句は？」

「ストップ　信じるよ。でも、ちくしょう、それでも一つぐらいは勝てる分野があるものさ、スーパーマン」

モルデカイは傲然と頭を上げた。「何だ？」

「正読法」

「うん、降参だ、正読法てな何だい？」

「正しい発音の仕方だよ」

ルシフェルは、天より墜ちてゆきながら、さほど当惑してはいなかった。「なるほど、なるほど、そうおいでなすったか。けど、こんちくしょう、そんな時間はありゃしないぜ。全部の単語の発音を調べておぼえるなんて。しかし、間違ったいい方をしたときには訂正してくれるかい？」

「詩人なら、ほかのことはともかく、それはお手のものであるはずだと思うよ」

「おや、あんたのためにとってあることはいっぱいあるんだぜ。あんたはもう一度ジョージと話をしなきゃならない。きょうじゃない、きょうはあいつ、病室にいる。あいつはここで『フォースタス博士』を上演しようというちょっとすごいことを考えてるんだが、あ

んたが来るまで待ってたのさ。それに、もう一つあるんだが……？」柄にもなくモルデカイはもじもじしているように見えた。

「それで？」

「おれ、ちょっと書いてみたんだ。小説なんだけど。そいつを読んで、感想をいってもらえたらと思って。ハーストはNSAの検閲が済んだら雑誌に送ってもいいと約束してくれたよ。けど、出来がいいかどうかよくわからないんだ。謙遜じゃないぜ。ここのみんなは気にいってくれてるんだが、おれたちはひどく密着した小グループになっちまってる。近親交配だな、しかしあんたはまだ自分の考えというものを持っている」

「よろこんで読ませてもらうよ。そして、できるかぎり意地の悪い批評をすることを約束しよう。何についての作品だい？」

「ついて？　なんてこった、それが詩人のする質問かね。ファン・デル・グースについてだよ、事実上はね」

「ところで、NSAとは何のことだい？」

「ナショナル・セキュリティ・エージェンシー。解読屋連中だな。おれたちのいうことを全部チェックして　テープに収められてるのさ、知ってるだろう　確かめるわけだよ、おれたちが……錬金術を使ってないって」

「きみたちが錬金術を？」

錬金術士モルデカイはウインクした。「アブラカダブラ」と意味深長にいう。そして、シルフの如く疾く、彼は去った。

追記

要約すると？　地球儀を要約するくらいにやすやすと。

罪悪感はずかしくもある。モルデカイの転落の動因となってしまったことについて。だからといって、われわれのほんの些細な行為がどこまで波及するのかと驚嘆することの妨げになるというわけではない。浮世を離れた修道僧は、危険が及ぶのは自分だけだと考えて過ちを楽しむ。ところが一世紀後に、彼の異端の説がいくつもの国家を揺がすことになるかもしれないのだ。たぶん保守主義者が正しく、たぶん自由思想は危険なものだろう。

だが、内なる本性の悪、ルイ二世がそれに異議を唱える！　いかにしようと、彼を完全に黙らせることはできない。ときおり、彼の声が声高にしゃべるのを防ぐのに、あらんかぎりの意志の力を要する。彼は常に私の心の中にひそんで、理性の王座を篡奪しようと待ちかまえているのだ。

しかし罪悪感私の感じることのほんの一部にすぎない。まだしも、驚嘆や畏れのほう

がずっと多い。何か、空の観察者に似ている。新たな惑星が視野にずっと入ってきたとき。あけの明星。ルシフェル、暗黒のプリンス。誘惑者。

六月八日

Zu viel, zu viel! あんまり多過ぎる。一日中しゃべりどおしだった。私の心は七十八回転でかけられた三十三回転のレコードのようなものだ。ここにいる七、八十人に会った。なかに入ってみると、囚人の集団というのは個別にみるよりもはるかに迫力がある。あいつく会話の残響がまだ私の中でうねっている。オペラが終って、音楽の余韻が残っているのに似ている。

発端は朝早く、衛守の持ってきたまだインクの生乾きの招待状に従ってジョージ・Wを病棟に訪ねたこと。どんな病院も、レン設計のチェルシー病院すら、あれほど壮大ではないだろう。彼のベッドはティエポロの手になるものかもしれない。そして花は税関吏ルソー作。話したのはまたモリルケのこと。ジョージがリルケを称賛するのは技法よりも異端的な観念に対してだ。独自の翻訳をしている。エキセントリックな詩形論。私は論評をさし控えた。「フォースタス」上演についての彼の思想が話題になり、彼のモデル・シアター計画へと話は移っていった。それが彼のためにここに建てられるはずだという！（キャンプAが地中深くにあることはもはや間違いない）

ほかの全員の名前は思い出せない。また、何を話したのかも。ただ、マレー・なんとかという、磁器のように洗練されすぎた態度を示す若造に対しては、はっきりと嫌悪感をおぼえた。むこうからもお返しがあった（しかしこれは私の思いあがりかもしれない。たぶん彼は私がそこにいると知りもしなかったのだろうから）。錬金術的なわけのわからぬことばで猛烈な議論を展開していた。要旨はこういうことになるだろうか。「二羽の雄鶏が闇の中でつがう。そこから龍の尾を持つ雛が孵る。七日間に七たび雛たちは焼かれ、その灰は聖なる鉛のうつわの中ですりつぶされる」これに対して私のいうことは ふん！ だが、なんと熱心にみんなこのふんを受けとめていたことか！ あとで確かめたのだが、こんな関心の原因は大部分モルデカイの活動にあるらしい。

いちばん気にいったのはパリー・ミードだ。私は自分より太った人間に会うといつも嬉しくなる。ミードは映画に夢中で、二時にジョージが一眠りするのために鎮静剤を与えられることになる（かわいそうにジョージは加減が悪いのだが、その原因となると、誰に訊いてみてもみんな意見はまちまちのようだ）私を三階下の小さな映写室に連れて行って、マクナマラの政策演説と古い恐怖映画から抜きだした泣き叫ぶ女とをモンタージュした自作をみせてくれた。陽気さが登りつめてヒステリーに至る。パリーはとてもクールに、ほとんど気がつかないような微妙なミスについて弁明し続けた。

四・三〇にジョージは目をさましたが、私を無視して数学の本にとりかかった。私は、休みに子供のいない親戚の家へ行った子供のように、私をもてなす役割の分担がむこうで勝手に細かく定められているような、そんな気がしはじめた。あれは少なくとも午後のことだったが、単に”僧正”とだけ紹介された人物に世話をされることになった。そんな渾名を頂戴したのはダンディないでたちのせいではなかろうか。彼はここで発達した社会秩序について解説してくれた。要するにこういうことになる。モルデカイが実力とカリスマ性を発揮して、寛容なアナーキー社会の揺るぎなきツァーとなっているというわけだ。僧正がキャンプ A に来たのは営倉ではなく軍の精神病院からで、そこで二年間、完全な記憶喪失状態にあったという。幾たびもの自殺未遂についての魅力的な、面白おかしくてまたぞっとするような話を一席きかせてくれた。一クォート缶の鉛入り塗料を全部飲んだことがあるそうだ。うへっ。

あとで、チェスでこてんぱんにやられた。

そのまたあと、マレー某が電子音楽を演奏(自作? そうだという者もあれば、違うという者もいた)。私は躁病状態だったが、それでもなかなかよかった。

まだまだ、そんなことではとても済まない。

オサにペリオン、まさに山積。

多過ぎる、ともう一度、いおう。このすべてから何が出てくるのか? なぜこんな素晴らしい怪物に生命が与えられたのか? 明日にご注目あれ。

六月九日

いやまあ、あれは数ある明日の一つということで エントロピーの勝利を感じる時にも。この明日に感じるのは、満面のにやにや笑いとウィンクと雛だらけの張り子のお面、のような虚ろな気分。実のところは ほんとうの事実は そんなに大仰なものでもなくて、仮面も、被ってみたくもないほど虚ろだというわけではなく、そこに見えるのは下層意識が上層意識の欠陥受信機へと放送している、眼球震盪症のようにちらつくイメージ、イメージ、イメージ。きょうはだめだ、よくない、うちのめされている。気分が悪い。

来客あり モルデカイ、ミード、そしてジョージ・Wからのメモ しかしあくまでもひとりで過ごす。私は私でないと呼んで。

では誰なのだ?

生命の源、太陽からあまりにも長い間遮断されている。それが問題だ。

二つのことを連続して考えることはできない。はてさて。

六月十日

ずっとよくなった、おかげさまで。うん、かなりいいよ。さて、もう一度、敗北の陽あたりのいい側を向くことにしよう。

事実を

またHHに会う。囚人や衛守たちの様に石膏を塗ったような白さに慣れてしまうと、彼の顔の太陽ランプで焼いた(トーストした テイスティ・ホワイト・ブレッド みたいな)ふかふかした感じは今まで以上に自然の秩序に対する違背に思えた。これが健康というものなら、病気で私を衰弱させるがいい!

このこと、あのこと、また別なことについて話をした。彼は私の日誌の全般的な事実的性(ママ)をおほめくださったが、きのうの分は例外で、主観的すぎるという。今度また主観的になりそうになったら、一言いえば衛守が精神安定剤を持ってきてくれるとのこと。貴重な日々が脱け落ちていくのを放置しておくような余裕は、われわれにはないのではありませんかな?

こうして、またああして、彼の凡庸さのグリスの行き届いたカムやタペットが、上へ下へ、前へうしろへ、ひょっこりぽっこり、予測可能な循環軌道をたどっていく　そして彼はこう尋ねた。「それでジークフリートにお会いになったでしょう?」

「ジークフリート?」と私は問い返ししながら、モルデカイの渾名かなと思った。

彼はウィンクした。「ご存知でしょう.....ドクター・バスクを?」

「ジークフリート?」私はもう一度きき返した。ますます面くらってしまっていた。「どういうことですか?」

「ご存じでしょう　ジークフリートの要塞線のようなものですよ。難攻不落。そんな冷淡な人物だと確信したからこそ、このプロジェクトに彼女を引き抜いたのですよ。ふつうなら、こんな状況に女性を置くなどとんでもない。さかりのついたGIの群を相手に仕事をせねばならず　しかもその中に黒人が一人どころではないんですからな。しかし、ジークフリートなら、そんなことは一向に変わりがない」

「どうも、経験からいっているように聞こえるんだけど」と私はそれとなくいってみた。

「WACの隊員はね」とハーストは首をふりながらいった。「中にはそこまでいかない者もあれば、また.....」と内緒話でもするように身をのりだして、「これは日誌に書かないでおいて欲しいんだがね、サケッティ、実をいうと彼女、まだ蕾を散らしていないんだよ」

「まさか!」と私は反論した。

「誤解しないでくれたまえよ　ジークフリートは仕事の面では第一級だ。誰よりも自分の職務をよくわきまえていて、感情で職務が妨げられるようなことは決してしない。心

理学者というのは、一般に、センチメンタルになりがちだというのは知っているだろう

他人を助けたがるものだ。バスクはそうじゃない。彼女に欠点があるとしたら、想像力が足りないということだろうな。時どき彼女は、考えの幅がちょっと狭くなる。あまりにも……わかるだろう……型どおりなんだな。勘ちがいしてもらっちゃ困るよ私も人並みに科学に敬意を払っている」

私はうなずいた。ええ、ええ、勘ちがいなど致しませんよ。

「科学がなければ放射能もコンピュータもクレビオゼンも得られなかったし、人間が月に行くこともなかったろう。しかし科学というのはものの見方の一つにすぎない。もちろん私はジークフリートが若い衆に……」（とハーストはモルモットたちのことを呼ぶ）「……直接に話をするようなことはさせないが、それでも連中が彼女の敵意を感じとることはできると思う。さいわい、そのために彼らの熱情が落ちこんだりはしていないようだ。重要なのは、バスクすら気づいているように、彼らに自分で自分の進路の舵取りをさせることなのだ。彼らは古い思考のパターンを脱却し、その足跡を残し、探検せねばならないのだよ」

「しかしいったい何なんです」と私は訊いた。

「バスクが認めないというのは？」

またも彼は内緒話ふうに身をのりだし、眼のまわりの日焼けした髭がデルタ状になった。「私が話していけないという理由はないな、サケッティ。いずれ若い衆の誰かから聞くことになるのだから。モルデカイは 大事業 をやらかそうとしているのだよ」

「彼が？」といいながら私はハーストの人のよさを賞味した。

彼はびくっとした。日の光に対する羊歯と同じくらい、懐疑の最初のかすかな徴候に敏感だった。

「そうとも、彼がね！ きみが何を考えているのかはわかるよ、サケッティ。老ジークフリートと同じことを考えているのだろう　モルデカイが私をたぶらかしたのだと。私が、世にいうところの、かつがれているのだと」

「まあ、そういう可能性もありますね」私は認めた。それから、傷口に軟骨をすりこむように、「ぼくに、不誠実になってほしいというわけじゃないんでしょう？」

「いや、いや　とんでもない」彼はためいきをついて椅子に坐りなおし、きつく寄せた皺を顔いちめんに拡散させる。さざなみが、彼の愚昧さの浅いプールの表面にひろがっていった。

「驚きはせんよ」と彼は続けた。「そんな態度を示されても。モルデカイとの会話の描写を読んでいるのだから、それには当然気がついて……最初は、たいていみんな同じような反応を示すものでね。錬金術なんて黒魔術のたぐいだろうと考えるわけだ。認識しな

いのだよ、これも、ほかのどれとも同じように科学だとは。最初の科学なのだよ、実のところ、そして唯一の科学というべきだろうな、いまも、すべての事実を見ることを恐れないう点では。きみは唯物論者かね、サケッティ？」

「うーん……そうはいえないんじゃないかな」

「ところが昨今の科学はまさにそうなってしまってるんだよ まったくの唯物論で、ほかには何もない。誰かに、超自然的な事実について話そうとすればつまり、自然科学における事実よりも上位にある事実、ということだがね 1 相手は眼を閉じ、耳をふさいでしまう。彼らには知るべくもないのだよ、膨大な量の 研究 のことや何百巻もの 文献、何世紀にもわたる リサーチ ……」

この最後のフレーズには当然 アンド・デベロップメント とついて完結するはずだったと思うのだが、ここで彼はわれにかえった。

「そういえば」とことばを続けたが方向転換していた。「日誌の中で一度ならずトマス・アキナスに言及していたね。で、どうかね、彼が錬金術士だったと考えてみたことはあるかね?実際にそうだったのだよ、そして彼の師、アルベルトゥス・マグヌスはそれ以上に偉大な錬金術士だったのだ! 幾世紀もの昔から、ヨーロッパのまさに最高の知性の主たちが錬金科学を研究してきたというのに、当節ではきみやバスクのような手合いが、それについて何ひとつ学ぼうともせずに、彼らの業績すべてを迷信のたぐいにすぎないと既めてはばからない。しかし、迷信的なのはいったいどちらなのかね、え? 証拠もなしに判定を下しているのはどっちなのかね? え? え? きみは錬金術に関する本を読んだことがあるのかね 一冊でも?」

私は錬金術に関する書物を一冊も読んだことがないと認めざるをえなかった。

ハーストは勝ち誇った。「それでいてきみは、云々する資格があると思うのかね、幾世紀もの間の古典学者やしいんがくしゃたちのことを?」この単語の発音には、また実のところこの講演の調子や内容全体に、モルデカイの残響があった。

「ひとつ忠告を聞いてもらえんかな、サケッティ」

「ルイと呼んで下さっていいんですよ」

「うん、それをいうつもりだったんだよ……ルイ。心を開いて、フレッシュなアプローチを受け入れることだ。人類史上の偉大な進歩はすべて、ガリレオから」 またも壮大華麗にしておぞましいモルデカイぶし 「われらの時代のエジソンまで、敢えて異分子たることを恐れなかった人々によってなされたのだよ」

私は開いて受け入れることを約束したが、調子のでてきたHHは舌鋒をおさめようとはしなかった。案山子の大軍をなぎ倒し、ここ三年間のマレーシアでの意気阻喪するような出来事はすべて、ワシントンにいる一部の中心人物たちが、名指しこそしなかったが、フ

レッシュなアプローチを受け入れようとしないうで起こったのだと、夢幻的な論理を展開してみせた。

ところが、少しでも突っこんだ質問をすると、口数が少なくなって用心深くなる。私はまだ、奥儀を伝授されるだけの心がまえができていないのだと彼はそんな態度で示していた。軍隊時代からハーストは秘密というものの効能に不動の信仰を保っていた。知識というものは、一般に知られてしまうと価値が減じるのだ、というわけである。

私はもはや、「マルスの合」でペリガンの描いた”アーリック將軍”像の正確さを寸毫も疑わないし(この本がここの図書館では手に入らないことも判明している)、なぜハーストが、非難中傷のかぎりを尽し、ペリガンを破滅に追いやることに全力を傾けながら「裁判にだけは持ちこまなかったのかも理解できる。この御幣かつぎの耄碌じいさんは、アウアウイでのあの一年がかりの悲惨きわまりない作戦を、占星術にもとづいて遂行したのだ!

願わくば、歴史が逐条的に繰り返されて、モルデカイが、あまりにも巧妙に、ペリガンの悲運の役割を再演したりしないことを。

追記

ご注目あれ。私は今、別れてから数分とたたぬ内にハーストが使いの者に持たせて超越した、錬金術に関する一冊の書物を読んでいる。ルネ・アローの *Aspects de l'alchimie traditionnelle* で、タイプ原稿の翻訳と一緒に 極秘 のフォルダーに綴じこまれている。

愉快的ことに、匿名の脅迫めいた投書のような感じに読める。たとえばこんなふうな書き出しの

「編集者殿

あなたはおそらくこの手紙を活字にするだけの勇気をお持ちではないでしょうが、しかし……」

六月十一日

『フォースタス』リハーサル。当てはずれ、歓喜、そしてそのあと現実への忌わしい急激な転落。

演出家としてのジョージ・Wに何を期待していたのか、自分でもよくわからない。音に聞こえし(そして或いは幻の)六十年代末ジュネ”地下”公演、そんな類いのものではなかったかと思う。ところが彼の『フォースタス』構想たるや、円形劇場と、ヴィーラント・ワグナーのパイロイト向け演出の苦心の華麗さとを、ほどほどにつき混ぜたものだった。もちろん、観客となるのが舞台上にいる必要のない出演者だけなのだからそして私も、プロ

ンプター用の台本を持たされていたわけだが(これは全く無用なものだと判明した。

はじめての通し稽古だというのに、もうみんなが台詞をすっかり呑みこんでいたのだ) プロセニウムなどはわずらわしい、そぐわないものであろう。しかしどろりと濃い霧が悲劇の効果を盛上げるものだと考えるのは愚の骨頂で、おまけに反動的でもある。地獄は濠々と暗い、それはいかにもそのとおり だがスコットランドがそんな様相である必要はない。

してみると、どうやら(と私は喜んでレポートするのだが)われらの若き天才たちも誤ることがあるらしい。これはしかし、二十年間の猛烈な、見さかひのない、そして大概は期待はずれに終わった劇場通いの、その上に立つ判定だ。Gの『フォースタス』で驚嘆すべきは、彼も、またこの囚人の誰も、劇の上演というものをみたことがないという点。映画は観ていて、Gが再三しくじったのはカメラの技法を援用し損ったことによるものだった。

だがこんなことはほじくりかえしのあらさがしでしかない。彼らが演じはじめると、たちまち霧は引いていき、あとはただただ感嘆あるのみ。モルデカイぶしを借りるなら、役者は最高の役にあうべし!

私は、その昔、パートンの芝居を観る機会を遂に得なかったけれども、彼がジョージ・ワグナーよりずっとうまかったとは思えない。パートンの声は、さだめしあ最後の独白のところではもっと荘重なものになっていただろうが、はたして彼は中世のスコラ学者、宿命的にまた壮絶に 知 に恋する、神に愚かれた流神者が、まさしく息づいてここに現前すると、そうまで思わせることができたであろうか? 冒頭、フォースタスが「愛しき分析よ、そなたこそはわが魂を奪いたる者!」と嘆ずる時、はたしてパートンは 知 をあれほどまでに、おぞましくもまたヴェールに包まれた魔的存在、女夢魔サキュバスなのだと感じさせることができたろうか。彼がそれをいったとき、私は全身の動脈が、やはり慌惚となって、彼女の毒を受け容れようとして膨張するのを感じることができた。

モルデカイが演じたのはメフィストフェレス マーロー版ではゲーテ版の場合よりもずっと印象が薄いものだが、モルデカイがその中を突切っていくのを目のあたりにすれば誰もそうは思わない。「ここは地獄にて、われもここより外にはなければ」ではじまる台詞を、彼はまるでこの抜きがたい呪詛と絶望の容認がハシェリダンかワイルドあたりのもののおかど違いの、警句でしかないかのように、冷淡にも優雅にいつてのけたのだ。

そして、ああ! なるうことなら私としてはこのまま賞賛を続け、ここのタッチ、あそこの言回し、どここの所作というふうにかぞえ上げてもしこうけれども、いずれは同じところに行きついてしまう いかにしてフォースタスが終幕で、地獄から召喚のかかるまでのあの最後の苦悶の数分間に、悲嘆に暮れている最中、突如としてフォースタスであることをやめてしまったかという点を、やはり物語らないわけにはいかないだろう。また

しても、そして恐るべき猛烈さで、ジョージ・ワグナーは胃からあらゆる残り滓としずくとを喪失したのだった。喉を詰らせ、むせびながら、ひきつけを起したように、ぬらぬらしたステージ上を転げまわった。やがて衛守たちが来てそんな彼を病室へ連れ戻し、あとにはまがいの悪魔たちが手持無沙汰で舞台のそでに取残されてしまっていた。

「モルデカイ」と私は訊いた、「これはどういうことなんだ？ 彼はまだ病気なのか？ どこが悪いんだ？」

するとモルデカイ、冷やかに、まだ役柄からぬけださないで、「それこそはすべての善なる人間が知のために支払わねばならぬ代償なれば。そは魔法の林檎食らうことより生ずるもの」

「それはつまり……きみたちに与えられている薬、きみたちをそんなに……あの薬が、あんなことも引起すというのか？」

彼は固い微笑を泛べると重たげに手を上げて、つのはずした。

「いったい全体」とマレー・サンドマンがいった（“砂男”、これが　　なんとか某ではなくて　　この熱烈な錬金術の徒の通り名なのだ）「なんでこのくそつたれの質問に答えてやらないんだよ？」

「黙ってる、マレー」とモルデカイはいった。

「おや、おれのことなら気づかいは無用だよ。こちらさんに話したりはしないから。なんたって、おれじゃないんだからな、彼をここへ連れてこさせたのは。だけど今はもう本人がここにいるんだから、そんなに彼の無垢にこだわったって、ちょっと手遅れなんじゃないのかい？」

「いいから黙ってな」

「つまり、おれがいいたいのはさ」とマレーは結論に入った。「おれたちが魔法の林檎を食うことに、思いわずらった奴が一人でもいたか？」

モルデカイが向きなおって私を顧みた。彼の黒い顔はおぼろげな舞台照明のもとでほとんど見えなかった。「質問に答えてもらいたいのか、サケッティ？　　というのはな、そうでないのなら今後あんたが問うことはならないからだ」

「話してくれ」といいながら私は、畏にかけられて実際に持合せている以上の勇敢さを示すはめに追いこまれたような、そんな気がした。（このようにしてアダムは墮ちたのか？）
「知りたいんだ」

「ジョージは死にかけている。奴に残されてるのはあと二、三週間、運がよくてそんなところだ。もっと短くなる、と思うな、いまさっき見た様子だと」

「おれたちはみんな死にかけてるのさ」マレー・サンドマンがいった。

モルデカイは相変わらずポーカーフェイスのまま頷いた。「おれたちはみんな死にかけて

いる。連中のくれたクスリのおかげでな。パリジンさ。あいつは脳を腐らせる。そいつがすっかり行きわたるのには九カ月、もうちょい長くかかることもあるし、もうちょい早くなる時もある。それで腐っていく間じゅう、どんどん利巧になっていく。そして……」とモルデカイ、左手を低く一旋させてジョージの吐瀉物のプールをエレガントにさし示した。

六月十二日

徹夜　書きなぐり、書きなぐり、書きなぐり。例によって、モルデカイの真相暴露に対する私の反応は、しりごみし、あとずさりし、頭を砂に突込むことそして書くことで、いやはや神様、書いたの何の！　マーローの五歩格が昏い宙空にまだ韻々と響き渡っていて、無韻詩以外は到底不可能に思えた。ハイスクール以来、これに耽ったことはなかった。燃料を費い果してしまった今、字句をただただタイプ打ちし、遅しい隊列としてページに配していくというのは、毛皮を愛撫するのにも似て、放恣な贅の趣きがある

籠の鳩の如く肥え　賃貸しされた子は
かわらけの破片を　一足毎に鳴らしながら
安もの香油の匂い放ち　ゴートに跨り……

何のことやらさっぱりわけがわからない(霧が濃い)が、題は(定かならずも) ”The Hierodule” となっている。ヒエロドゥールというのは、先週 OED をあたっていて発見したのだが、神殿に供えられる奴隷のこと。

今は、呪われたコールリッジのような、また喪神状態から叩き出しにポーロックから訪ねてきてくれる人もなかった者のような、そんな心境。これが無邪気にも始まったのは、一年前に流産した”セレモニー”詩を蘇生させた時のことだが、あのあっぱれ敬慶なる断章群との関連といえばただひとつ、冒頭、祭司が神殿の迷宮に入っていく際のイメージ

……左に曲り、右に折れ、とらえんとする眼差
神の目の如く愛しく。血の舞い翻りて池に……

このあと十行たらずでこれは退嬰化(それとも昇華?)して、分析はおるか、要約の力さえもまったく寄せつけないものになってしまう。異教的であるのはまず間違いない上に、異端的でもあるらしい。これを私の名のもとに世に出すような不敵さはとてもない。世に出す！　私はまだひどくうわついていて、はたしてこの代物が韻律の合っているものなのか、ましてや公表しうるものかどうかなどは知るべくもない。

けれども私には、よき詩のあとにやってくる、自分がこれまでになした他のすべてのものはこれに較べたら滓なのだという感覚がある。それは、たとえば 偶像の描写

視よ！ 視よ 黒き 肌目なき肉を
顎は 宝石を鎮めた蝶番 それをわれらはようやくにして垣間見るを得

かかるうち 内部では 毒されしヒエロドゥールが
死に瀕し 囁くは 神の意図せしこと それは……

それを私に囁いてくれたらと思うのだけれど。

百十行！

きのうの午後、これにとりかかるために腰をおろしてから、まるで一週間が過ぎたような、そんな気がする。

六月十三日

ジョージ・ワグナーが死んだ。診療室には無用の肉、その残り屑を納めて封印された枢が、ここの本来の岩盤に粗雑に掘られた溝、ほかならぬわれわれの霊廟に嵌めこまれた。私と、他の囚人たちと、三名の看守が参列したが、ハーストもバスクも、教戒師さえも来なかった。レイヴンスブルックに教戒師がいたか、そう思うか？ 自分でも、またみんなも途惑ったことに、私は何ごとか空虚な祈禱の文句を唱え、それは鉛のように重く沈みこんでいた。昇華することもなく、いまも霊安堂の粗い床に横たわっているのではないかと思う。

二十余りの窪みが空いている、薄あかりの地下埋葬所、あそこには囚人たちにとって(カルトウジオ修道院に幾列も並ぶ枢の褥にも似て)抜き取り難いメント・モリの魅力があった。そんな病的な衝動こそが、思いみるに、死者へのいかなる敬度な感情にもまして、彼らを埋葬へと誘なったのではあるまいか。

みんなが列をなして扉を抜け、われらの回廊世界の幾何学的な静けさの中へと去っていくなかで、モルデカイが、石の壁(石ということで予想されるような冷えびえとしたものではなく、生ける肉のように温い)に手を当てて、「角礫岩よ」といった。私は彼が、「さらば」というものと思っていた。

「さあ行くぞ」と衛守の一人がいった。私はもうかなり長くここにいるので、衛守の顔や人となりを見分けることができる、こいつは 岩眼 だった。あとの二人は 屁こきと 忠僕。

モルデカイは身を屈めて床かちこぶし大の石の塊を拾い上げようとした。忠僕がホルス

ターから武器を抜いた。モルデカイは笑った。

「暴動を引起こそうなんてしちゃいませんよ、おまわりさん、ほんとでさ。ただこの可愛い角礫石のかけらをあっしの石のコレクションに入れただけでね」彼はそれをポケットに納めた。

「モルデカイ」と私はいった、「リハーサルのとできみが話してくれたことについてなんだけど……どれくらい経てばきみたちは……きみはあとどれくらい……？」

モルデカイはすでに門口に立っていて、そこでふりかえった。通路の螢光を受けてシルエットになっていた。「おれは今、七カ月めだ」

平静に彼はいった。「七カ月と十日になる。ということは、あと五十日あるわけだなおれが早熟でなければ」そして扉の敷居から降りると左に曲り、見えなくなった。

「モルデカイ」といいながら私はあとを追いかけた。

岩眼が行手を遮った。「今はお控え願えませんか、サケッティさん、お差支えなければ。バスク先生と会う約束がおありでしょう」屁こきと忠僕が、さっと私の両側の所定の位置についた。「ご同行ねがえませんか？」

「あんなことをなさるなんて、実に愚かな、実に無分別な、実にあさはかなことでしたわね」とドクター・エイミー・バスクは、厳粛な、ガイダンス・カウンセラーの口調で繰返した。「いいえ、気の毒なジョージ青年の安否を問う云々の問題じゃなくて　だってあなたもご指摘のように、どのみち状況のそうした側面を、いつまでも隠しておくことはできなかつたでしょうからね。わたしたちだって願っていたんですよ、おわかりでしょうけど、その……解毒剤を発見できないものかと。けれど今では、あのプロセスは一旦はじまってしまうと取り消しができないと認められている。あああ。いいえ、そんなことじゃないのよ、わたしが話していたのは、だってあなたが、好んでわたしたちの非人間的所業どお呼びになるようなことについて、たとえどんなに抗議なさろうと、わたしたちが取り組んでいることにはあまた先例があるんですもの。その歴史を通じて医学研究は、進歩の代償として殉難者の血を支払ってきたんですよ」

彼女はここでことばを切り、その残響を楽しんだ。

「そのことでないとしたら、いったい何のお叱りを頂戴するために小生はここへ召し出されたのかな？」

「図書館でのあの実に愚かな、実に無分別な、実にあさはかな小探索行の件でよ」

「なんとも油断のないことで」

「ええ、そりゃもう。煙草、喫っていいかしら？　じゃあ失礼して」彼女はくしゃくしゃのキャメルを、かつては透明だったのが今では中指や人差指と変りのない濃い褐色に染

まっている、寸詰りのプラスチック製シガレットホルダーにさしこんだ。

「しかし、今であれ放免されたあとであれ、ぼくが人名録を調べたなら、情報は簡単に手に入るってことは認めざるをえないんじゃないかな」

私が人名録で発見したのは(今、それに言及してはならない理由はない) 実はいかなる組織がハーストを傭い、担当の副局長としてリサーチ&

〔ここで二行、ルイス・サケッティの日記の稿本から汚損。 編者〕

「背信？ 欺瞞？」とドクター・バスクは、穏やかに諫めるようにいった。「欺瞞があったのなら、きっとあなたもわたくしと同じくらいにその当事者だったはずよ。でも実のところそれはむしろ志気の問題じゃないかしら？ わたしたちはただ、あなたの気分を沈みこませないようにして、無用な心の負担で仕事に枷がかかることがないようにしようとしているだけですのよ」

「というのはつまり、最初っからきみたちには、ぼくをキャンプ・アルキメデスから放免する気など毛頭なかったということか？」

「毛頭？ あらあら、これは大仰なせりふだこと。もちろん出してさしあげますとも。いずれはね。思想情勢が適正化すれば。実験によってわたしたちPR局の正当性が実証されたなら。そうなれば、あなたをスプリングフィールドへ帰してさしあげることできる。それに、ほぼ間違いなくわたしたちはその局面に、あと五年以内に というよりは五カ月以内にといったほうが近いかしら 到達できるでしょうから、あなたとしてもどうせ時間を過すのなら、あんなにうんざりしてらしたあそこにいるよりは、ここで進歩の最先端をいく機会を得られるほうが、有難いはずでしょう」

「なるほど、いかにもきみたちの人殺しのすべてを目撃するチャンスを与えられて感謝すべきだな。いや、まったく」

「まあ、そういうことになるわね.....あくまでもそんなふうに見ようというんなら、でも今はもう心得ているはずよね、サケッティくん、世間は物事をあなたとは違ったふうに見ているのよ、キャンプ・アルキメデスのことでスキャンダルを呼ぼうとしてみたって、あなたはおそらく、あなたの裁判の時にそうだったのと同じくらいに僅かな注目しか浴びないでしょうね。そりゃあ何人かはお仲間の偏執狂があなたの勇ましい演説を聞きにくるでしょうけど、大方の人々は忌避者のということなんかまともに受けとりゃしないわよ、そうでしょう」

「大方の人々は自分の良心をまともに受けとめないな」

「また異った仮説ね、だけどそれも同じ一群の事実にあてはまるんじゃない？」ドク

ター・バスクは、目立たない、皮肉な眉を上げると、(あたかもそれが欠かせない靴の掴み皮であるかのように) 自分自身を、低い革の席から引上げた。ぱりっとした灰色のドレスが神経質な両手でなでつけられて、電気の曝きをもらした。「ほかに何かありますか、サケッティくん？」

「この話題が最初に出たときにおたくは、いずれはあの薬の、パリジンの効能をもっと詳しく説明するといいましたね」

「いかにも左様、説明いたしましょう」彼女は黒いレザーの蜘蛛の巣にまた坐りこむと、青白い唇を整備して教師然とした微笑に仕立てあげ、解説した。「この病気の症因となるのは、ただ、あんなにためになるものを病気なんて呼ぶのは、はたして正当なことかしら？　小さな虫、スピロヘータで、トレポネーマ・パリダムにとても近いものよ。あなたはそれがここで“パリジン”と呼ばれてるのを聞いたわけだけど、その名称はむしろ、宿主に感染する病原体が、大半の薬剤とは違って生きていて自己増殖するものだという事実を、覆いかくしてしまっているわ。要するに虫ね。

トレポネーマ・パリダムについて、耳にしたことくらいはあるんじゃない？　スピロヘータ・パリダと呼ばれることもあるんだけど？　ない？　まあ、その成果のほうは、とくにご存じのはずよ。トレポネーマ・パリダムは梅毒の病原体なの。あらら、なつかしくも身におぼえあるショックのようね、そうじゃないこと？　わたしたちがここで扱わなくてはならない、その虫というのは、一種の変わりだねで、一九一二年にある梅毒患者の男性の感染した脳からとりだされてそれ以来ウサちゃんの体内に流れる血の中で生かし続けられていた、ニコルス変種として知られる亜種から、最近枝分れしたもののよ。数知れぬ世代を重ねてニコルス・トレポネーマはそんな実験用の兎の体内で繁殖し、そして常に、最大級の集中的な研究の対象となっていた。畏敬の対象、といってもいいくらいのもよ。特に一九四九年以降はね。四九年にネルソンとメイヤーという二人のアメリカ人が共同で、TPIを、この病気の唯一最上の診断検査法を開発したわけ。といったようなことはみんな余談。ジョージ青年を打滅ぼしたトレポネーマとニコルス・トレポネーマのちがいは、少なくともニコルス種とそこらの培養トレポネーマ・パリダムとの差には相当するはずよ。

スピロヘータの小さな世界への、群を抜いて最も積極的な探究者が軍であったと知っても、驚くにはあたらないでしょう。幾多の優秀なる兵士が、こんな顕微鏡的な敵に打負かされてきたんですものね、もちろん第二次世界大戦と、ペニシリンの登場までのことだけ。そのあとも、研究が打ち切られたわけじゃない。五年ほど前、陸軍のある研究班が、兎でよ、もちろん、通常のペニシリン療法が使えないような場合、あるいは(三パーセントほどの比率であることなただけ)それが効かないときに、放射線を治療の道

具として利用できないものかと調べていた。そこで、ある興味深い現象がみられた実験によって兎の新しい血統が生みだされたのではないかと思われるようなことがあったのよ。血のつながりといっても、子孫が殖えるという意味ではなくて、兎がお互いから血をそしてトレポネーマを とりこんで継承していくわけ。そんなある血筋の兎が、この病気の典型的な症状である睾丸炎にかかっただけじゃなくて、病気で酷く蝕まれているにもかかわらず実に悪知恵が働くように思われたのね。何度か、濫から脱出したのよ。スキナー学習ボックスでの成績は、それまでに記録されたどんなものをも凌いでいた。わたしはそうしたテストを担当していたんで、それがまったく驚異的な偉業だったことは請合ってもいいわ。ええ、もちろんそれでパリジンが発見されることになったわけ。この発見に何らかでも有用性がみられるようになるまでには、それからまた三年経たなくてはならなかった。三年よ！

顕微鏡でみるとパリジンは、他のスピロヘータと大同小異。スピロヘータという名からもわかるように、スパイラル、螺旋形をしていて、そのねじれが七重になっている。標準的なトレポネーマ・パリダムはもっと大きいわね、ねじれが六重にしかになっていないことも稀にはあるけど。ごらんになりたければ、そのように……結構？ ほんとに、ずいぶん可愛いものなんだけど からだを手風琴みたいな具合に一杯に広げたり縮めたりして進むの。じつに優美なものよ。”シルフの如し”と教本ではいってるわ。わたしはただただ、あれが血漿の中を泳ぎまわるのを眺めて時を過ぎたものよ。

そうねえ、トレポネーマ・パリダムとパリジンとではずいぶん異なる点があるけれど、後者にあの特異な力を与えているものが厳密にいつて何なのかは、わたしたちにも判定できずにいるの。梅毒はその後期に、中枢神経系を冒すことで悪名を轟かせているわよね。たとえば、スピロヘータが脊髄に入りこんでしまうと これは最初に感染してから実に二十年後という場合もあるんだけど 脊髄癆に罹る 最もありふれた症状で、実に不快なものよ。癆、知らない？ なるほど、たしかに近頃はあまり見かけなくなっているわね。最初はただ脚がぐらぐらするだけなんだけど、やがて関節が腫れ、溶けてきて、支えとしての役目をまるっきり果せなくなってしまって、しまいには患者の約十パーセントが失明する。というのが癆なんだけど、スピロヘータが脳に入った場合には 脊髄の中を滲透的に、いわば樹液が木の中を上昇するような具合に進んでいくわけなんだけど この場合には進行性の麻痺に罹って、はるかにもっと興味深い病理を示すようになる。芸術家としてのあなたの関心を惹くような、名高い患者も何人かいるわよ。ドニゼッティ、ゴーギャン、まだまだいるけど中でも哲学者のニイチェなんかは収容所からの最後の頃の手紙に”ディオニシウス”と署名しているわ」

「著名な詩人はいないのかい？」と私はきいた。

「実をいうと、梅毒、シフィルスという病名は、ある詩人に由来するものなのよ。フランカストリウスが一五三〇年にラテン語で、羊飼いのシフィルスという恋わずらいの色男にまつわる田園詩を書いているわ。わたしは読んだことないけれど、その気があるなら……？ まあ、ほかにもゴンター兄弟や、ガリヤー二神父、ヒューゴー・ヴォルフ……でも、トレボネーマ・パリダムがいかなるものを成就しうるかということの至高にして不朽の範例は、やはりアドルフ・ヒトラーね。

それで、スピロヘータが脳の中で成就するものがそんな荒廃 錯乱と崩壊でしかなかったなら キャンプ・アルキメデスは存在することもなかったでしょうね。ところが、こんな意見が出されたのよ 論者の中には何人か、とても立派な人たちもいて（といっても大概は医学方面ではない人たちだったけれど） 神経梅毒は有害なものとなるのと同じくらいの割合で恩恵も施してくれているのではないか、わたしがいま挙げたような天才たちは（まだまだ大勢追加したっていいけれど）この病気の犠牲者であったのと同じくらいに受益者でもあったのではないか、というわけ。

これはまったくのところ、最終的には天才の本質の問題になるでしょう。天才の解釈としてわたしの知っている最上のものは、つまり、わたしたちの得ている事実を最も幅広く包摂しているのは、ケストラーのもので、天才のなせるわざは、要するに、それまで別個のものであった二つの関連領域あるいはマトリックスを引合せること 併置の能力にほかならない、というものよ。アルキメデスの風呂が、ささやかな例となるわ。彼以前には誰も、物の量の測定と、水が押しのけられるというごく日常的に見かけられる出来事とを、関連づけてみななかったわけね。現代の研究者にとっての問題は、アルキメデスが『エウレカ！』と言う、その瞬間に、脳の中で実際にどんなことが起こるのかということなの。たとえばもう明らかになったと思うんだけど、それは一種の解体 文字どおり精神が解けほぐれて、古い、画然としていたカテゴリーがしばし流動的になり、再編成が可能になるということなのよ」

「でもそれだと」と私は異議を唱えた。「ばらばらになったカテゴリーが再編成される、そこに天才の営為が存する、ということにしかないよ。重要なのは解体じゃなくて、そのあとに来る新たな併置だろう。狂人だって天才に劣らず見事に解体してしまえるよ」

ドクター・バスクはシガレットの煙のヴェールの中で謎めかしくも微笑した。「天才を狂気から分つといわれるあの細い糸は、たぶん偶然のものでしかないんでしょうね。たぶん狂人は、ただ不運にも誤っているというだけのことなんでしょう。でも、あなたのいわんとするところはわかるし、それに答えることもできるわよ。あなたはこういおうとしている、とわたしは受けとるわけなんだけど、天才というのは一パーセントの靈感にすぎないんだ、『エウレカ！』が到来するその瞬間のために準備を整えていくプロセス、それこ

そが天才の成立における決定的な要因なのだ。要するに、教養だ、それによって物事の真の姿を識るのだ、というわけでしょう。

でもそれは、前提に問題を秘めてはいないかしら？ 教養は、記憶というものはそれ自体、そうした修養の場における天才のあらゆる瞬間をなぞりかえしていくことにほかならないでしょう、教育とは、常に古いカテゴリーを解体し、それをよりよい方式で組立て直していくことでしょう。だとしたら、厳密なことをいうなら、過去のある一部をすべて完璧な姿で蘇らせ、現在という瞬間をすっかり消滅させてしまう緊張症患者より優れた記憶力を持つ人がいるかしら？ 敢えていってしまうなら、思考というものそれ自体が、脳の病い、退化的な事態だとさえいえるんじゃないかしら。

だってそうでしょう、天才が、その実体 万に一つのまぐれ当り でなくて継続的なプロセスだったら、そんなもの、わたしたちにとって貴重でも何でもなくなってしまわないじゃない！ 数学のような分野における天才は、ふつう、どんなに遅くても三十までには費い果されてしまう。心が、創造という自壊的なプロセスに対して自衛するのよ。身を固めはじめのわけ。観念が凝固して不可変の体系となっていき、これはもう、解体されて再編成されることを拒むようになってしまう。ヴィクトリア朝の大解剖学者オーエンが、まるでダーウィンを理解しようとしなかったことを考えてみるといいわ。自己保存なのよ、純然たる。

そして、天才が自己制御せず、あくまでも自由連想の極みのカオスへとまっしぐちに突き進んでいこうとすればどんなことになるか、考えてみて。わたしが考えているのは、あなたがた文学者のあの英雄、ジェイムズ・ジョイスのことよ。大真面目で Finnegan Wakes (ママ) をまさしく狂気の表白と受けとって、それだけを根拠乏して作者を入院させかねないような、そんな分析医をわたしは何人も知っていてよ。天才？ それはそうよね。でもわたしたち一般の常人にはみんな、天才というのが淋病と同様に交わりによって伝染する病気なのだと認識する、一般常識というものがあって、それに従って対処するものなのよ。わたしたちはそんなわたしたちの天才をみんな何らかの種類の隔離病棟に収容して、感染させられないようにしているのよ。

わたしの知っていることにこれ以上の証拠が必要だというのなら、周囲を見渡してみることね。わたしたちはここに天才をどっさり抱えこんでいるわけだけど、彼らの主要な関心事は何かしら？ どんな崇高な目的に、彼らが自分たちの集団知性の膨大な集積をふりむけているというの？ キメラの研究よ！ 錬金術じゃないの！

そりゃあ、たしかに誰ひとり、フォースタス博士ぞの人だって、これほど鋭敏な知性や精妙な弁別力、奥深い学識を、ヘルメス学にふりむけたことはなかったわよ。モルデカイがいつも用意怠りなく指摘するように、何世紀にも亘って最も巧妙な判じ物づくりや最も

策をこらした反啓蒙家たちが、そんな知的なアラベスクの意匠を凝すことに勤しんできたわよ。まったく、どんな高い精神だって溺れこんでしまえるほど深いものだわよ。でも、それでもやはりあんなものは痴癡の沙汰なのよ、あなたもわたしもモルデカイ・ワシントンも存分によく弁えているように」

「ハーストはそう思っていないようだけど」と私は穏かにいった。

「これもまたわたしたちみんなが承知していることだけど、ハーストは度し難いばかなのよ」とバスクは、プラスチック製ホルダーの先まで喫ったキャメルをもみ消しながらいった。

「へえ、ぼくはそんなこといわないよ」と私はいった。

「彼があなたの日誌を読むんですものね　わたしもそうだけど。すでに書いてしまったことは、そうそううまく打消せるものじゃない。あなたはモルデカイの思想や、彼がハーストをたらしこんでいる手口について、自分がどう思っているのかを、いってしまっているわよ」

「たぶんぼくは、おたくのご認証をたまわれそうなほどよりも、もっと寛い心の持ちぬしだよ。モルデカイの仮説についての判断は留保させていただきます、どっちみちきみにとっては同じことなら」

「あなたはわたしが思った以上に偽善者ね、サケッティ。お望みとあらばどんなナンセンスだって信じるがいいわ、そして、そうしたければどんな嘘でもつくことね。どうだろうとわたしには何の違いもないことよ。いずれ近いうちにわたしは山師と対決することになるんですもの」

「どうしてそういうことになるんだい？」と私は訊いた。

「すべてはスケジュールに組込まれているのよ。わたしはあなたがメインイベントのリングサイドの切符を手にするのを見ることになるでしょうね」

「それはいつのこと？」

「きまってるじゃない、夏至の前夜よ。ほかにあって？」

追記

ハーストからの手書きのメモ「でかしたぞ、ルイ！　きみの正当さを支持するぞ　来週にはあの知ったかぶりの阿魔に目にものみせてくれよう。それは信じたほうがいい！

頓首

HH」

六月十五日

これなるは汝の旧友ルイふたたび (或は、世に通りよく、ルイスまたまた) 素晴しく新しきニュースをば、汝ら苦悩と狭心症に苦しめる者みなに、良心に悩まされ神に害されたる者に、心身相関症の者またただに聖痕ある者に奉らん。さような脱腸帯は捨てつべし!

なんとなれば、mon semblable, mon frère わがはらからよ、事象のまなかには疼ける空虚よりほか何もなければ、アレルヤ! 而して疼きすらも最早なく、なくて、虚は幸いなり、日が長きが如くに。こは、かの古え人らが所有したりし秘密にして、こはわれらを、汝をも身をも解き放つ真理なり。あしたに三たび、夜みたび、かく唱えよ。神は存せず、いまだかつて存したることなく、未来にもなかるべし、とこしえに、アーメン。

否むかや、アダムの裔、ルイー世? ならばわれをして委ねさしめよ、汝を汝みずからの詩、理解する能わずと汝の称せし詩に。われは理解す。偶像は空なり。彼の言説、詐術なり。パールは存せず、わが友よ、ただ内なる囁き手が汝のことばを 彼 に帰するのみ。神人同形論かきあつめたるなり。否めよ! 汝が篤信のすべてならず、また才知も、いざや!

そして、おお! おお! かの愛おしき、じゃれつく汝が詩ども、汝がごっこのゴッド父ちゃんの黄金の尻なめるあれらは。何たる糞ぞ、さあらずや? 幾年も、また幾とせも冗らに積重なりゆくは、あたかもかの鳥 (アウグスチヌスのにはあらずや?) 山を動かさんとして小石ひとつずつ運び、その度ごとに千とせ経て、最後の一粒うつし終えたるとき永劫の一転瞬も過ぎてあらざりきというに似て。されど汝は、雀の屍よ、山に挑みもせざりたり。スイスの高原 さてそのあとの続篇は? ヴァチカンの尿かや?

はて、聞こゆるぞな、遠き方より、汝が穏やかなる抗弁が。患者、胸の裡にて唱う、神は存せずと。

そして賢者は声に出していう。

追記、ずっとのちに

説明するまでもないと思うが、私はきょう、そしてきのうも気分がよくなかった。すでにこの日誌で述べたと思うのだが、私はドクター・ミエリスが偏頭痛を治してくれたと思っていた。そしてまた、右に示されているようなスケルツォ癩も直してくれたものと思っていた。

思う。

思った。

思くるしい。

足もとはまだ泥沼で、私は私自身に戻ってはいけるものの、これが、この自己掌握がいつまで続くものやらこころもとない。私はぐったりし、彼の暴虐に疲弊し、頭が痛い。もう遅い。

いままで、回廊、回廊、回廊を歩いていた。バスクがいわざるをえなかったことについて考えているうちに、もっと容易ならぬ、ルイ二世の提起した問題を考察しないわけにはいかなくなってしまった。彼に対して私はいっさい返答しない、あの悪魔は私と同等に有能な神学者だから、トートロジイになってしまう。

沈黙か、それならば。だが沈黙は、敗北を認めることにほとんど等しいのではあるまいか？ 孤立し、聖体を拝領していない私には恩寵がない。問題なのは、ひとえにそれだ。

おお神よ、これらの方程式を簡略化したまえ！

六月十六日

「Morituri te salutamus (死に赴く者ども、ご挨拶つかまつる)」といいながらモルデカイはドアを開けてにやりと笑い、これに対して私は、まったく冴えず、親指を立てて承認の合図とする以上にまじな応答をすることができなかった。

「Quid nunc? (このたびは何ぞ)」と問いながら彼はドアを締めた。この問いにはなお一層、答えようがないと思った。まったくのところ、私が訪ねていった目的は、ひとえに、私自身がこの 今度は何 の問題に直面させられるのを回避することだったのだ。

「慈悲だよ」と私は返答した。「ほかのどんな理由でぼくがきみの暗鬱な房に光を入れるはずがある？」物憑きの浮かれたタッチ、それは効なく、なおいっそうの暗みの上に降り重なるばかりだった。

「慈悲の塩基は」とモルデカイはいった。「自己不信の酸を中和する」

「きみもぼくの日誌の写しを手に入れるのかい？」と私はきいた。

「いいや、けどハーストのを見てる、それでおれたちはあんたのことを心配してるわけだ。あんた、日誌に書こうとしないことがあるよな、ほれ、ほんとに秘密にしときたかったようなことはさ、だからやな顔をする理由なんてありゃしないぜ。あんたの問題はな、サケッティ、知の傲りってやつだ。あんたは、魂がうずうずしたりぞくぞくしたりすると、そいつにかたっぱしからくそつたれなおためごかしの辻褄を合せてしまいたがる。そこでだ、おれにいわせてもらえれば、信仰とおさらばしようというんなら、そんなものは歯医者に行って抜いちまってもらうのがお利口さんってもんだ。いじくりまわしてりゃ、痛いだけだぜ」

「でもぼくがここへ来たのは、きみの問題に与ろうとしてのことなんだよ、モルデカイ。自分の問題は忘れてしまいたいんだ」

「そうかい、そうかい。だったら楽にするこった。問題なら二人分たっぷりあるぜ」彼は鋭く口笛を鳴らし、そして呼んだ、「オブシー・モブシー・コットンテイル！ 出てきておまえらの新しい弟と握手しな」そして向きなおって私に、「おれの親友三人を紹介させてくれないか？ 使い魔の、火吹き竜なんだがな？」

部屋の中のうだるような暗闇(灯りとなるのは奥の壁際のテーブルの上の二つの蝋燭、そして M が手に持っている三本目だけだった)から兎が三羽、用心深くぴょんと出てきた。一羽はしみひとつない純白で、あとの二匹は斑らだった。

「オブシ」とモルデカイはいった。「おれの親友ドノヴァンと握手しな」

私が身を低くかがめると白兎がさらに二跳ね近寄ってきて、賢く様子を窺うように鼻をくくんさせ、後肢で立ちあがって右の前肢を差伸べてきたので、私はそれを親指と人差指で受けて振った。

「はじめまして、オブシ」私はいった。

オブシは毛のふかふかした前肢を私の手からひっこめると、後戻りしていった。

「オブシって？」と私はモルデカイに訊いた。

「オブシマスの略さ。人生のあとのほうになって勉強を始める奴のこったよ。おれたちはみんな、ここじゃオブシマスさね、さあモブシ、おまえの番だぞ」

茶と黒の斑入りの元気そうな兎が進み出た。そいつが後肢で立ちあがったのを見ると、下腹部に、実に不釣り合いな大きさではあるけれど乳房のようなものが見えた。私はそれを M に指摘した。

「そいつは睾丸炎さ、知ってるだろう キンタマの炎症だな。こんなに利口でいるためにこいつらが支払う代償ってわけだ」

私はモブシの前肢を急に放したので、兎は三匹ともみんなびっくりして暗い室内のそれぞれの隠れ処へと引込んでしまった。

「おや、バイキンの心配はいらないんだぜ。ただ、その指を口ん中へ入れるようなことになったら……スピロヘータが繁殖するには温い、湿っぽい場所が必要でね。そこんところが性病の性病たるゆえんというわけさ。ここの便所で消毒すりゃいい、けどその前にコットンテイルを呼戻しちゃいけないかな？ あいつ、きっとひどく心細い思いをしてるだろうぜ、あんたにあんなつれない仕打ちをされたんだからな」

しぶしぶ私はコットンテイルと握手した、そのあと石鹸と冷水で手を洗った。

「ピーターはどこだ？」と私は二度目のあぶくを立てながら訊いた。

「ファーマー・マクレガーが奴んとこへおいでなすってね」とモルデカイは薄くらがりから答えた。「兎たちはおれたちほど長くもたないんだ。二、三週間ってとこかな、そのあとは、ばーん！」

蛍光灯の点るバスルームから広い部屋へ戻って、私は一時的に盲の状態になった。「ガス燈を試してみるべきじゃないかな、モルデカイ。このモダン・エージの驚異的な発明だよ」

「じつはガス燈を使ってるんだ、眼がイカレちまってない日にはな。けど、きょうみたいな日にゃ、明るい光はおれの繊細なゼリーの中を針の電みたいに突抜けていきやがるのさ。おれのこのほかの病気の話を聞かせてやろうか？ お隣みいただけますかね？」

「それで少しでもきみの慰めになるのなら」

「ほう、エジプト流の慰めだな。最初の二カ月は、今、特に記憶に残ってるようなことはなんにもなかった。二つ三つ歯槽潰瘍ができて、吹出物がでて、腫れがあって 年季の入った心気症の患者なら自分でどうにかできないようなものはひとつもなかったな。それから三カ月めに入って、おれは喉頭炎と、数学に滅茶苦茶に熱中したのが重なって倒れた。低能にはうってつけの道楽だろう、え？ そのあとまもなく肝臓にガタがきはじめ、眼の白いところが黄いろくなった。それ以来ずっと、マッシュポテトに茹でた果物、結構なデザートだろ、そんな反吐みたいなものばっかし食ってる。肉なし、魚なし、酒なしさ。まあ、酒なんてそんなに欲しいわけじゃないがね。つまりだ、いま抱えこんでる以上におつむを刺激するものは要らないってわけさ、そうだろう？ 肝炎の期間中におれは一発目のどでかい文学キックをくらってフランス語とドイツ語を勉強したそのときのことだよ、まだあんたに見せてないあの小説を書いたのは。あの作品を持たずにこの部屋を去ったりすんなよ いいな、サケッティ？」

「こっちはまえまえから、そうさせてくれというつもりでいたんだよ」

「四カ月めになる頃には、おれは病気の塊りになっちまった。こいつを述べたていく上で厄介なのは、思い出話をしてるとついつい病気をひとつずつすっきりまとまったものみたいにいっちゃうことだね。実際には、どの局面もはっきりしないで重なり合ってたんだ。歯槽潰瘍も吹出物も、ほかの何かが始まったからって止まりやしなかったし、とらえどころのないひきつけだの、いきなり瘡が来てのたうちまわったりだのといったことが、襲ってきては一日続いたり、一時間で済んだりした。おれがこれまで示した症状をぜんぶ引いたら、『ヘイスティング病理百科』はあらかた引きつづしちまったぜ」

「『宗教と倫理』じゃないのかい？」

「そいつもこなしちまったよ」

「でも、いつ？ いつそんな教養を身につけたんだい？ それがぼくの理解できないところなんだよ。七カ月のうちの、どこでそんな時間をみつけたんだい、そんなに……何もかも掘起すような時間を？」

「坐んなよ、サケッティ、そいつについてとっくり聞かせてやるからさ。けどその前に

「ご足労ねがってあの机の上のポットを取ってきてくれないか。気付薬さ」

眼はもう部屋の薄あかりになじんでいたもので、よたよたせずにテーブルのところまで行けた。水滴を汗のようにふいた魔法瓶が、ハーストが私に寄越したのと同じような 極秘の書類挟の上に載っていた。底が濡れているために、台紙に輪の形のしみがついていた。

「すまん」といいながらモルデカイはポットを受けとってコルク栓を抜いた。彼はストライプのシルク地の低い寝椅子の上に、小さなやわらかいクッションを重ねてかさ上げたものに、半ば椅子かかっていた。まだらの兎の一匹が彼の股の間に来て、まるくなって寝ていた。

彼はポットからごくごくと音を立てて飲んだ。「一口どうだとすすめたいところなんなの……」

「気持だけ有難くいただきとくよ。のどはかわいていないんでね」

「問題は、わかってるだろうが、そいつをおれがどうやるかってことじゃなくて、それをやるのをどうやってやめるかということだ。おれはそれをやるのをやめない、このことがおれの不幸の半ばをなすものなのさ。最悪の状態で、おれが便器に頭を突込んで嘔いてるときも、脳みそゼリー大先生は下層の体細胞のことなんかは忘れ果てて、ただもうわきかえり続けてる。いや、忘れてるわけじゃないな。まるで無関心で、よそよそしくて、傍観者なんだ。おれは、自分のはらわたのその場所がぎりでしかない受難よりも、嘔いた物の野獣派的な色調だとか胃酸の化学といったもののほうに気を惹かれちまう。おれはいつも思考し、思索し、考察している。こいつは決して止まらないんだ、あの脳みそは、心臓や肺が止まらないのとおんなじようにな。ここに坐って話してても、心はどんどんそれで渦の中へ飛び去って行って、宇宙にあるかたづいていないものを全部むすび合わせて一個の意識の結び目にまとめ上げようとする。こいつは、くそつたれめ、止まらねえんだよ。夜は、眠れるようになるまで注射をしなきゃならないし、眠れば眠ったで、テクニカラーの悪夢をみる、これはどうだといわんばかりの、おれの知る限りでは全くオリジナルな恐怖もののな。まったく、反覆的な反芻広告みたいなもんさ。いまのはちょっと入れ違ったかな」

「うん、気がついたよ」

「けど、ひとつ　ひとつだけ、そいつをちょっとの間とめちまうものがある。発作に襲われた時だ。そうすると、そのあと一時間、幸せなことに空っぽでいられる」

「きみは、癩爛の発作までなのか」

「間合いが縮まってきてるよ。こいつは陣痛なんだよ、こいつと一緒におれは自分の霊を虚空に送り出しちまう覚悟をきめてるんだ。大動脈炎でな　これは最新の内幕話だぜ。おれの大動脈は弾力を失くしちまって、おまけにどうやら今じゃ弁がいかれかけ

ている。脈を搏つ時いつも血が漏れて左心室へ戻るんで、ドキドキおやじは(とおれたちは愛称で呼んでるんだが)それを埋め合せるためにスピードアップする。けど、そのうち

ばーん！ いままた一羽の小さき兎、科学の闘技場に艶れたり」彼は重く黒い両手をくるまっている兎の上に置くと眼を閉じた。「感動的じゃないかい？」

台椅子から起き上がることもせず、私はこの時間(は、一発の瞬間的なプシュッ！で空気を失ってしまうジェミニ宇宙カプセルがパンクしたように、不意に空白になっていた)を、モルデカイの部屋を無言で検分することで埋めた。大きさは私のところと変りがないのに、包み込まれた闇が無限の広がり of 錯覚を生み、そこから間歇的に調度の仮説が生じてきた。ファウスト的な書棚が、寝椅子の置かれているところ以外のすべての壁に天井まで立並び、寝椅子の上にはゲントの聖堂の祭壇の背面装飾の模造品が架けられていて、元のものとの相違は優しい薄闇によって隠蔽されている。

荷を負わされすぎている作業台(私の部屋の間取りではL字形の寝間に当る箇所ほぼ全域を占めている)の近くに、機械装置なのか固定的な彫刻なのか、高さ四フィートばかり、何本かの突立った棒で構成されているものがあり、棒の先についている小さなメタリックな球が蠟燭の灯りに燦めき、それらに囲まれて中央にある大きめの球が黄金いろに輝いている—こうしたエレメントのすべてが、外接する二つの厚い鉄の帯で境界を定められた想像上の球体の中に納まっている。

「あれかい？」とモルデカイがいった。「あれはおれの太陽系儀さ。おれの仕様どおりに造られている。小さな月や惑星の各個の運行は、それぞれの内部にある超超超々小型化されたラジオ・エレメントによって規制される。ポピュラー・エレクトロニクス の頁からぬけでできたみたいだろ？」

「でも、何のために？」

「自然に向けて鏡をかざすんだよ それだけで充分じゃないのかい？ おれは、その昔、占星術を嚙ったことがあるけど、その頃だってシンボリックな意義しかなかったぜ。実際的な作業のためには、上の階に天文台がある。おや、あんたの眼、思惑で輝かなかったか？ 大脱出 の微かな期待に？ 忘れちまいな、サケッティ。おれたちは望遠鏡の似姿がクローズド・サーキットTVで投射される小さなプラネタリウムの彼方へは行けやしないんだ」

「きみは今『その昔』といったね.それは、占星術はやめたということなのか？」

モルデカイは嘆息した。「人生は短いんだ。そんなに何もかもやる余裕なんてあるもんか。考えてもみろよ、おれがもう寝ることもないスケドものこと、それに合わせて踊らずに終わってしまう歌のことを。そりゃあおれだってチャンスがあればヨーロッパへも行って、本で読んできたものがどんな姿をしてるのかを、せめて一目なりとも見てみたいさ。

文化ってやつをな。けど、おれはそんな星のもとにはなかった。おれはいつまでもあんなあのヨーロッパ旅行を羨み続けるだろうぜ。行ってみたいすべての土地。ローマ、フロレンス、ヴェニス。イギリスの大聖堂。モン・サン・ミシェル。エスコリアル宮。ブルジェに」と金泥の額縁の中の血を流している仔羊の絵をふり示して「ゲント。つまり、あらゆるところへだ、おまえさんが行った場所以外のな、とんちき野郎め。スイスにドイツ！ いやはやまったく、あっちで何をうろちょろしてやがったんだ？ つまりだ、山が何だというんだ？ そんなもの、地球のつらの皮のでこぼこじゃねえか。アルプスの北方がどうかといやあ……ま南、おれは四年間ハイデルベルクのはずれに配属されていて、おれに関する限りヨーロッパはライン止りなのさ。それが何より証拠には、おれは実際、休暇のたんびにビールがぶ飲み、肉団子浸りで嬉々としてたよ。ただ、土地のやつらが連中にとっちゃ吃驚するようなおれの膚色をあんまりじろじろ見た時は別で、そんなときにはブヒェンヴァルトからの残り滓の気分を味わされたもんだ。ドイッチェラントとはな！」モルデカイはこの呪いの告白を激越きわまる調子で結んだので、兎が恐れをなして彼の膝から退散していった。「休暇なら、ミシシッピあたりで沢山だ」

話はこのあと、私のフルブライト留学生時代の幾つかの思い出話に移り、それを詳述するのは楽しいがここでの趣旨を外れているので、私がドイツのためにヨーロッパを捨てた(この恒分を、私は戦術的に受け容れた)理由(文学的、音楽的な)の疾しい概略とともに割愛する。

「リルケ、ぐじゃルケ！」とモルデカイは、私が語り終えると言った。「あのな、本ならここでだって読めるんだぜ。いいか今世紀のドイツの魅力はな、厭わしさの魅力なんだ。行けば今でも空中に漂っている煙の香が嗅げる。ひとつだけ聞かせてくれ おまえさん、ダッハウへ立寄ってみたか、どうなんだ？」

行ったことがあったので、それを話した。彼が町と収容所について語れというので、仰せに従った。彼のデテール嗜好は私の記憶力では満足させられないほど旺盛なものだったが、私自身はあれほどまで詳細に思い起こせたことに驚きをおぼえた。あそこへ行ったのはもうずいぶん前のことなのだ。

「おれがこれを訊いたのは」とモルデカイは、記憶の井戸が個れ果てたのを確認すると言った。「ほかでもない、最近、死の収容所の夢をみるからなんだ。先入主としちゃ理解しやすいものといえるんじゃないのかい？ もっとも、そいつはこの西にあるおれたちの小さなホームと似かよったものにすぎないがね。おれが囚人だということ、駆除されるのが運命づけられてるってことを別にすれば、文句をいえた筋合いじゃないな、おれとしちゃあ。結局は、誰だってそうなんじゃないのかい？」

「囚人だということ？ よくそんな気がするよ うん」

「いいや。おれがいったのは、虐殺される定めにあるってことのほうだ。ただ違うのは、おれは運悪く執行令状を盗み見しちまっていて、大半の連中はシャワーを浴びに行くと思っただけでオープンの中へ進んでいくということさ」彼は耳障りな笑い声を上げながら寝椅子の上で横に向きを変え、部屋の反対側の端、時計じかけの太陽系儀のわきに立っている私をもっとよく見ようとした。

「ドイツだけじゃない」と彼はいった。「キャンプ・アルキメデスだけのことじゃない。宇宙全体がそうなんだ。こんちくしょうな全宇宙がくそったれな収容キャンプなのさ」

モルデカイは、咳こむのと笑うのとを同時にしながら、ごろんと仰向けにひっくりかえるようにしてふさ飾りクッションの山に戻ったので、半分中味の残っている魔法瓶が、タイル張の床をおおうペルシャ絨織の上にはじき落されてしまった。彼はそれを掴み上げ、空になっているのに気がつく、罵りめ言葉もるとも部屋の奥へと投げとばしたから、部屋の一隅を仕切っている絵のかかれた衝立ての生地が裂けてしまった。

「ドアのわきのボタンを押してくれないか、サケッティ？　ここでコーヒーと呼ばれてるむかつく砂糖水がもうちょい欲しいんでな。気付葉だ」

私がベルを鳴らすか鳴らさないかの間に、黒い制服の衛守が(屁こきだった)御入来、パイ類を満載したコーヒー・ワゴンを押していて、そこからモルデカイが幾つか選んだ、私には、もう一人の介護人がフレッシュなニンジンのスライスがいっぱい入ったスポード作の磁器のボウルを三つ手渡してくれた。

モルデカイは本や紙の堆積屑を作業テーブルの縁から押し戻して、われわれのカップ皿やパイ類の盛り皿のための場所を作った、彼は大きなチョコレート・エクレアにがぶりと食らいついたので、もう一方の端からホイップクリームが、数字がタイプで打たれている紙の上にほとぼしり落ちた。

「いつも思うんだが」と彼は口を一杯にしたままでいった、「こいつが肉だったらなあ」

この間に兎たちが机の上まで登ってきていて、慎重に自分たちのニンジンも蓄っていた。蠟燭の灯りのもとでさえ、私は彼らが開いたままの書物や 秘 書類挟みの上に残した明瞭な蹄冠瘻の跡を見ることができた。

「ほれ、遠慮なく遠慮なく」とモルデカイがチーズケーキを取りながらいった。

「ありがとう、でもほんとおなかが空いていないんだ」

「だったちおれのは気にかけてくれ。おれは腹が減ってるんだ」

私は彼のことを気かけまいと精一杯のことをしたが、そのためには注意をよそにふりむけることが必要で、さてそうなると、二つのコーヒーカップと四つの大きなパイ皿のある場所でできることといえば、モルデカイの「作業テーブル上の最上層の堆積物の無作為抽出検査だった。左記の在庫品目録に於ては、遺憾ながら、三つの蠟燭の光の輪の外に

あったすべてのものは、下に埋れているいっさいの思想的トロイ遺跡とともに省略せざるをえない。

私は見た

錬金術に関する書物数冊 Tabula smargaina、ベネディクトゥス・フィグルスの A Golden and blessed casket of Nature's marvels, ジャービル 全集、ポアソンの Nicolas Flamel、等々 美観上の最終段階にあるものがかなり。

乱数表

電子工学のテキストが三、四冊 そのうち最大のもの DNA Engineering カリフォルニア工大の神童カート・ヴリーデン著、タイプ稿本で、誘惑的な 秘 ラベルが厚紙製バインダーに糊づけされている。

スキラ版美術書から破りとられたカラー図版数葉、主としてフランドル派の巨匠たちの作品だが、ラファエロの アテネの学園 の部分図と、デューラーの木版画 メランコリア のぼろぼろになったのが一枚あり

プラスチック製の頭蓋骨、実に装飾的で、眼は鉛ガラス製の模造ルビー

イーニッド・スターキーのランボー伝、およびプレイヤー版のランボー詩集

ヘイスティング百科 第 IV 巻、開かれていた頁にモルデカイが (或は兎の一匹が?) インク壺をひっくり返した痕

ウィトゲンシュタインの対訳版 Tractatus Logico-Philosophicus、革装に同様のインクが少々 (今、この目録を作りながら思い起すのは、ルターのインク壺の利用法)

ノコギリ草

書類挾数通、色はさまざま、オレンジ色、鞣革いろ、グレイ、黒、タイプ打ちされたラベルはとぼしい光のもとでは殆ど読みとれなかったが、例外はいちばん近くにあった G・ワグナーの 歳出簿。これの頁から (その一部だったのがはずれたのか、それともただの朶なのかはわからないが) かりかりになった仔羊皮紙が突き出していて、そこに、並の入間のいたずらがきよりさほど上等とも思えない下手な絵が色インクで画かれていた。私が見ることのできた部分には、冠を被って顎ひげを生した男が長い笏を持っており、この上に順々に重なって更に六つの王冠がある。王様は蔓草から花のように開いた奇妙な台座に立っていて、蔓の枝が王様の頭の上方に拡がって一種の格子文様になっている。この格子の隙間にまた六人の男の首、身分が低そうではっとしない顔があり、それぞれの脇に D から一までひとつずつアルファベットの文字がある。この首を突らせている蔓の左側の部分はジョージの閉じた本の中へ巻きねじれながら伸びていて、見えなかった。

そして、これらすべてに蔽いかぶさっているのがモルデカイのなぐり書きの草稿の山で、その中には幾つか、私がいま記述したばかりのものよりももっと粗雑な絵もあった。

目録おわり。

時おり兎たち (は自分たちの分は食べ終えて、パイの皿を嗅いでいた) に放心状態で愛撫する以外には、モルデカイは黙りこくってパイをむさぼっていた。最後の苺パイを食べ終えると、しかし彼、はまた、躁狂的とはいわないまでも饒舌になって

「あんたには結構な暑さかな？ ほんとは、お客がある時にゃオープンを弱めるべきなんだが、そうなるこっちが震えがくるんでね。本物の賢者の卵を見てみないか？ 錬金術士なら、こいつなしじゃいられないってもんだ。もちろんその気はあるよな。来いよきょうはあんたにありったけの秘法を披露してやるぜ」

私は彼に従って部屋の奥の、衝立てで仕切られた隅へと進み、近寄ってみると、どんなふうにも熱が加えられているのかがわかった。衝立てで隠されていた、ずんぐりした陶板製の炉で空気が熱せられ、サウナの温度になっていたのだ。

「御覧ぜよ！」モルデカイは唱った。「温浸炉なり！」

壁の棚から彼は二つの重い防面具を降ろし、一つを私に手わたした。「こいつは婚礼の奥の間が開かれちゃった時のためだ」と彼はポーカーフェイスで説明した。「おれの温浸炉は大目にみてもらわなきゃならん。電熱式というのは、あんまり *comme il faut* なもんじゃない」(礼にかなったフランス語も、モルデカイが発音すると *comme-il-phut* いかれてペしゃんになってしまう)「そいつは認めるが、けどこの方式のほうはずっと楽に火を、浸漬的で蒸解的、連続的、非暴力的、潜行的、包み込まれ、空氣的、遮閉的、腐蝕的なまに保っておけるのさ。おれたちはここで錬金術の伝統的な目的に向っているんだが、おれたちが使う手段のうちの幾つかのものについちゃあ、おれはちょいとばかり勝手にやってるわけだ。

さて、そのマスクをつけたら、おっかさんの腹ん中を覗かせてやるぜ、こいつは仲間内の愛称でね」

マスクの眼の部分の切れこみには色ガラスで蔽いがつけられていた。暗い室内でこれを装けると、私は実質的に盲になった。

「*Ecce* (そうれ)」とモルデカイがいうと、耐熱陶板製の炉の蓋がメカニカルなぶーんという音とともにずれ開いて、白熱する凹面が姿を見せ、その中にぼうっと輝く、高さ二フィートほどの偏球形のものがあつた 賢者の卵だ (散文的にいえば、レトルトである)。オランダ式のオーヴンに幾分似ていて、同じくらいに興味深いものだった。

蓋が唸って閉じると、私は汗みずくになったマスクを顔からはずした。

「丸太の火のほうがもっとぞっとしただろうな」私はいった。

「目的は手段を正当化するのさ。こいつはしっかり働いてくれる」

「ふむ」といいながら私は部屋の反対側にある私の台椅子に戻った。ここは程よい九〇

度だった。

「働いてくれるんだ」と言張りながら彼はついてきた。

「厳密なところ、あの大きな鍋で何を料理しているんだい？ 卑金属を黄金に変える？ 詩的な連想はともあれ、何の役に立つんだい？ 近頃では金よりも珍重される元素もかなりある。ケインズ以後の今の時代には、それはいささかドン・キホーテ的な志になってしまっているんじゃないのかい？」

「ちょうどそいつとおんなじことをおれはハーストに、何カ月か前、実験の案を練ってたときに言いきかせたよ。よって、メタリック・オパス はわれらの行程上のほんの一步にすぎず、窮極のゴールはわれらの共同利益となる錬金薬液の蒸留精製である、というわけだね」モルデカイは微笑した。「長生の霊液だよ」

「回春の、と呼ばれていたと思ってたけど」

「そこんところが、もちろんハーストにゃ魅力なわけだな」

「それで、その妙薬はどうやって醸成されているんだい？ 調合の処方門外不出の秘伝だろうと思うけど」

「幾つかの項目はそうさ、けどそれはジャービルやパラケルススを掘起しや済むこった。しかし、サケッティ、おまえさんほんとに知りたいのか？ 探りあてるために、救済を賭ける気があるか？ おれにも、救済を賭けさせたいか？ レイムンドゥス・ルルスはこういってる、『わが魂にかけて汝に断言す、汝これを暴かば呪わるべし』もちろん、あんたがざっと一通りの説明で充分だというんなら……」

「イシスがすすんで披露したもうものなら何であれ」

「賢者の卵には あんたが温浸炉の中に見たでっかい鍋のことだな 水に溶けた嘗め薬が入ってて、こいつはこれまで九十四日間、昼は大地の火、夜はシリウスの星の光に代わりばんこに曝されてきてる。正しくいうなら、金は金属じゃない、光だ。シリウスは昔からずっと、この種の操作には特に効力があると考えられてきたんだが、これまでの時代にはシリウスの光を純粋な状態とらえこむのは難しかった、とかく近くの星からの光が混って特殊な性質を弱めちまったもんでな。ここじゃ電波望遠鏡を使って、必要な等質性を確保している。卵のてっぺんに嵌めこまれてたレンズを見たか？ あれが焦点を合せて純粋な光線の中にいる花嫁と花婿、硫黄と水銀に当てるって寸法さ」

「ぼくはきみがシリウスの光を求めてたと思っていたよ。きみは電波を得ているわけか」

「そのほうがずっといいんでね。電波と光波の間に線を引くのは人間のあさはかさにすぎないのさ。おれたちがそうできるほど霊的になりさえすれば、電波も目にみえるようになるはずだ。しかし話をもとに戻すと 九と九十日後、夏至祭の前夜に聖物安置所が開かれ、霊薬は移し変えられることになっている。けど、笑うんじゃないぞ、いいな。そん

なことしたら、効果がすっかりだめになっちまう」

「失敬。そうしないようしてみるけれど、きみは本当にこういうことが得意なんだな。ぼくはいつもベン・ジョンソンのことを考えているんだ」

「おれが真剣じゃないと思ってるのか」

「おそろしく真剣だとね。それに舞台効果も、ジョージが『フォースタス博士』のために考案したどんなものよりも上だよ。つまり本箱の中に並ぶあの胎児の壺、あの聖杯……あれは聖別されているんだろう、もちろん？」

モルデカイは頷いた。

「わかってたよ。それに、きみがきょうしている指輪 それはみんな、フリーメーソンのリングだろう？」

「ひどく古めかしいやつでね」彼は誇らしげに指をうごめかした。

「きみは大向う受けする演技をするけど、モルデカイ、アンコールには何をやるんだい？」

「こいつが今度うまくいかなかったら、おれはもうアンコールのことなんか心配することもないんだぜ、そうだろうが。最終期限は迫ってるさ。けどこいつは絶対にうまくいくんだ、どえらくな！ 心配なんざこれっぽっちもしてないったら」

私は途方にくれて首をふった。モルデカイが自分自身の見事な大べてんに乗せられてしまっているのか、それともこうした使徒信条はただ単に、もっと大きな欺瞞のために必要な添えもの、いわば前座にすぎないものなのか、判断がつかなかった。私はまた、こうも考え込みはじめていた、十分な時間を与えられたなら、彼は私をその愚行に改宗させることができるのではないか 理をわけた議論によってでなければ、あの無表情でたゆむことなき真摯さの、この上なきお手本を示すだけで。

「なんでこれがあんたにはそんなにばからしく見えるんだね？」とモルデカイは問うた、無表情に、たゆむことなく、真摯に。

「それは、空想と事実の、狂気と分析の結合なんだよ。きみの机の上のああいっただ書物だよ、たとえば ウイトゲンシュタインにグリーンデン。きみは実際にあれを読むんだろう？」彼は頷いた。「ぼくも、きみがそうすると信じるよ。そういったものがあって、それと並んで、こじつけそのもののパイロン流悪魔学、愚劣な料理なべや壕詰めの胎児」

「なるほど、おれば錬金術の手続きを現代化するためにできるだけのこととはやってるが、ピュア サイエンス、大文字のSで始まるやつに対するおれの態度は、一世紀前に仲間の錬金術士、アルチュール・ランボーが表明してるぜ Science est trop lente. のろすぎる、ってな。彼以上におれにとって、どれだけそうであることか」おれにどれだけ時間が残されているか？ ひと月、ふた月。それで、月でなくて年だったとして、どんな違いがある？ 科学は、宿命的に熱力学第二法則に黙従する。魔法は自由に良心的拒否者

になれるんだ。実のところ、おれは自分が死ななきゃならん宇宙に興味はないのさ」

「それはつまり、きみが自己欺瞞を選んだということになる」

「いいや、とんでもない！ おれは脱出を選ぶ。おれは自由を選ぶんだ」

「きみはそれをみつけるのに絶好の場所へ来た」

モルデカイはますます落ち着きを失くして、それまでも寝椅子に覚れかかっているだけだったのが寝返りを打つようにして離れ、身ぶりをしながら部屋の中を歩きまわりはじめた。「いかにも、ここはまさしくおれの自由が最大になる場所だな。有限で不完全な世界でおれたちが望める何よりのものは、心が自由になることで、このキャンプ・アルキメデスには、おれにまったくそんな自由だけを認めてあとは一切みとめないというふたつとない態勢が整っている。まあ、プリンストンの 先進研究機関 も例外にしていいたいだろうな、あそこもおれの理解するところだと全く同じような方針で組織されてるんでね。ここじゃ、ほら、おれは何もかも無視してられる。よそではどこでも、戦術的に自分の環境を受けいれはじめ、戦うのを、それぞれの新たな不正や非行と取っ組み合うのをやめ、絶望的に妥協していく」

「たわごとと詭弁。きみは理論を試着しているだけだよ」

「ほう、あんたはおれの胸の裡までお見とおしだな、サケッティ。けど、結局のところ、おれのたわごとと詭弁には意味があるのさ。あんたのカソリックのゴードをこの監獄宇宙の所長にするがいい、そしてあんたは厳密にアキナス流の論法、たわけたこじつけを守ってるがいい。つまり、おれたちが自由になれるというのは 彼 の意志に従ってるにすぎない、ってやつさ。ところが実際には、ルシファーがよく知っていたように、おれが知ってるように、あんたもそれとなく示したように、自由になるには 彼 に向って鼻先に親指をつけてみせるほかないんだぜ」

「そしてきみは、どんな代償の上にそれがなされるのかを知っている」

「罪の報いは死なり、さ、ところが死はまた同様に徳の報償でもある。となりやもって上等なこわがらせのネタが必要になる。地獄かね、ひよっとしたら？ なあに、ここぞ地獄なれば、われもここより外にはあらず、さ！ ダンテはブッヒェンヴァルトの収容者におびえたりはしないぜ。なんでおたぐの聖なるピウス法王はナチのオープン焼きに抗議しなかったか？ 慎重さや臆病さからじゃない、職務への忠誠の本能からだ。ピウスは死のキャンプが、死すべき運命にある人間が 全能者 のプランに向ってこれまでになした最も近い接近だと、感じとったんだな。神は、アイヒマンの特筆大書版なり、ってわけさ」

「いかにも！」と私はいった。これはと思えることがあるからだ。

「いかにも」とモルデカイは言張った。部屋の中をさらに速く歩きまわった。「考えてもみなよ、キャンプのあの根本組織原則を 囚人の行為とその報償または処罰との間には

いっさい関連なかるべし、ってやつをさ。アウシュヴィッツじゃ間違っただけをしたら罰をくらう、けど言われたとおりにしてもやっぱり、いや、全然なんにもしなくたって処罰されかねないんだぜ。ゴードがおんみずからのキャンプをおんなじ方式で組織あそばしてのはもう明らかだろう。伝道の書から一件りだけ引用すると（おふくろはこのくだりが自分の人生に特別な関係があると信じてたものさ）『義人がその義によりて滅ぶことあり、悪しき者その悪によりていのち永らうこともあり』而して知恵も正義より有用なるものにはあらず、賢者も愚者と変ることなく死すものなれば。

おれたちは焼却炉の外で、黒焦げになった子供たちの骨かち目をそらせるが、おさなごをしばしば全くおんなじやつを永劫の火ん中へ墮とすゴードはどうなんだ？ しかもどの場合にも全たく同じ弱み 生れという偶然の出来事を咎めだてするんだぜ。ほんとの話、いつかヒムラーは聖者に列せられるだろうよ。なにせピウスはもう列せられているんだからな。出ていくのか、サケッティ？」

「きみとは議論したくないよ、きみはぼくにほとんど選択の余地を残してくれないし。きみのいうことは……」

「言語に絶する。あんたにはそうだろうが、おれにとっちゃそうじゃない。もうちょっと長くとどまってくれるなら、しかしおれももっと手加減すると約束するけどね。お返しもしよう キャンプ・アルキメデスがどこにあるのか教えてやるよ。全能の神の設計図の上でじゃなくて、地図の上で、さ」

「どうやって知ったんだい？」

「星でさ、航海者なら誰だってやるようになる。ほれ、天文台というものにゃ、リモコンの観測所だって、もっと散文的な利用法もあるわけだね。おれたちはコロラドにいるのさ、そいつを見せてやるう」

彼は棚からフォリオ版の書物をおろし、机の上にひろげた。二頁にわたって州の地勢図があった。「おれたちがいるのはここ」と彼は指さしながらいった。「テリュライドだ。世紀の変りめの頃にはでっかい鉱山町だった。おれの仮説だと、キャンプへの入口は昔の鉱道の立坑のひとつを通ってるにちがいない」

「しかしきみたちの観測がすべてテレビを使ってなされてるんなら、望遠鏡が頭の真上にあって百マイル、いや千マイル離れているわけではないと確信はできないんじゃないのかな」

「どんなことだって確信なんてできるものじゃないさ、まあそんなこといくら思いわずらってみたって無駄な努力というもんだと思えるがね。それにここには、おれがおとといカタコンベの床から拾ってきた角礫岩がある。こいつにはシルヴァナイトの筋が入ってる、含金テリュライト鉱のひとつだ。となると、おれたちはどこかの金鉱にいることに

なる」

私は、自分でジョークをいう前に笑ってしまった。「ここで マグナム・オパス の大事業を営むのは、間違いなく、ニューキャッスルへ石炭を運び込む類にあたるよ」

モルデカイは笑わずに(そんなに圧倒的なジョークではなかったと今ではわかる)いった 「静かにしろ！ なにか聞こえるぞ」

長い沈黙ののち、私は囁いた。「何なんだい？」

モルデカイは顔を大きすぎる両手で隠して、返事をしなかった。私はジョージ・ワグナーをはじめてみた時、暗く連なる通廊で幻影に耳を澄ましていた姿を思い起した。懐えがモルデカイの身体を貫いてゆき、やがて彼は力をぬいた。

「地球の身ぶるい？」と彼は微笑みながら一案を示した。「いや そうじゃない、想像力がほんのちょっと炎症を起しただけ、だと思ふな、ブラザー・ヒューゴーの場合みたいに。けど今度はあんたが話してくれなきゃならんぜ、正直にほんとのところ、おれの実験室をどう思う？ 適切なものかい？」

「いやあ、とても素敵だよ」

「これ以上素敵な独房に収監されるのを望めるもんかな？」彼は迫るように問うた。

「ぼくが錬金術師だったら、望みようがないね」

「足りないものはないか、何ひとつないか？」

「ぼくが読んだところでは」と私は探りを入れるようにしていった(こんなに熱烈に問う彼の意図がわからなかったので)、「何人かの錬金術士は、十六世紀と十七世紀に、実験室に七管のパイプ・オルガンを置いていたそうだ。音楽で牛にもっと乳を出させようというわけなんだけど。きみの研究に何か役立たないかな？」

「音楽？ おれは音楽は大嫌いだ」とモルデカイはいった。「親父はジャズ・ミュージシャンだった、それに兄貴ふたりもな。場末のそのまたいちばんはずれのやつだが、それが奴らの生きがいだ。練習してないときにゃレコードをかけるかラジオを鳴らしてた。おれは口を開くこともほんの小さな音を立てることもできなかった、こっぴどく叱られちまうもんでな。おれに音楽の話をするんじゃないぜ！ 黒んぼには天性のリズム感覚があるってことになって、それでおれは三歳になるとタップダンスのレッスンを受けはじめなきゃならなかった。おれはそいつが下手っぴいで、だいきれえだったんだが、ほれ、こんな天性のリズム感があつたもんだから、レッスンは続けられた。教師はおれたちに昔のシャーリー・テンブルの映画の抜粋をみせて、おれたちはあの子の型を最後の微笑とウインクまできっちり身につけなきゃならなかった。六つの時にマミーがおれをローカル劇場でやる木曜の夜のタレント・ショーに連れてった。こんな糞エレガントなりトル・エンジェルのコスチューム、金ラメと派手はでのプリント地で盛装させてさ、おれの曲目

は I'll Build a Starway to Paradise だった。あんた、こいつを知ってるか？」

私は首をふった。

「こんなふうに行くんだ……」彼はきしるようなオウムめいた裏声で歌うと同時にカーペットの上で足をシャッフルさせはじめた。「えい、こん畜生め！」とどなって中止した。「いったいこなくてそつたれな絨毬の上でどうすりゃ何かができるってんだ？」彼はかがみこみ、文様入りのカーペットのふちのふさ飾りを掴むと、タイル張りの床からそれを引剥がし、その過程で調度をひきずってずらしたりひっくり返してしまったりした。

それから、いちだんと大声でグロテスクな歌と踊りを再開した

「わたしは築きます天国への階段を

日毎新たなステップで……」

彼の両腕は調子っぱずれのメロディと同調せずに殻竿のように打ちはじめた。フットワークは混乱した足踏みにすぎないものになっていった。「なんとしてでも参ります」と彼は金切声をあげた。両腕を前方に振り出して、仰向けに倒れた。歌は痛ましい絶叫に変質していき、腕と脚はなおも殻竿をふりまわし続けていた。彼は頭を激しく床のタイルに打ちつけた。

発作が去ったのは衛守たちが看護入を伴って到着する寸前だった。モルデカイは制止され、鎮静剤を与えられた、

「今はしばらく彼のもとを離れていただかなくてはなりません」と衛守の班長がいった。

「持っていくことになっていたものがあるんだ。ほんの一秒待ってもらえば……」

私はモルデカイの作業テーブルのところへ行って、モルデカイが地図を拡げた際に目にとめておいた 極秘 の書類挟みを見つけた。班長はそれを疑わしげに見た。

「それを取扱う権限をお持ちですか？」と彼は問うた。

「彼が書いた小説なんだよ」と私は説明しながら書類挟みからタイプ打ちされたページを抜き出して彼に表題を見せた 『ポンパニアヌスの肖像』「これを読んでくれと頼まれてね」

彼はタイプ打ちのページから眼をそむけた。「オーケー、オーケー。でも後生ですから私にそれを見せんで下さい！」

私はそこで彼を看護人や衛守たちと一緒に残して去った。モルデカイと一緒にいると、いつもその直後に、まるで大事な試験にしくじってしまったような気分になるのはなぜなのか？

追記

モルデカイからメモ。彼は、本人が唱える、には、こんなに気分がよかったことはないそうだ。

六月十七日

大いなる喜び、そしてそれに呼応して大いなる苦痛が(唯一おもい浮かぶ隠喩は、なさないことに肛門をめぐるもの)、新たなウーヴルを(隠喩はおずおずと顔を覗かせる)出すことにはある。素晴らしい単語だ、oeuvre というのは。

ルイ二世の近頃のこの頁への侵入は、あるへ点では有益なことなのかもしれない。それは私に、過去の作品をより明確に見ること、そのすべてがいかに全く俗悪なものであったか……あるかを認識することを許してくれた(強いた、というべきか)。私はこの否認に、と言い添えるべきだろう、最近のあの大ぼら吹きまくり The Hierodule を含める。

また、現実の 進行中の作品 のほかに、私はもっと大きなもの、ことによると私自身のマグナム・オパスの閃きを得ていて、これはひとつにはきのうのモルデカイの冒瀆的言辞にインスピレーションを得たもので……「ポンパニアヌスの肖像」を読んだ。予想以上にいい、それでいて妙に当てはずれ。それは実にコントロールされた物語で、プロットは実に細心に練り上げられ、用語が実に見事に配列されているために、私が不機嫌になっているからだと思う。私は、cri de coeur、非具象的なアクション・ライティング、真実のモデルカイ・ワシントンの内々に垣間見させるようなものを、期待していたのだった。さしずめR・L・スティーヴンソンなら「肖像」を「夜の泊り」と対をなすものとして書いたかもしれないように(ただ、そちらは四万語、ほぼ長篇に近い長さだが)。

論旨は詳述に値する。ことに私はきょう、変更中の索引(語呂合せ、ジェイムズ・ジョイスに敬意を表して)からの抜粋以外に日誌を埋めるものが何もないのだから、これほ、したがって事こまかに

「肖像」は、ルージ・クルワートル修道院で狂えるファン・デル・グースがブラザーたちから「才智の炎症」の治療を受けている、型通りのてんやわんやではじまる。治療は優しいのと身の毛もよだつようなのを交互に繰返し、一樣に効果がない。ファン・デル・グースは自分の破滅の避け難さへの恐怖の発作の中で死ぬ。

埋葬後(その前に見事な葬儀の説教がある)夜中に見知らぬ人が来て、柩を掘り出して開き、遺体に生命を吹き込む。ヒューゴーは、ここでわれわれは覚るのだが、魂を売渡していたのであり、その代償は(1) フランドルでは風評や版画を通してしか知られていない偉大な絵画 マサッチョやウッチェロ、デラ・フランチェスカらの作品 のすべてを

見るためのイタリア半島総巡りの旅と、(2) 画家としての三年間の至上の技量。北と南の巨匠たちを凌駕するのみならず、全能者の創造物とすらも競いあうことが彼の野望なのである。

ストーリーの主体はファン・デル・グースの、ミラノ(ここで若きダ・ヴィンチとの短くも信じ得べき一景がある)、シエナ、フローレンス訪問をめぐるもの。ヒューゴーと、その魔性の連れ、そして当時の画家たちとの間で芸術碎本質と目的をめぐる長い議論が重ねられる。ファン・デル・グースの最初のテーゼは一般的に唱えられているもの。芸術は現実の鏡となるべし。彼はこれがいかにすれば最もよくなしうるのか、解明することができないフランドル派の顕微鏡的な描法と宝石のようなトーンによるべきか、それともイタリア式の空間支配と造形的なフォルムによればいいのか。しかし、約束された技量を得てこの二つの流儀の統合を達成していくにつれて、次第に彼の関心のまとは現実を映し出すことではなく(悪魔のそそのかしのもとに)屈服させることになっていく。芸術が魔術へと変容していくのである。

至高のウーヴル(三年目が終りに近づく頃)、標題にあげられている肖像画においてのみ、彼は超自然的な目的を達成するのだが、それでもなお、悪魔が彼を地獄へ連れ去るとき、読者は物語の破局がはたしてヒューゴーの魔術の結果なのか、それとも悪魔の好計によるものにすぎないのかという疑念へと導かれていく。

筋立てにはかなり煮えきらないファウストマルガリート風のロマンスが織りこまれていく。私はヒロインの描写にくすくす笑ってしまった。彼女は、少なくとも外見上はドクター・エイミー・バスクをモデルにしているのだ。これがロマンスとして説得力を持たないのも不思議はない!

要約すると。私はこの本が気に入った、そして画家と悪魔についての本が好きな人なら誰でも気に入るだろうと思う。

追記

共同食堂(ここではシェフをキュナール方面から入れているにちがいない!)で囚人たちとディナーを食べた一時間を別にすれば、一日中、そして夜の半分も仕事に取り組んでいた……きょうのはじめに微かな兆しを得た”もっと大きなもの”に。これは戯曲で、この様式での私の処女作になり、スピードだけでもなんらかの美点の兆候になるものなら、素晴らしいものにちがいない。草稿の第一幕の半分を仕上げたのだ! 題名を明らかにするのが不安になるくらいだ。私の一部はいまも自分のしようとしていることから後ずさりする、「裸のランチ」を突きつけられたパウドラールといった風情で。もうひとつの部分はその急騰する、跳梁する大胆さに息をのむ。大したじらしようだ! さて、承知しております

よ、幕を開けるか口を閉じるかせずばなりませんまいな

アウシュヴィッツ

喜劇

モルデカイの「才智の炎症」は伝染性のものにちがいない。天使と寛大なる諸卿よわれをまもりたまえ！ 私とはとり惹かれているような気がいたします！

六月十八日

日常世界の構成要素

時計。通路の時計、特大、製造元の宣伝をし、中庸を保とうと懸命で、気ぜわしくなるまいと気を記って、公共の建物にある時計のよう。ところが分針は、他の電氣的な計時装置の、ゆっくりとした、それとわからぬような、川のような流れではなく、だしぬけな、意気阻喪させるような半分毎のジャンプ、時間の目、里塊と共に動く。針は矢なのだが、この矢は動きがリニアからロータリーに変換されている。まず、ぶんと弓弦から放たれ、すぐさま絶対確実な命中。そしてしばらくの上で震える。こんな仕組の時間を問うのは気が進まなくなってしまう。

自然のシンボルの欠如。ないものを列挙する。太陽、及びそれに付随する諸現象。色彩、あるのはただわれわれが壁にひろげたもの、乃至はわれわれが身につけているもの、あるがままに存在を思い浮べるまでもなかったものばかり、自動車や船や荷馬車や軽飛行船など、いっさいの目にみえる輸送手段(われわれはどこへ行くのにもエレベーターに乗る)。雨、風、いっさいの気まぐれな天候の兆候。風景(どんなにか心豊かなものに見えることだろう、たとえネブラスカの大草原でも いや、果てしない砂漠でさえも)、海の眺め、大空、樹、草、土、生命-われわれ自身の衰えゆく生存以外のいっさいの生命。われわれの間にまだみつかる自然のシンボル ドアや椅子や果物鉢や水さしや履き捨て靴のような古めかしいシンプルな品々 さえも、すっかり仮想的な性質を帯びるように思える。やがては、と想像してしまう、環境はきれいさっぱり消え失せてしまうのではあるまいか。(これは私の観測にすぎないので、念の為。創案はバリー・ミード)

ファッションの指令。あたかもここでわれわれに許されている見せかけの自由をパロディ化するかのよう、囚人たちは度を過ぎたばかげたダンディズムに身を投じ、いい身なりをしようというよりはむしろ、隆盛だと ヒズ や タイム がいうものになら何にでも流行に乗ろうと血まなこになる。鬘、拍車、おしろい、香水、入浴用具、スキー・ウエア どんなものでも。そしてこれらの花々は、開いたのと同じように突如として萎れてしまう、今朝の審美家は午後には禁欲主義者となって、いかに自尊心ある苦行所も収容

者に支給しないような質素きわまりない、つぎはぎの自家製の囚人服を着るのである。

ダンディズムは、私の思うに外部の世界との、そして過去との連帯の、憧れをこめた表現であり、そこからの反動は、そんな連帯は達成しえないのだという絶望の表明なのだろう。

料理。ここの食事はとても信じられないほどいい。たとえばきょうは、実に多様な選択のできる朝食の中から揚げバナナと、卵を落した辛味のトマト・ソース、ソーセージ、あつあつの軽焼きパン、そしてカプチーノをとった。午にはバリー・ミードならびに僧正と一緒に僧正の房でランチ、私は半ダースのブルーポイント生牡蠣、クレソンのサラダ、菰米を敷いた上に並べた米喰鳥、冷やしたアスパラガス、そしてデザートにはダム・ブランシュにサワー・ホイップ・クリームと柘榴シロップを添えて食べた。食事がシャンパンを求めて泣くとすればそれはまさにこんな場合だが、昼食のパートナーのどちらも飲めず、あるいは飲もうとしなかったので、私はモロッコのミネラル・ウォーター、ウルメスで折合った。(私がシャンパンを得られないとなれば、少なくとも、誰かに多大な迷惑をかけているのだということがわかる) 夕食は大半の囚人にとってその日の主要な社交の機会、慌しく済ませてしまうような者は一人もない。幾つものとびっきりの可能性のうちから私が選んだのは、海亀のスープ、オードブルには胸腺。シーザー・サラダ。虹鱒、薪火でじっくり焼いたもの。レーメダリヨンの赤すぐりソース添え。蒸焼きの人参、隠元豆のアーモンド和え、見なれないほこほこしたポテト。そしてデザートにはヴィーネルシュマルムを二人前。(私はこれまでになく目方がふえてきている、というもこれまではこんなに来る日も来る日も食べるようなチャンスがなかったので あるいは、自分の引用開始 容姿 引用終りを気にかけるよ、つな理由がほとんどないからか。私は他の囚人たちから驚異の存在とみられている。彼らには刑の宣告を受けた人間に予想される以上の食欲はない、まして彼らは重病人なのだ。彼らはこうした宴会でつむじを曲げて執拗にいう、「おれたちにケーキを食わせろ！」)

独房。気まぐれと費用のかさむことが唯一の共通点。僧正は、聖職者的なキャラクターに似つかわしく、教会風の調度にふんぞりかえっている。ミードは救世軍の脇卓で一杯の部屋を所有(これで映画を作っている)。マレー・サンドマンは由緒正しきバウハウスの骨董を保持。そして私は、ようやくモルデカイの助言を受けいれて、飾りつけを趣味に合うよう変えさせた。部屋は剥き出しになり、そこに私は寝棚とテーブルと椅子と共存し、裸の壁にまず空想の素材で服を着させようとしていて、決めかねている。私は、くやしいことに、今のままにしておくのが気に入っているようだ。

訪問時間。この日誌とは相容れないことに、誰も他人とあまり時間を費さない。食堂やその他の幾つかの区画では誰彼なしの会話が大量にみられているが、図書館や通路 etc. で

偶然に出会った相手に話しかけるのは無作法にあたる。大半の社交活動はきわめてフォーマルな方式に則って行なわれる、明確に刻限を定めて衛守の配達する招待状を出すのが慣わしである。誰もが、いかに自分の時間が短いかをあまりにも痛切に認識している。誰もが、的で震えている時の矢を見ることができるのだ。

これについては、たぶん明日、もっと。

追記

アウシュヴィッツ 第一幕、完成。第二幕は重量不足、

六月十九日

日常世界の構成要素 (承前)

映画、火曜と木曜の夜。セレクションは誰でも(だが私は不可!)提案できるノミネーションのリストにもとづく多数決による。実際には各週に新作一本と再上映一本になる。今週の番組。遂に最高裁を勝ち抜いたフェリーニの「コメディア」の恐れおおい断章。グリフィス製作のイプセンの「幽霊」。同じ役者が恋愛遊戯に耽る父親と病気の息子の二役を演じていた。最後の巻の終りのところで、黄色いフィルターが映写機に挟まれたのか、あるいはことによるとフィルムに色がついていたのか、そこで主人公は、大仰すぎるがまったくきくりとさせるような運動失調の発病に見舞われる。「幽霊」には、とりあわせとして四〇年代からかなりの数のテリートゥーンと、理解に苦しむ退屈な紀行譚(スコットランド高地での鱒釣り)。なぜか? キャンプの感覚によるものではまったくない(誰も笑ってはいなかった)。たぶんこれもまた、より広い外部の空気頭の世界との連帯をめざす無為な努力なのだろう。

その他の娯楽。ジョージの死以降、演劇に対する関心の復興はみられないが(私が アウシュヴィッツ を完成した暁には上演されるかもしれないけれども)、時おり囚人の誰かが最新作の公開朗読会を行なう あるいは展示会か、まあ何とでも呼ぶのはご随意 ハブニング の類。そうしたものには一度しか行っていないが、スコットランドの休日 と同じくらい、あるいはそれ以上に退屈なものだった。年下の天才の一人による英雄対連休での錬金術もの。ふむふむ。

団体競技。そう、たしかに私はそういった。モルデカイが数か月前にクローケーのよく出来た改訂版を考案した(ある程度はルイス・キャロルのゲームにもとづいて)これは一チーム三名から七名までのプレーヤーで行なわれる。毎金曜の夜にコロンビアンズとユニテリアンズの試合がある。(チームの名は決して見かけほどお上品な体裁ぶったものではない。これは梅毒の本質と起源をめぐる問題での対立する思想流派に関係があるにちがいない。

なくて、コロンビア派はスピロヘータはコロンブスの船員たちによって新世界からヨーロッパへ輸入されたのだと主張し、これなら一四九五年の大流行の説明がつく。一方、一体派の信ずるところでは、見た目には多種多様な性病は実はひとつのものであり、これを彼らはトレポネーマ病と呼ぶわけだが、そのプロテウスの如き多彩さは社会状況と個人の気質と風土のヴァリエーションによるものだということになる)

アノミー。驚くにはあたらない、というのも重大な社会的ないしは家庭的な係累の欠如というのが囚人の選抜の条件のひとつだったのだから。今、なるほど一種の団結心が、コミマティがある。だがそれははずれ者のコミュニティであり、心さむい慰めだ。愛の高揚、より穏かだがより長続きする予孫繁栄の喜び、年々、自分自身の生活のフォームを築き上げていき」そのフォームをとにかくも意味のあるものにしていくという通常の、標準的な幸福、そういったようなすべてのもの根本をなす人間的な経験が、彼らには可能性においてすら認められていないのだ。ミードがきのう無念そうにいったように、「ああ、おれがあとに残してこなかったあのすべての女たち！ 惜しいなあ！」彼らの非凡な才能は、他の点で埋めあわせてくれるのかもしれないけれども、彼らと一般の凡人たちとの間に開いた距離を増大させることにしかならない、なぜならたとえ彼らが治療され、キャンプ・アルキメデスを去ることを許されたとしても、その世界に安住することにはならぬだろうから。この地中深い穴の中で、彼らは太陽を見ることを学んだ。外の光の世界では、人々はいまも洞窟の壁に映った影を眺めているのだ。

追記

第二幕完成。

モルデカイがきょうまた、さらにひどい発作を起した。マグナム・オパスは延期する必要があるかもしれない。あるいはマレー・Sが恭しく呼ぶところによれば、ビッグ・ディールは。

六月二十日

モルデカイは元気を回復、これでスケジュールも保たれる。些事の年代記を綴る能力は潤渇。今はただ待つのみ。

追記

第三幕、半分。こいつはファンタスティック。

六月二十一日

ファンタスティックだ、そして完成！

校訂すべき点はもちろん多々あるが、とにかく出来たのだ、これもひとえに……

誰に感謝すればいいのか？ アウグスティヌスが「告白録」(一の一)でこういっている、「これは哀願者が、自分の目指したのとは別なものを代りに　しかもそのことを知らずに　呼び出してしまったということなのかもしれぬ」芸術にも、魔術におけるのと等しく危険はある。ならば、アウシュヴィッツの礼を悪魔にいわねばならぬのであらば、私が彼に感謝し借りを返すと記録しておいてもらおう。

これを書いている今は午後遅い時刻だ。夕食までは幾らか時間があることでもあり、夕方が見込みの半分も出来事があるようなら物語る上で大変な負担になるかもしれない事柄を明らかにしておくために、予め二、三の点についてあらましを述べておこうと思った。

アウシュヴィッツの最後の科白を書いたあとの最初の目の眩むような数瞬のこと、突然私はもうこんな、どのロールシャッハよりもおぞましい連想を呼ぶ力に富む、裸の壁に耐えられなくなって(なぜならこれは、私が暗鬱な喜劇の連続的なイメージを投射してきたスクリーンではなかったか?) よろよると、千変万化の地下の通路に出たところ、偶然にも、そこの隠れた心臓、少なくともミノタウロスではあるハーストに出くわした。彼もまたありそうもない期待に目も眩まんばかりになっていて、私に四層下の小聖堂、最近『フォースタス』の現場となったところで今夜の厳粛な秘蹟のためのカタコンベとなるはずのそこへついてくるようにと誘った。

「昂奮しているのでは？」と彼は問うたが、むしろそれは事実の言明だった。

「そちらこそどうなんです？」

「軍では昂奮と共存することを学ばねばならない。その上、私のように結果に信を置いていれば……」彼は弱々しく微笑して信頼を表現すると手を振って私をエレベーターへ招いた。

「いや、真の昂奮は、私が何をなしとげたかについてペンタゴンのさるオフィスにいるさる将校連が聞き及ぶまでは始まりはせんよ。名を挙げる必要はあるまい。二十年間、ワシントンのある小さいが強力な派閥が何百万、何十億ドルもの納税者の金を、われわれをアウター・スペースへ送り出すために景気よく使ってきたというのは周知の事実だ。イナー・スペースのすべてがまだ探査されねばならぬというのに」

そして、私が餌にかからないでいると、「きっときみは訝しんでいるんだな、私がこの表現 イナー・スペース で何をいおうとしているのか？」

「それは実に……思考を喚起するものですね……」

「これは私自身の考えでね、先日きみに唯物論と今日の科学に関して説明していたことに関連するものなんだよ。きみも知ってのように、科学は物質的な事実だけを容認する、ところが実際には 自然 には常に二つの側面がある、物質面と精神 画だ。ちょうど、あらゆる人間に二つの側面、 肉体 と 霊魂 があるように。肉体は、暗い、影のような大地の産物で、錬金術においてはこれは漂白、つまり抜き身のきらめく剣のように自くされなくてはならないものなのだ」この剣の柄を手さぐりするかのよう、彼の両手は雄弁に振りまわされていた。

「今、唯物論的科学家にはこの根本的な洞察が欠けていて、そのため彼の全注目は アウター・スペース に向けられている、それにひきかえ錬金術師は常に 肉体 と 霊魂 のチ・ム・ウ・ウの重要性を知っていて、そのため当然 イナー・スペース のほうにより関心があるわけだ。私はこれについて一冊の本を書くこともできるよ……もし私にことばに対するきみの才能がありさえすればね」

「おや、本ねえ！」と私は急いでこの情熱に水をかけようとしていった。「本なんかよりも重要なものはいっぱいありますよ。聖書にもいうように、『多くの書を作らば際限なし』行動の生活のほうがもっと社会に貢献でき 」

「きみにそんなことをいってもら必要はないよ、サケッティ。私は自分の人生をどごごの象牙の塔で浪費したりはしなかった。だがそれでも、私が心に期している書物はありきたりのごみ屑などではない。それは現代の考え深い人々の心をかきみだしている疑問の多くに答えるものだ。私がつけているノートの幾つかをしてみる気があるのなら……？」

おしとどめられそうもない様子なので、観念してしぶしぶながら附合うことにした。「それは面白そうですね」

「たぶんきみなら、どうすれば私がそれを改良できるかを助言できるかもしれん。つまり、平均的な読者にもっとわかりやすいものにするわけだよ」

私は憂鬱な気持で頷いた。

「また、たぶん 」

この最後の親指ねじ絞めの一回転からは、われわれが聖域の入口にドクター・エイミー・バスクと同時に到着したことで救われた。

「ちょっと早いよ」とハーストは彼女にいった。彼のふりまくよき仲間ぶりは、バスクの姿をみるや、蝸牛の角のようにひっこんだ いかなる扁虫にも劣らず灰色で小ざっぱりしたスーツ姿、まじろぎもせず、厳然と鉄踵に騎乗して出陣の構え怠りない。

「降霊術に用いられる備品を点検に参りましたの。お許し願えまして？」

「すでに二名のエレクトロニクスの専門家があらゆる回路を調べているところだ。しか

し彼らにきみのアドバイスが必要だと思うのなら……」彼がこわばった会釈をすると、彼女は先にたって、きちんと敬礼して劇場に入った。

『フォースタス』の第一幕と最終幕のための書割りはとりはずされていなくて、高く聳える書棚と影になった階段は今では新しいドラマの背景として役立っていた。驚か天使の形に彫られた書見台があり、それが支えている分厚い革装の書物はほんものの本で、単に色を塗ったキャンバスではない。ひろげられたページには私がモルデカイの机の上にみとめたようなカバラめいた走り書きがあったが、これが芝居っ気の延長なのか、それとも何か実用的で秘蹟的な意義のあるものなのかはわからなかった。

ここまでは『フォースタス』の伝統的な演出によく合っていた。あとからつけ加えられた要素は、むしろ『モダン・ホラー・ムービー』とか、寄せ集めの、まあ日本版『フランケンシュタイン』にでも似つかわしいものに思えた。巨大なクリスマス・ツリーの飾りのような、色を取揃えた飲用噴水装置や、内省的に大きいほうの端が焦点の合った余剰軍需品かもしれない望遠鏡がフロアボード上にあった。ダイアルやウインカー、テープの回転リールがずらりと並んでいるのはサイバネティック神 宗へのオマージュ。だが舞台監督の最も愉快的なインスピレーションは一對の修正されたヘッドライヤーで、そこから、まるで豊穡の角からのように彩しい電気被覆スパゲッティが芽を出していた。二名のNSAの技師はこれらの申し分ない小さなオレンジ色のプラスチックとクロムの電気椅子のもつれたはらわたを調べており、僧正が、回路を洗聖行為から護るためにそれを見張っている。彼らはバスクに気がつく与会釈した。

「どう？」と彼女は訊いた。「うちのプラッタボックスはどんな具合？ 触れるものを何でも金に変えそう？」

技師の一人がぎごちなく笑った。「われわれにいえる限りでは、ドクター、うなる以外にはこれっぽっちもしやしませんよ」

「どうもわたしには」とバスクは私に話しかけ、ハーストのことは忘れてしまっているふりをして、「魔術のトリックを演じるためにお膳立てするには、チョークでの円と死んだ若鶏以上の大したものはいらないと思えるんだけど。まあ、せいぜいオルゴン・ボックスどまりよ」

「きたならしくなる必要はない」とハーストがむっつりと言った。「それで何ができるかは、時が来ればわかることだ。アイザック・ニュートンも同じように世間からかわれたものだ、占星術を研究したおかげでね。その連中に彼が何といったか知っているかね？ 彼はこういったのだよ、『私はそれを研究し、貴兄はなさらなかった』とね」

「ニュートンは、大小を問わず大半の天才と同様に、奇人でしたわ。狂気は天才には似つかわしいものですわね、けれどもわたくしには意外なことなんですの、あなたのような

お方、世俗の人が、彼の神経症の要素のためにそこまではるばる遠く行かなくてはならないなんて。ことに、古い諺『羹に懲りて膾を吹く』を思いあわせれば」彼女が願っているのは議論ではなく、闘牛の馬上の勢子と同様にただただ傷つけることだった。

「アウアウイのことをいっているのかね？ あの作戦に関して誰もが忘れていたらしいのは、私が勝利を収めたということだ。疾病にもかかわらず、幕僚の反逆にもかかわらず、私は勝ったのだ、私をとりまく虚偽にもかかわらず、また、つけ加えさせてもらおう、私がこれまでに対処しなくてはならなかった最も不利な星の巡りにもかかわらず、私は勝ったのだよ！」

血の匂いへの嬉しさに鼻に織を寄せながら彼女は態勢をととのえと、どこに次の槍を突きたてるかを決めた。「わたくしは不公正でしたわ」と彼女は慎重にいった。「わたくしには確かなことなんですものね、あそこで起ったすべてのことにはあなたよりもベリガンのほうにずっと責任があったってことは、このごろ責任が判断されるところによれば。ごめんあそばせ」

彼女も、私と同様に、これで彼が完全に追い詰められてしまい、バンデリリエロの出番になると思ったに違いない、ところがそうはならなかった。彼は書見台まで歩いていくと、書物の神聖文字から読みとるかのようにこういったのだ、「汝の欲するところをいえ」バスクはささやかな眉をもの問いたげに上げた。

「汝の欲するところをいえ　そこにも一理はある」彼は書見台にこぶしを激しく打ちつけた。それから、比類のない教理口伝の感覚で、ベリガンの本のエピグラフを引用した

「天と地にはな、ホレーショ、そなたの哲学で夢みられるよりももっと多くのものがあるのだ」

この男がすべての戦いに勝利を収めたとしても不思議はない。彼は敗北を認めないのだ！

バスクは唇の手綱を引くとギャロップで去った。彼女が行ってしまうと、ハーストは微笑みながら私のほうへと向いた。「さて、これで確かにわれわれは老獺ジークフリートに目にもみせてやったのではないかな？ 私の忠告を受けいれたまえ、ルイ　女と議論しようなどとは決してするもんじゃない」

伝統的に、こうしたコミカルなエピソードはもっと恐い出来事へのプレリュードとなるものだ。ハムレットがポーロニアスをからかい、道化が謎々を出し、酔いどれの門番が門を叩く音に答えようとよたよたと舞台を横切っていく。

追記

こんなに早く大詰を迎えようとは予想していなかった。芝居はほとんど終りかけている、それなのに私はわれわれが第二幕の中程のどこかにいると思っていたのだ。今では、舞台から肉体を運び出すよりほかになされるべきことは何ひとつ残っていない。

いつもながら、私が席についたのは幕あきのかなり前、といってもハーストに先んじてではなく、彼は私が入っていったときには急に自閉症にかかった通風装置のことで保繕班にがみがみいていた。午後の白い無精ひげは顔から剃りおとし、黒のダブルのスーツに着がえていた。最新の型のものなのにスーツは時代遅れのように見えた。シュトゥットガルトを六十年代初めに訪れた際に、私はいかに多くのビジネスマンが青春期のスタイルの服装をしているかに気づいた。彼らにとって　そしてハーストにとって　それは常に一九四三年というごとになるのだろう。

儀式で積極的な役を演じない数少ない囚人が次に到着し、何人かはフォーマルな装い、あとの者たちはエレクトリックではあるが劣らず地味ないでたちだった。彼らは en bloc ではなく小さな会堂に散らばって席に着き、こうして腰をおちつけてみると、劇場はそれまでと殆ど変わりなく閑散としているように思えた。

バスクもまた、まるで喪に服しているかのような身なりを選んでいて。私のうしろの席につくと、すぐにキャメルチェーンズモーキングを始めた。しばらくすると通気装置の故障に支援されてわれわれ二人の周囲に小さな煙の繭を織り上げてしまっていた。

モルデカイと僧正、ちょっとした群勢をなすうるさ方、守門、etc. (アマート・オペラでの『トスカ』の序幕のような感じ) が最後に到着、というよりはむしろ物腰柔かくも仰々しく登場。僧正はマチスばりの表象め巨た祭服で麗々しくめかしこんで、しかし彼さえもひとつ葬儀の特色を保っていた。司教冠が真黒なのだ。モルデカイは舞踏会用の衣裳を選ぶ上で些かぞっとするような経済性を発揮していた。ジョージ・ワグナーがファウストとして着たのと同じ、黄金のレースの襟のついた黒のベルベットのスーツなのである。

ドライクリーニングが必要なのはあまりにも明らかだったが、たとえ真新しくてもモルデカイにはそぐわなかったはずで、これではほとんどべったり黒一色に見えてしまっていた。さらにまずいことに、その裁断は、彼の胸幅の狭さやねこ背、がにまたの脚、休んでいるときの品のなさにも匹敵する歩く際のぶかっこうさを強調していた。彼はベラスケスの哀しい侏儒の一人に、その拡大版とでもいったように似ていて、豪勢な衣裳はグロテスクな体格を際立たせることにしかかかっていない。これは疑いなく、狙った効果だった。ブライドというものはその醜さを、まったくそれが美点であるかのようにみせびらかすものだ。

ハーストがこのモンキー・ハムレットにかけよって、細心にはあるが手を掴んだ。「これは歴史的な行事だよ、ねえきみ」彼の声は奥底でおぼえている自惚れによって嗅れていた。

モルデカイは手をのけながらうなずいた。眼が、彼にとってすら異例な、凄じいまでの精神集中に輝いていた。私は「Pの肖像」でのファン・デル・ゲースの「悲痛な眼」を思い起した。「光に渴いて、彼の凝視は太陽へと回帰し続けるのであった」

憎正が、然るべく威儀を正し、燦爛たる大外衣をささえ持つ二人の補助雇員を従えて、ハーストに四歩さきんじて舞台に向った。モルデカイは通路に長居して客席の顔を眺め渡した。私と眼が合ったとき、不意にきらりと、面自がっているようなものが窺えた。彼は最、前列に沿って私の席まで来ると上体を屈めて囁いた

「いま我に欲し

決行すべき気魄、心うばうべきわざ

そしてわが行く末は絶望

われ祈りによりて救われなくば」

起きあがりながら腕をしみのついたベルベットの上できどって組んだ。「誰がこれをいったか知ってるかい？ わかってるさ、知らんのは だが知らずにはいられんぜ」

「誰なんだい？」

彼は階段まで行き、一段目を上ってふりかえった。「ずっと昔にこう言ったのと同じやつさ

我はわが杖を折り

地中幾ファゾムにか埋めん 」

私は彼を遮って、魔術へのプロスペロの訣別の辞を締めくくった

「そしておよそ測鉛の及びしよりもなお深くわが書を沈めん」

「だがそうじゃないぜ、わかってるだろうが」とモルデカイはウインクしながらつけ加えて、「今すぐにはな」

書見台のところモルデカイが舞台上につてくるのを待っているハーストが、ひと掴みのぱりぱりした紙をわれわれに向けてもどかしげにがさごそさせた。「何をきみたち二人はべちゃくちゃやっているんだ？ われわれは今、おしゃべりなどしているような場合じゃない 心の準備をして、大いなる霊的な体験のために空しくしているべきなのだ。きみは、われわれが瀬戸際に立っているということを認識しておらんようだな」

「ところがしてるんだな、してるんだとも！」モルデカイはあぶなっかしいひと跨ぎで三段あがり、威勢のいい肢あるきで舞台を横切っていくと、メデューサじみたドライヤーのひとつの下の席に着いた。すぐさまサンドマンが彼のひたいに電線を絆創膏で貼りつけはじめた。

「おれは低能だ」と彼はいった。「開始しろ」

ハーストが大喜びで笑った。「いや、まあそんなことを仄めかすつもりなどはなかったんだが。しかし、そうはいつでも……」乏しい観客のほうに向きなおった。「あい始めます前に、紳士淑女の皆様、ひとつふたつ申し述べたいことがございます、これより明らかになります偉大なる事業に関しまして」そして手にしたタイプ原稿から読みはじめた。

バスクが前に身をのりだして芝居めかして囁いた。「きっとあの恐老じいさん、半時間は続けるわよ。験するのが怖いわけ。自分のばかげた瀬戸際を恐れているのよ」

彼はこの見積りを十五分ばかり超過した。私はこの記録の詳細さを自慢するものではあるけれども、ここでは演説の最も簡潔な要約を示すにとどめよう。ハーストはまず、人類に益する者たることが与えてくれる充足について語り、これまでの恩人たちの生涯と功績のあらましを解説したキリスト、アレキサンダー大王、ヘンリー・フォード、そして偉大なる現代の占星術師カール・ユング(これをジュと、軟音で発音した)。老化の悲哀と恐怖とを切々と語り、そして近視眼的な強制的な引退プログラムと死とによって最も経験ゆたかか有用な成員がたえず切りとられていくことで、いかに多大な損害を社会組織が蒙っているかを例示した。彼は、それによって魂が永遠に若々しいままでいることのできる原理を披露した(「心を開いて、フレッシュなアプローチを受け入れる」)が、肉体がそれによって不老を保てるような、これと相補うような原理をみつけだせないのが自分の積年の絶望のもとであったことを告白した。ところが、ここ僅か数か月間に、自分は若き同僚たちの支援を得て(とモルデカイのほうへごく短く会釈して)何世紀も前には遍くとはいかないまでも少数ながら信じて託しうべき特権ある階層に、ついそれによって益をなすことのできるだけの責任ある社会のメンバー全員に知られていた、ある秘密を再発見したのであります。永遠の生の秘密を。

彼が語りおえる頃には私は周囲の濃い煙と昂まる熱気どで多少めまいがするようになっていた。舞台の上はライトのもとでなおのこと熱かったに違いなく、ハーストも僧正も汗ですっかり光輝いていた。

ハーストが今度はドライヤーの下で貼りつけられ装備を整えられている間に占僧正が舞台に進み出て、この催しのために特別に調製した短い祈祷に唱和してもらえないかとわれわれに求めた。

バスクが立ちあがった。「真夜中まででもお祈りなさい、それはあなたの作品ですもの。

でも、時間はたっぷりあるようですし、こういったさまざまな意匠の目的をきかせていただけないかしら？ 古典時代の錬金術師たちはみんな、きっともっと慎しい用具でやりくりしていたはずでしょう。わたくしがきょうの午後、同じ質問を二人の技師にしたところ、彼らはわたくしの、或は彼ら自身の蒙を啓くことができなかつたので、それであなたならと望みをかけていたんだけど……？」

「あなたのおたずねの件は容易ならざることです」と僧正は気どった滑稽な莊重さで答えた。「あなたは人類が把握するのに数知れぬ幾世紀をも要した事柄を瞬時にして理解することを求めておられる。エレクトロニクスのアナクロニズムですか、あなたを当惑させているのは？ しかし科学の方便すべてを利用しないというのは、これぞまさしく近視眼というものですぞ！ われわれが古えびとの知恵を敬うというのはわれら自らの時代の技術の至芸を蔑むの謂ではないのですからな」

「ええ、ええ、ええでもそれは何をするんですの？」

「本質的には……」彼はひたいに激を寄せた。「本質的には、それは拡大するのです。またある意味では、促進するといってもいいでしょうが。その伝統的なかたち、パラケルススに知られている様態では、エリキサは効きめののろいものです。ひとたび血流の中に吸収されると、それは三つの脳髄膜を貫通しはじめる 硬膜と蜘蛛膜、柔膜です。これらがエリキサによって完全に變形させられた時はじめて この期間は年齢や不健康に正比例して増大するわけですが そのときはじめて肉体の若返りのプロセスが開始する。だが明らかにわれわれには哲人的な忍耐強さを示すような余裕などなかった。エリキサの作用を急がせる必要があったわけで、それがここにご覧いただいている設備の目的なのですよ」

「どうやってそれはその目的を達成しますの？」

「はてさて、そのご質問はわれわれをさらに深い淵へと入りこませるものですな。まず、アルファ・ピックアップが つまり、いまハースト氏のために準備されている最中の装置ですが 脳波のパターンを記録し分析します。この記録が次に処理され 」

「やくたいもないおしゃべりは、もう沢山だ！」とハーストが叫んで、彼の汗ばむひたいに電線の宝冠をとりつけているサンドマンをわきに押しつけた。「彼女はもう、払戻しを受ける以上のことを聞いている。いやはやまったく、きみたちには 安全保障 の認識というものがまるでない！ 今度彼女が大口を叩いたなら、衛守たちに会堂から排除させなくてはならん。わかったかね？ さあ、仕事に戻ろう」

再びサンドマンがハーストに電線をテープで貼りつけはじめ、じっとしていない客のひげを剃る床屋のような、神経質な、ぴりぴりするような几帳面さで作業した。モルデカイは、眼がドライヤーの下に隠れていて、爪で歯をほじくっていた。退屈？ 強がり？ 緊

張？ 眼をちらりとも見ることのできない私には解釈がつかねた。

僧正は多少ビブラートを加えて、十四世紀の錬金術師ニコラス・フラメル の祈禱から翻案した(と本人の指摘する) 祈りを開始した

「全能なる神よ、光波の父、鼓動うつ心臓より血の流るる如くすべてのさらなる祝福の湧き出づる源なるお方よ、われらおんみの限りなき慈悲を乞い奉る。認め給えかし、なべてのものを創り完成させし、それらのものを成就に或はまた消滅に導く、おんみの玉座を囲むかの永遠なる叡智に、われらの与からんことを。おんみの叡智は天なると秘められたる・とのわざおぎを統べるものなり。認め給え、父よ、かの叡智がわれらの業に輝きを注がんことを、われら過誤なくかの高貴なるわざを進めんことを、それがためわれらおのが靈魂を捧げ、かの奇蹟の石を求め 」

ここで舞台の脇に脆いていた待者の一人が銀の鈴を鳴らした。

「かの賢者の石を 」

二つの鈴、コーラスで。

「かの貴重このうえなき石、そをおんみはおんみの叡智の中に地上界より匿し給いたれど、おんみの選ばれたる者に顕わすことはなからざらん」

三つ そしてこれが厳かに鳴りわたる中、扉がさっと開いて、これまでもまして大きな調理なべのように見える賢者の卵が、小さな電動トロッコに載せられて部屋に入ってきた。四人の補助傭員がそれを舞台に持ち上げた。

バスクが前に身をのりだして小さな嘲笑を敢行した。「儀式ってものは！ わたしはいまに真正正銘の強迫神経症にかかってよ」しかしこの発言と彼女の態度にはおおげさすぎるどころがあって、僧正のごったまぜ的なところが彼女にまで ことによると、それどころか彼女には殊のほか、影響を及ぼしているらしい様子が窺えた。

強烈なキャメルで目がくらみ、おまけに腹の虫までさわぎだして、気がついてみると私の注意は祈禱からそれてしまって、ほぼ私の真上で行なわれている卵の開封という荒々しい作業に向けられていた。これが完了してはじめて僧正のねばっこい呪文は、ちょうど時おりスーパーマーケットやエレベーターの中でミュージックで演奏されている曲に気がつくのと同じような具合に、ラテン語ばりのむにゃむにゃとうなるような幽冥界から脱け出して並のこけおどしの領域に入った。

「……そして恰もおんみのもうけられたる唯一人の御子が神にしてまた同時に人である如く、恰も罪なくして生まれ死の支配に服さぬそのお方が、われらをして罪を免かれしめ彼の面前にとこしえに生かしめんがために死を選ばれたるが如く、恰も彼が三日目に輝かしく蘇えられし如く、その如くに賢者の黄金カーモットもまた罪なく、常に渝らず光輝き、すべての試練に耐えるを得ながら、患いて無欠ならざる兄弟のために死することをも

辞さざるなり。誉むべくも再生せられたるカーモットはそれらのものを解き放ち、それらに永遠の生命を吹き込み、純粹黄金状態の同質なる無欠性を授け与う、さればわれら今、かの同じき Kristus・イエスの名に於ておんみに請い求むらくは、この天使の糧、この天国の奇蹟の礎石、永劫に其処に据えられてあるをして、おんみと共に統べ治めせしめ給え、王国は、また権勢は、また栄光は未来久遠におんみのものなれば」

バスクまでが答唱に唱和したげ「アーメン」

僧正は笏杖を待者に手渡ししながら傾瀉された卵に近寄ると、その中で四十の昼と夜のあいだ焼かれてきた土器の瓶をとりだした。合図で照明は落され、ただひとつのスポットライトだけが、この日の午後みかけた望遠鏡じみたもので焦点を合されていた。(この光は、と私はあとで知らされたのだが、恒星シリウスから 明示されないプロセスを経て誘導されたものだという) 僧正はえたいの知れぬその中味を聖杯に注ぎ、ふちまで満たすと、純粹なシリウスの光のビームの中へと奉挙した。今、参集した囚人たちは舞台の上でもまた外でも、揃って大胆きわまりない瓢窃をやったのけた。アキノナスの聖体拝領賛歌、*O esca viatorum* を歌いはじめたのだ。

”*O esca viatorum,*

O panis angelorum,

O manna cáelitum...”

盗作の儀式のクライマックスで僧正は向きなおると聖杯をまずハーストの、次いでモルデカイの唇に捧げた、二人とも電氣的な装具で包みこまれてしまっていて、そこから飲むために聖杯を傾げることも殆どできかねるような状態だった。それぞれが飲む際に、僧正はアキノナスの歯切れのいいラテン語からの自前のおぞましい翻訳を朗唱した

「おお旅人たちの糧よ！ 天使たちのパンよ！ 天のすべての糧なるマナよ！ 近寄りて汝が美味もて常に汝に餓うる心を満たせ」

最後のスポットライトが薄らいで消え、われわれはそんな煮えきらない無感動な空気の中で、全員が、最も多血質で自己欺瞞的な楽道家さえもが恐れているものを待ちうけた。

静寂を破ったのは、奇妙に変化してはいたものの、ハーストの声だった。「すこし光をくれ！ 照明だ！ これはうまくいくぞ、私にはそれが感じられる 私には変化が感じられるんだ！」

すべてのスポットライトが点き、網膜のおだやかな桿状体を眩ませた。ハーストはセンター・ステージに立ち、電線の王冠を頭皮から引剥してしまっていた。顛額から血が滴り、つたい落ちていく汗ばんだ日焼けした顔はスポットライトのもとでバターを塗ったトーストのように光っていた。全身を震わせながら彼は両腕を振りひろげ、葦笛のような

声で歓喜した 「見やがれ、野郎ども！ 私を見るがいい 私は若返ったのだ。全身が生きいきしているぞ！ 見ろ！」

だがわれわれの眼はハーストには向けられていなかった。それまでずっと身じろぎもせずにおいたモルデカイが今、苦痛に満ちた緩慢さで右手を眼の前に上げたのだ。彼は、すべての希望を悼むような、悲惨さを断末魔の激烈さにまで昇格させるような音を発し、そして強直した体躯がもはやこの奔りを支えきれなくなると、声をあげて叫んだ 「黒い！

真っ黒だ！ なにもかもみんな真黒だ！」

それは推移なく終わった。肉体は椅子の中でがくっと落ちこんだ。ただ、もつれた電線のせいで、床に倒れるのは妨げられた。診療所の医師が一人、廊下に待機していた。彼の診断はモルデカイの死とほとんど同じくらい素気ないものだった。

「だがどうして？」とハーストが彼にどなった。「どうして彼が死んだりなどできるんだ？」

「栓塞、と申し上げておきましょうか。意外なことではありませんよ。この段階ではどんなに些細な興奮でも事足りたかもしれませんな」医師は、今では床に、死後も生前と変わりなく不作法に横たわっているモルデカイのほうへ向ぎなおると、大きく見ひらいている彼の眼を閉じさせてやった。

ハーストがひきつった微笑を滝べた。「まさか！ また嘘をついているんだな。彼は死んじやいない、そんなことはない、そんなはずはない。彼もエリキサを飲んだのだ。彼は復活したんだ、再生したんだ、漂白されたのだ！ 生命は永遠なのだ！」

バスクが痛罵するように笑いながら立ちあがった。「若さ！」と彼女は嘲った。「そして永遠の生、でしたかしら？ それはこんなふうには作用しますの、あなたの回春の霊薬とやらは？」そして魔法のお護りを前に立てて、傾聴して追隨する者があることに自信を持って大股に劇場から出ていった。

ハーストは医師を遺体から押しのけると静止した心臓の上に手をのせた。彼の呻きは、彼の足元の肉体を打砕いたその兄弟だった。

彼は眼を閉じて立ちあがると、最初は殆ど夢遊病者のように、そして次第にかん高さをつのらせながら話した。「こいつを持っていけ。この部屋から運び去れ。火葬しろ！ 即刻、炉まで運んで行って焼却しろ。灰だけしかなくなるまで燃してしまえ。ああ、黒い裏切者め！ 私はもう死ぬ、そして責められるのは奴なのだ。私はちっとも若返ってなどいない あれはトリックだったのだ。ずっとトリックだったのだ。くたばれ！ くたばれ黒んぼ奴！ くたばれ、くたばれ、くたばってしまえ永遠に！」そして「くたばれ」の度にハーストは屍体の頭や胸を蹴った。

「おしずまりなさい！ ご自分の健康のことを考えて！」

ハーストは医師の制止するような一触れに、恐れをなしたかのように身をひいた。よろよろと後ずさりし、支えを求めて演台に手をついた。静かに、だが規則正しく、ハーストは書物から頁を破りとって床に投げつけた。「嘘だ」と厚い紙をくしゃくしゃにまるめながらいった。「またまた嘘だ。背信だ。欺瞞だ。嘘だ」

囚人たちは不思議なことにモルデカイの死体を無視している様子で、死体はいま着いたばかりの衛守たちの手で、賢者の卵を運び込んできたトロツコの上に抛り上げられていた。卵は、結局のところ、ごくありふれたオランダ式のオーヴンにほかならないことが判明していた。私は彼の顔から血を拭いてやろうとポケットからハンカチをとりだしたが、あっさりとして衛守たちに両腕をとられてしまった。私が外へ連れ出されていく時、ハーストはまだ、沈められた、沈められた書を引裂いていた。

六月二十二日

夜半に目覚め、ねむけまなこの速記で私をめざめさせた悪夢を記録して、思案の末の無感覚を恋いもとめて寝床に倒れこみ、そこに虚ろに個れて横たわって悲情な闇に見入った。そうしたメモから推敲したこれは私の夢である。

最初に、腐りかけの果物のもののような、飽満するような甘い匂いがあった。私はそれが部屋の中央にある大きな穴から発していることに気づいた。とても太った男がこの穴の底に、角礫岩の山に囲まれて立っていた。剃髪している、修道僧だ。彼の頭巾と衣は白。ドミニコ会士だ。

彼は腰に巻いている紐をはずしてその一端を私に投げた。彼をひっぱり出すことはほとんど不可能なわざだった。しかし遂に私たち二人は喘ぎながら穴の縁に坐った。

「平素なら、無論」と彼はいった、「浮揚できるのだがね。屢々、一腕尺の高さにまで」大層ふとっている割には奇妙に実体性が希薄なようだった。ガス状、といえそうなくらい、丸々とした手は、膨れ上って破裂しそうな手袋のよう。私は自分自身にいった。ルイス、気をつけないともうじきおまえもこんなふうになるぞ

「そしてこれのみが奇蹟ではない。他にもあまた言及しうる。Quantam sufficit にな、アウグスティヌスが所見の如くに。坐れるような場所はないかね？」

「うちの椅子は、どうも……いささか簡素すぎるようですので。ベッドではいかがでしょう？」

「それと何か食べるものを。パンを少々、鯨を些か」彼はこぶしの風船でスプリングを突ついた。「僕はメッセージを伝えに参った。従って、長くはとどまらぬ」

私は扉のわきのボタンを押した。「私にメッセージを？」

「神よりのメッセージであるぞよ」彼はくしゃくしゃのシーツの上に身を沈めた。頭巾

が、口のあるはずの顔の下半分まで殆ど影で蔽っていた。

「さてそれはいかがなものでしょうか」と私は能うかぎり丁寧にいった。

「神を疑う？ 在し給うことを疑闘視する？ なんたるたわごと！ 無論そこもとは神の存在を信ずる！ 万人が信じておる。この身みずからが三通りの相異なる方式で彼の存在を証明したのだ。先づ、若し彼が存在し給わずば、万事は全く異なるであろう。上が下となり、右が左となるはずである。ところがさにあらざることには我等が知るころなり。エルゴ、神は存在せざるを得ず。第二に、神が在し給わずば我等いずれも今ここに、食すべきものを待ちてあるはずもなからう。第三に、我等はただ時計を見さえすれば彼の存在を知ることができる。いま何時かね？」

「三時ちょっと過ぎです」

「おやまあ、おやまあ。なんとも遅いものだな。きみは謎々は得意かね？ 何故ヒュベルノ・ドゥリアは脳柔膜に祈ったか？」

「なにゆえに大鴉は書きもの机に似ているか？」と私はこの客に迷惑しはじめながらぼそぼそと言った。彼はそれを聞かなかったのだと思う。聞こえたのだとしたら、あてこすりを捉えそこなったのだらう。

「わからない！ ではもうひとつ。わたしの師匠がいました、『そなたは彼を愚図な牛と呼ぶ。だが言っておこう、いずれこののろまな牛は高らかに咆え、その咆曜が世に満つるであろう』わたしは誰でしょう？」

「トマス・アキナス？」

「聖トマス・アキナスだよ。すぐさまわかっていて然るべきだね。きみは鈍いかね？」

「大部分の者と較べれば、違いますね」

「大部分の者と較べれば　しかし儂と較べたならどうかね？ はは！　そして神は儂よりもなおいっそう鋭くあらせられるのだよ。彼は存在の連鎖の頂点にある、彼は第一にして非物質的な存在であって、知性は非物質性の帰結であるからして、夜が昼に従う如く理の当然として、彼は第一の知的存在ということになるわけだ。ディオニシウスを読んだことがあるかね？」

「残念ながら」

「読むべきだね、読むべきだよ。彼なのだよ、天界の存在の各階梯は至高の精神によって神の学を教えられる、と書いたのは。たとえば、儂がそなたに教えるようにな。修道院長シュジェルはことにディオニシウスに熱中していた。いま儂は何というたか？」

「え？」

「いま儂がいうたことを復唱せよ。できぬ。そなたが簡単なことにも耳を傾けんで、どうして儂がそなたにメッセージを授けられようぞ？」

ドアにノックの音がした。コーヒー・カートだったが、艶消しのクロムから燦然たる黄金に変容しており、宝石がびっしりと銀められていた。幼稚園児ほどしかない三人の小さな天使がそれを扉の彼方からもたらしへ二人が前からひっぱり、一人がうしろから押していた。私は、なぜ彼らは飛ばないのだろう、ことによると彼らの小さな翼は空気力学的に不安定なのだろうか、ポピュラー・サイエンス雑誌で読んだことを思い出して思案した。

ケルビムの一人がカートの底から小さな腐りかけの魚の盛り皿をはずした、それを立派なスポード製の鉢にあしらうと聖者のもとへ持っていき、聖者は両手をおわん状にして至福のしぐさでそれを受けとった。ケルプが私のわきを通る際に翼の端が顔を擦った、それは羽毛ではなくきめ細かな白い柔毛でできていた。

「奇蹟なり！ あらゆる食事はささやかなる奇蹟なり、それは存じておろう。鯨とあればなおのこと。儂は奇蹟の錬くらいて死せり」彼は膨んだ指で魚を三尾とると頭巾の影に押し込んだ。「行商人が鰯を運んで修道院の傍を通りかかってな。儂は鰯は好物だが、鯨は ああ、鯨となれば話は別だ　そして何が起こったと思うかね？　彼は最後の桶を覗きこんだ」　またひどく腐った魚が押し込まれ、逸話はわずかに中断される

「するとそれは鯨でいっぱいだったのだ！　奇蹟だよ、奇蹟なるものがあるとすれば、ただ、生憎とそれはいたんであって、儂はおよそ想像しうる限り最も激烈な腹痛の末に三日後に死んだのだ。奇想天外ではないかね？　儂の生涯の物語は一冊の本になるであろう。そこもとは事の幾つかは信ずるまい。なれど、まずあるまいな」　彼は咳ばらいすると空の鉢を天使に返した　「官能的な方面の事柄は。二十の歳よりこのかた肉の衝動はおぼえぬことゆえ。一度たりともな。お蔭でわが学究は計りしれぬほど容易になった」

別なケルプが黄金の皿にパイ類を盛って近づいてきて、そこからアキナスはチョコレート・エクレアを選んだ。ここでようやく私は、智天使のちっぽけな陰糞を膨れあがらせ、哀れにも奇妙な大股びらきの歩き方をさせる原因になっている、痛々しい炎症に気がついた。客は私の視線をとらえた。

「orchitis だよ、知っているだろう」といいながら彼はがぶりとエクレアに食らいついたので、もう一方の端からホイップクリームが奔り出た。「睾丸の炎症だ。ギリシャ語の *Orchis* つまり睾丸から来ていて、そこからはまた、塊茎の形状が似ているために orchid 蘭という語も由来している。すべては同じところに帰着する、セックス、S-E-X にな。これは見事なパイだな」エクレアはたいらげられて、彼は盛り皿からチーズケーキをとった。

「もとより読んでおろうな、いかにしてわが兄レイナルドが母の命によりて儂を誘拐させ、わが召命を成就することなからしめんとしてロッカセッカの塔に連れ行きてそこに幽囚たらしめたかについては、レイナルドは誘惑者の任を果さんと決意してわが房に若き婦人を送りこんできた。注目すべき魅力ある金髪の娘だったよ、というのも儂は炎上げる燃

え木もて彼女を逐い払いながらも、そのことに注目することを禁じ得なかったのだ。僕は彼女の再来を妨げんがため、十字のしるしを扉の木材に焼きつけた、そしてその時のことなのだ、神のお慈悲がすでに語ったあの幸いなる免除を下されたのは。これは常々ものがたられてきた話だが、これにはあまり一般には知られていない続きがある。レイナルドはひとかたならぬ方策をめぐらせて僕の志操堅固さを切崩そうと努めた。当時わしは容姿不快ならずとみられておった。僕はほっそりしておった、なれとても、サケッティ、かつてはほそやかであったように、まこと骸骨の如くにして、僕の身のこなしは豹の優雅さであった。とこみがあの窮屈な牢獄では身を動かすこともかなわなんだ、僕は読んだ 聖書を、また文章の大家を そして書いた 一、二のとるにたらぬもの、小品を そして祈った。だが、また、避けがたくも、食らいもした。飢えは色欲にも劣らず強力な肉の衝動にして、なおいっそう我等の獣性の基本をなすものである。僕は日に四たび、時には五たび、食事をした。風味ある肉、美味なるソース、これをはるかに凌ぐまこと絶妙な小ケーキが、専ら僕の食事を作ることにのみ従事する厨房で拵えられた。一度、二度、僕は食を拒み、窓から投げ棄てたり床に踏みにじったりもしたが、そうするとレイナルドは僕を餓えさせた。あらゆる食物を僕から三日、四日、五日と遠ざけておいて、金曜日、すなわち精進日に至ると、ああ、この上もなく身もうちふるえんばかりの食べ物があり余るほどに供される。僕偉抵抗できなかつた、できはしなかつたのだ、あの時は、あるいは

そののちも。ロッカセッカから脱出したのち、僕は曆におけるすべての精進日に自分が貪婪な、責め苛む空腹に再訪されることに気づいた。そのひもじさを宥めてしまうまでは、祈ることもできず、読むこともできず、考えることもできないのだ。かくして恰も年経るうちには非物質的な知性がなにやら神々しい、湿っぽいカボチャのように膨らんでいったのと同様に、僕の物質的で肉体的な側面、僕のからだも暴飲によって脹れあがりふくれ上って行って……こうなったのだ！」彼は頭巾をはねあげて、かつては顔だったに違いないものを明示した。大食にすっかり圧倒されて、造作はすべて消え去り、ただ重くたるんだ頬と顎の肉垂があるばかりで、それが口にあたるしみだらけの穴をとりかこんでいる。顔よりもむしる、このパテ状の肉は巨大な腎に似ていて、眼はほんのえくぼにすぎなかつた。

「そして今、僕はそこもともまた多少ケーキを好むのではないかと思う。いや、そこもとがああのパイ皿に向けた貧るような眼差しを見たのだよ。モブシイ、時は真近いぞ サケッティさんにメッセージをお渡ししろ」

二人の仲間が私の両腕をとらえて両膝をつかせると、三人目の兎に似た頭をしたケルブが、ちっぼけなピンクの鼻を喜びの期待にひくつかせ、毛皮の翼を欠陥心臓の鼓動のように痙攣的にはためかしながら、私に近寄ってきた。丸ぼちゃの指をそいつは陰囊の花のよ

うな化膿している傷口に伸ばすと、そこから判読しがたい手書き文字で蔽われた薄っぺらな白い聖餅を引き出した。

「どうも……私には……理解できないんですが」

「無論それを食べなくてはならないのだよ」とトマス・アキナスは説明した。「そうすれば汝の理解は神のものの如くなるであろう」

ケルブはパンを（それは先程、窖からたち昇っていたのと同じ匂いがした）私の口に押し込んだ。私を解放すると、天使たちは急に歌いだした

”O esca viatorum,
O panis angelorum,
O manna cáelitem...”

Esurientes ciba
Dulcédine non priva,
Corda quaerentium.”

むかつくような甘さが口の中いっぱいに広がるにつれて、メッセージが、奇蹟の油を燃やすランプのように、私をその支持し難い真相で眩惑した。

「どうして今までわからなかったのか！」

私はわれわれの名がへいかなる書物に於るのにも劣らず明瞭に、紺と黄金の壮大な文字で示されているのを見ることができた。ジョージ・ワグナーの名が最初。次いでモルデカイの名、そして残りすべての囚人の名が単調に並んでいる、そして頁の末尾に、私自身の名が。

だが苦渋はそのことにはなく、それを私が知っていたのが確実だという点にあった。キャンプ・アルキメデスに来た、殆どその時からわかっていたことなのだった。

アキナスは床を転げまわって笑い、肢なし塩漬けあばら肉状の胃から巨大なつののあるカボチャ頭へと血を送り込んでいた。彼の咆哮は部屋を満たし、天使たちの穏かな祝歌を消し去り、そして私はめざめたのだった。

追記

ハーストが逼迫の末、もはやどうあろうと隠しようのないこと、ただただ私自身の絶望的な、故意の盲目によってのみこんなにも長く私から遠ざけられていたことを追認。それを知っている今、自分がそれを知っていると知っている今、私は真実ほっとしたものをおぼえる。裁判が何週間も長びいていた殺人犯がようやく評決を、まったく疑うべくもな

かった評決 「有罪」 を、そして同じ、く 確実な宣告、「死刑」を聞くのにも似て。あれは夢ではなかった、そしてメッセージは本物だったのだ、私は五月十六日以来、パリジンに感染していたのだ、ここにいる誰もが、私以外は、知っていたのであり、そして私は囁きに、それが世界に満ちる轟きとなるまで耳を傾けようとはしなかったけれども、私もまた知っていたのだった。

第 2 章

二冊目

〔これ以降の、星印で仕切られた手記は、ルイス・サケッティの日誌上に見られるままに再現してある。配列は書かれた順であるが、それ以外に我々が日付を推定するすべは内的証拠しかない。従って、スキリマンに関する最初の言及(十二番目のメモに於る)は、この項、及びこれに続く項目が八月九日以前に書かれたはずはないであろうことを暗示していよう。その様式によって我々はまた、三つのまとまりのあるメモ(「いよいよ、われわれの歩くのは彼の庭園だ」以降)、日誌の本セクションの大半を占める部分が書かれたのはこの時期の終り頃、サケッティが通常の(そしてまた、諒解可能な、とも言えようか?)基準に則って創作を再開する直前である、と推定して差支えあるまい。これによって我々は九月二十八日を、この「たわごと」(と著者自身がのちに称している)の最終日付として受けとることになる。以下の記載の中にはサケッティのオリジナルではないものが多々あるが、彼自身が出典を示していない場合 通常、彼はその労を厭うている 我々は敢えて注を加えなかった。それはあまりにも大きな仕事になるであろうし、専門家以外のいずれにとっても益するところ小さいことを恐れたためである。出典のうちには、次のものが挙げられよう 聖書、アキナス、カバラ、種々の錬金術書、含む「薔薇物語」第二部、リヒアルト(及びジョージ)・ワグナー、バニヤン、ミルトン、ド・ロートレアモン、リルケ、ランボー、そして近代英語詩人多数。 編者〕

* * * * *

「内省過剰。事實的性不充分。實在の事物の迫真的描写に専念せよ」おっしゃるとおりだ、わかっています。わが弁明はただひとつ 地獄は濛々。

* * * * *

鯨の腹 それともストーブの？

* * * * *

「彼は悲しみ嘆く声や右に左に駆けめぐる音を聞き、そのため時には、自分が千々に引裂かれたり、街路のぬかるみのように踏みにじられたりするかと思った」そしてもう少し先で 「彼が燃える窖の口まで来たちょうどその時、邪悪な者の一人が背後にまわり、そっと歩み寄って、囁くようにして数々の歎わしい流神の言を仄かせると、これをまことに彼は自分自身の心より発したものと思った……彼には、耳をふさぐだけの、またそうした流神の言が何処より来たるかを知るだけの慮りもなかったのである」

バニヤン

* * * * *

われわれは芸術が時を腰うかのように装っている。実際には、ただ過すだけのこと。

* * * * *

「何であれおよそ御心に添うたことならすべて主はなされた」禍々しき真理。

* * * * *

「彼の生涯はやがて、彼が画筆をその中ですすぐような、グラスの中の水のような観を呈しはじめた。数個の色、混じり合って、すなわち泥の色であった」

『Pの肖像』

* * * * *

その傍なる天使、チェロを奏でる天使をこうも易々と信ずるのは、木の桶のせい。

* * * * *

モルデカイが『肖像』についていったこと 「退屈だよ、けどこの場合は退屈さそのものが関心の一部なのさ。おれはわざわざだれてるんじゃない、むしろだれた件りが落着くところへおちつくままにさせとくわけだな」

又、別な時 「芸術は退屈に仕える他はない。ある奴の静物画は別な奴のナチュラル・モールだ」

* * * * *

私の鉄踵の下できしむ小石は焼け焦げた子供たちの骨。

* * * * *

稼ぐな、費うな

悩むな、友よ

時には限りというものがある

急げや！ 急げ！

* * * * *

この地獄では選べるものは酷寒かさもなくば酷暑。「この二つの状態の間を彼らは喚きつつ右往左往逃げまどう、一方にあっては常に他方が天上の憩いに思えるために」

* * * * *

ハーストについてスキリマンいわく 「生来たいそう乱れているのでアルファベットの文字を順に並べるのが難しいような精神」

* * * * *

そうか アルファベットまで崩れかけているわけか。泣きわめく駄々っ子が色つき積木のお城を打ち殿そうとしているみたいに。

スキリマンの童顔。

* * * * *

カボチャと花葵の寓話

その春、彼の花葵の真中にインテリかぼちゃが育ちました。花葵は美しいものでしたが、彼はカボチャのほうが重宝だと知っていました。実は十月になるまで熟さず、その頃にはもう花葵は食いつぶされてしまっていました。

* * * * *

「一晩で七篇のいい詩を書いた奴を知ってたよ」

「一夜で七篇！ 信じ難いね」

* * * * *

科学がなければわれわれはこのような織える石碑の列を持つこともなかったであろう。それ(科学)は開いた唇を蔽うヴェールである、それは語られざることばである。呪われたものさえもこの祭壇に於ては敬虔である。

* * * * *

アムフォータスの哀歌は私自身のものとなった

Nie zu hoffen
das je ich könnte gesunden.

* * * * *

時の矢に傷つけられたセバスチャンといったところ。

* * * * *

ミードいわく 「でも他の点じゃスキリマンはそんなに悪い奴じゃないよ。たとえばあいつの眼、なかなか素敵だ あんたが眼が好きならね」このジョークは私を記憶の限界まで ハイスクールまで引戻す。可哀相なバリー 彼は文字どおり崩れ落ちつつあるのだ。まるで肉体が検屍を待ちこがれるかのように。

そしてそのあと彼はいった 「おれの五感がとりとめのないものになっていくよ」

* * * * *

きょう、スキリマンが腹立ちまぎれにこんな一句をひねりだした、題して

地球

もっと完璧だらうにな、滑らかな球なら
いたるところに神様の立派な大海があつて

* * * * *

「不思議な性質の、肩の高い、嗜のまがった鳥たちが、汚物の上に立ち、じっと一方向を見ていた」

マン

* * * * *

「これはデモクラシーではない。これは洒落だ」

ビト・バティスタ

* * * * *

地獄の門の新たな銘 《ここにすべてのもの止まん》

* * * * *

いつかわが国の大学でヒムラーが研究されることになる。偉大な千年王国論者の最後の一人が。彼の内的世界の風景は恐怖を好ましい量だけ喚起するであろう。(従って、美を。) 残虐行為審問の写しがすでに多年に亘って劇場でわれわれの娯楽に供されていることを願よ。美はわれわれがかろうじて耐えることのできる……

* * * * *

いよいよ、われわれの歩くのは彼の庭園だ。誰が、もし私がそのとき叫びを上げたとして、誰が聞くだろう？ 無言の屈服！（キリコ）

恐怖が天使たちに微笑みかけた、彼ら全員に……身の毛もよだつほどに。まさにこれを待ちうけてきたわれわれは幻影を賞賛することができる。「おや、これは火にそっくりではないか！」

そこにおいて空に答えるのは誰か？ 魂。それはなされる、それは起る。空想することの、ことばで応酬することの、はかりしれぬ意味の、悪。それは永劫に起る。それらは毎日呼ぶ、互いが互いを。あらゆるデリカシーに反して脳を用いることを強いられた唇。疑惑と機わしい雑言 おお、まさに機わしいかぎり！ げに、朝は止む！

ああ、そして夜は 夜は苛み、そして刺激する。あさましい欲望がわれわれの中に住

みついて離れない。われわれはそんな不浄さの極みに、歯がみし、そして嘔りつく。それは去る、風に乗ったように……だが風はない。寒さの中を、暗い街路を抜けていく、(熱に泡だつ丸石。)彼らは黄金の歩道を吼えながら右往左往かけまどう、昇りゆく地平に向けて。幻影!

内面の、動脈のジャングル、そこから 霊 が駈け出す、呪縛がひとりでにくずおれていき、強大なくしゃみで息絶える。そこに若い衆が列をなして、ぶつぶついいながら我慢強く、死ぬのを待っている。彼らの血が翻って私に。 霊 V が飽食したコンドルのようにそこから出発する峡谷。この監獄宇宙に駐屯する部隊、あらゆる八恐怖 に(好きこのんで)立向うべくロケット発進していく兵士、朝方にときおりルシファーが囁くこと。

死の罪がダビデの子らを寛恕する。希望は険悪な空の下の沼地。先史時代の島-夜の荒地。房-泥の蝶番、地獄が出てくる、嬉しくもなく、死にゆく者の睾丸から。(曝き声: ああ、桃発的な死の藪!) おおメフィストフェレスよ!

死のキャンプ。太って、脹れて、無軌道に花ざかり。根は全能者のプランによって準備を整えられた地面に吸いつく。(彼 のみがなしうる)

神? 神はわれらの F er 。そしてここ、漂う花々の間にあっては、メンタルな組織原理。これら、不思議な性質の鳥たちは、行為と報賞の間にある。汚物の中に立ち、昔の木版画の中でのようにやや流し眼で何か間違っただけを見ている。

「汝は竹の茎で罰せられる」と彼はいう。汝は言われるがままに為す……。彼は自分の心臓がこのキャンプを設立した神に当たるのを感じた。伝道の書。

* * * * *

私のはらわたは街路のぬかるみのように踏みにじられる。四肢は変形して私を打ちのめす。右往左往! 上を下へ! 「私は嘔んだ、すさまじい一服の !」

おぞましい燥音が「魚」のようにかすめていく。地獄、永遠の罰だ、その中で彼は愛のデーモンたちの調子をとった議論が聞えるように思った なにゆえ事物が存在するのか、その原因に関して 。彼はもの思いに耽りながら迷路をさすらう内に道に迷って立ちどまったふうむ!そこだよ、われわれは存在するのだ—神の愛は河口に来ても絶えぬ。接吻。旗はしおれる、あえかな目的で。存在することをやめよ、そっと歩み寄って消滅せよ

欲するために? われらは黄金を、医療を、誓いをなそう。われらは 地球の腸 を訪ねよう。われらは三つの髄膜を夢みよう。おお 柔膜 よ、Pia Mater よ、自然の母胎よ、われらの聖母崇敬を受けいれたまえ (ヒドン・ストーン は 精留 なる秘めやかな忍びやかなわざによって見出される。 地球-肛門 への硫酸塩の点滴。)

太陽と月の寓話

王は供なしにおでましになって実質組織に入らせ給う。このとき、身分卑しき者、看守？ Mの余は、わが皮膚の方へと近寄る者なし。柔膜の分泌する露が、踏まれた黄金の層を溶かす。彼はそれをカエルノコシカケ茸に与える。あらゆるものが入ってくる。彼はおのれの皮を脱ぐ。それにはこう書かれてある 余は神なるサトゥルヌスなり。罪の矯正。サターンはそれを取って傾く(ほほう)。何もかも、ほほう。彼は、ひとたびそれを与えられてしまうと、支度のできているものの中に崩れこむ。おおなんと墜ちていく！(どさっ、と岩の上に)それは彼の鼻も、結構なベルベットの胴着も、そしてこれらのたえず侵略する腫瘍、鼻孔も。何だというのだ(違いは)? ジュピターはそれを二十日たもつ。

それは月だ。三番目に愛されているのは。Loved life. ("live" することになる、アナグラムの的には。)彼女は鼻を二十日間保つ。血縁は内にある。「顔面倭小奇型」はひとつの原因だ、塩の花のように白い。したがって慈愛深くも 霊 は上質なワイシャツ姿で降臨する。われらは彼の飽食した鼻孔をじっと見る。

一日、だが四十日、そして時には四十、そうであるのは 彼 を四十にするためなのだが。彼の 太陽 は黄色。

そこへ来る太陽、実に美しい。思いみよ(知恵):ハイル! 美点が湿っぽい豊かさに頼らぬ地。イーゼンハイム! それはこれらの近郊を耳や目の隔たりにもましてまざまざと照らし出す。チェロ! 世界の毛幹が夜を追放する。

初期。その年はその年を歌うけれども、それぞれの奇妙な含みに調律させているのは太陽なのだ。断じて(フーサーク)を存在を持たぬ淀んだ池にすべりこませるなかれ、滅却者 たちよ それらのものの分与の一部は公園(神の園)内の「乳」だったのだ、不動と自己認識とどちらかを選ぶことになって。ワイヴァーンたちはもはや眼に鱗はかからぬであろう。

沈痛な、沈痛な彼は聞いた。

われらはかくて第三 項 に進む

「異論 1. この恐るべき緑変を(神)は見えていぬと思われるが。われらは、(神)が何マイルも諸共に、その「毒」では何もかも消滅しえないような 屑屋 と共にあろうという、アウグスティヌスの賢慮によって引裂かれている。敢えて問う:われらは彼が窒息するとき何となすのが最善なりや?

異論 2. 更に、疑念 を統べる彼の徳によりて、悪しき者の一人は善なり。唾くが如く黒人歌を提唱する者はここにはなし(そして誰かはいる)。善の諸因。純なる患者、その者いわく、「悪しかれ、汝、わが G d よ!」または 指輪 に於て。(「黄金!」「それが汝

の欲するものか？」)

異論 3. 更に、もし(神)が冒瀆するのならば、かくもこれらの贈物(かくも自在に提出された)を愛するであろうか？ 彼はわれらの最高礼拝を要求するであろうか？ 墮落の所業はそれを為しておらぬ、なんとなれば彼は或るものを他のものによって生じせしめるが故に。異議あり！ 「豚」の肉体は何ものをも消滅することはできぬ。質問は？

わたしがそれに答える。ある者が泥水の中のあの筆を把った。これは認められねばならぬ。しかしながらそれは 彼みずから がわたしに吐く自然な必要物から実証される。(日毎)幾層もの薄い黄金の瘡蓋は取除かれるが、彼の本質は変りえない。では、われらの何が？ わたしは浸透ということを知っている、そして房泥が「記号論レーズン」によって緩和されるということ。わたしの内に、(神)が創った散形花序の拘束への道を切拓きつつ。見よ、それ！ 客や陥穽は主を喜ばせる。彼はそれを四十の昼と夜の間たもつ。わたしは彼その人だ。エデンを彼らは理に叶って有した、彼は自ら進んで彼らに与えたのだ」

さあ、ほれ 内の事象の葡這類！

* * * * *

天上の憩い

耐え難き序文！ 彼が直ちに何ものも消滅できぬとは！ その前の、非在へ向かうもっともな休止。棘の尾を持つ蠍座は、巨匠デューラーが証示するように、何ものも消滅することはできない。したがって、来たれ、柔和な小さきものども再びはねちらかしに！ わが血のプレゲトン川に名告りをあげよ。ああ、なんと素敵に私は今燃えることか。しっかりやれよ、客人たち！ わが才能のすべてを経めぐれ！

今おんみらは耳をそばだて、今おんみらは鞭打苦行者らの不可視なまでに微細な悲嘆を聞く。私はランプと油を濫費はすまい。消滅。それはいと心優しくも、死」の如きものであろう。

青白きヴィーナス、柔膜よ、これら僅かなスピロヘータを受け容れたまえ。

泣きながら私は「黄金」のサタン相を見た魅了。滲透性の鉷石、ところがどういわけかその魔法性を疑う向きがある。(彼は各位のご賢察を乞う。)分枝、流体状の漬聖物の柱が彼の脊椎を上昇し、速かな腐敗を蒙る。この膿の小潮は容易には遊離できない。

だがなんと不潔に私はなっていることか。虱が私を蝕む。豚なる神、愛 は、かような生物に存在を与えるに際して、乾癬の瘡蓋を取除く。真実”不真実。彼は八彼の 慈悲

を「消滅」でできるか？ 否、川の水をも。だがわれらがいま右に述べたような、このような汚物の山の上の組織はカソリックの信仰に甚だ反するものである。巡礼者たちの道は彼らを「街路」に沿って導いた。Ps. cxxxiv, 6 によれば、不滅の憎悪は一樣な炎で燃える。これはA の教理だ”彼の論文「消滅論」を見よ。

「彼は統治す。彼は彼の意図するところを為す」ここでこの「無」はひとつの(まことにパーソナルな)主張である。彼の行為すべての動能である。

あの強力な通廊、吻合、われわれが 生命の血 と呼ぶ本質的な存在の根源の森。鈍麻しつつ、彼は非在へと向うすべてのものに降下する。彼は降下する、すると 空 から、生れる 怪異 が傍に潜行し、そして ここにして今 に宿る。これは、われわれがこうした疑問を提出する相手となる、柔弱な霊である。スフィンクスがウインクする。彼の庭は呼びさまされる、だが彼女はこらえる。そして再び。

それは大変なことだ、まあ個性原理がないようなもので。全造者の美点への偏見がなければ、だらだら水 と呼ばれるかもしれない。われわれは思い切ってさらに降り、神の百合の下、「父祖」のもとへ行かねばならぬ(ファウスト、該当項参照)。そして彼の毛深い掌への偏見がなければ、われわれは憎しみと蔑みに分裂している。鼻に親指を当てる仕草をする。

植物、せせらぎ、頭音、衰弱、青っぽさがそれらのうち最も非道なもの(神)を反映する。彼の力は粉末化された根を石灰質化する。彼は彼らの曲った嘴を手当てする。おお悪の塊偏よ、滅却せよ！ すべてを滅却せよ、そしてわれらを。

断片、毒のしるしに収斂する網、魚座。三たび祝福されよ(大義)。生命を与えられたコルク栓抜きの大群の猛威。

渴いてほろ酔い加減 ドイツの土地で

喝采する鞭打苦行僧の間で.....

幾ギルドも列をなしてサティスペイゾンに向う告解者。A のいうには、神が老いているが故にこうした変化が生じている。彼は宇宙的な空藪を引くわけだ。徳？ いや、彼は踊るのだ。それが気に入れば、彼は滅却するのだ、原因や進行、継起や結果を.....告解者を。

「原因」の増殖を思いみよ。汝はここにこの腐りゆく脊髄嚢を得、「神」を知るに至るやもしれぬ。そのとき 彼は汚れた霰ある指を脳の中へと伸ばし、そして

Gra netiglluck ende firseiglie blears. Gra netiglluck ende firseiglie. Netiglluck ende firseiglie blears.

(神)

1.

されば、事実を。ハーストは私が自制して事実に、残らず事実に、ひたすら事実のみに徹しなければ食堂や図書館の特権を撤回すると嚇す。図書館のほうはなしで済ませられるかもしれない。

2.

私はしかし断乎として日誌をつけることを拒んだ。私の日々は番号をつけられてはいるけれども、私は彼らの番号を支持したりはせぬ。

3.

いちだんと加減悪し。鼠蹠部と関節に矢のような痛みがする。夕食を半分喪失。口と鼻から出血。眼が痛み、視界はここ二、三日のことだがきわめてかすんできた。眼鏡をかけねばならぬ。また、禿げてきているが、この咎をパリジンに負わせるのが正当かどうか自信はない。

私は利口になっているのだろうと思う。けれども、うんと利口になっているとは感じない。けだるさとヒステリー、躁と鬱、熱さと寒さを交互に感じる。猛烈に感じる。だがドクター・バスクのオフィスで(そこにはもう彼女はいない)さまざまな精神測定テストで幾らか注目すべき成績をあげた。

4.

ドクター・バスクはもうキャンプ・アルキメデスでは働いていない。少なくともその形跡はない。実際、モルデカイの死のあの晩以後、姿が見られない。ハーストに彼女の失踪の説明を求めたが、説明はトートロジーになるばかり　彼女は行ってしまったからいいのだ、

5.

私がこれまでに書いた囚人はすべて死んだ。最後に死んだのはバリー・ミードで、まるまる十カ月近く居残っていた。洒落っ気は遂に彼を見捨てることなく、有名人の死に際のことば集の書物を見ながら笑って自分を死に引渡した。彼の死後まもなくのことだ、私は日誌の三つの項の最初のものを書き、これにたいそう悩まされたハーストは事実に対する

最新の、そして最も強硬な要求を出すに至ったわけである。

6.

「事実というのは何ですか？」と私は彼に訊いた。

「事実とは、起ることだ。きみが書いていたように　ここの連中について、そして彼らについてきみが考えることについて」

「でもぼくは考えたりしませんよ、彼らについては。こうした人たちのことは。そうせずに済せられる限りはね」

「えいくそ、サケッテイ、わしが何が欲しいかわかるとるはずだ！　私に理解できるようなものを書くのだ。こんな……こんな……まったく反宗教的だよ、きみのこの代物は。私は信仰深い人間ではないよ、だがこれは……きみはやりすぎなのだよ。これは反宗教的で、私は一語も理解できん。良識ある、知的な日誌をもう一度書きはじめるのだ、さもないと私はきみとは縁を切らせてもらう。縁切りだぞ、いいな？」

「スキリマンがぼくを追っばらいたがってるんですか？」

「彼はきみをかたづけたがっているのだよ。混乱させる影響源としてね。きみは自分が混乱のもとであることを否定できまい」

「ぼくの日誌があなたにとって何の役に立つんです？　なぜあなたはぼくをここにとどめておくんです？　スキリマンはぼくを求めてはいない。彼の小さな子供たちはぼくに混乱させられたがってはいない。ぼくが求めるものは一瓶の酒、ひとかたまりのパン、そして一冊の本だけですよ」

これはいうべきではなかったようだ、おかげでハーストに私を動かすのに必要なレバーを与えてしまった。どう頭を働かせようとも、私はいまも同じ棧を押す同じ箱の中の同じ鼠なのだ。

7.

ハーストが変わった。大失敗の夜以来、穏かになってきた。老いたアメリカの重役連に実に特徴的なあのきんきらきんの青年ぶりが顔から去って、あとに残されたのは浜に打上げられたストイシズム。足どりは重い。みなりには無頓着。長い時間をデスクで虚空を凝視して過す。何を見ているのか？　疑いもなく、おのれの死の確実さだ、それを今までは決して信じなかったのに。

8.

この最後の事実については衛守たちに恩義がある。彼らは近頃、私を上級生とみてくれる。うちあけ話をしてくれる。忠僕 は自分に職務が要求する事柄が楽しくない。それは完全に善いことではないのではないかと疑っている。私の劇の中のハンスのように、忠僕 は善きカソリックだ。

9.

『アウシュヴィッツ』が出版された。完成以来、これは無価値だ、悪しきものですらある、いや執筆の真っ盛りの時にそう思えたように優れたものだ、と交互に思ってきた。そんな心理状態の中で、ダイヤル・トーン のヤンガーマンにこれを送ることにハーストの許可を求めたのだった。彼はこれを掲載するために、印刷に回りかけていた号の半ばをボツにした。彼からのたいそう親切な手紙でアンドレアのことなどがわかった。彼らは私について最悪の事態を想像していた、というのもスプリングフィールドでは私宛てのすべての郵便物に 抹消 のスタンプを押して返送していたからなのだ。彼らは電話でただこれだけをいわれたそうだ 「サケッティ氏はもうここにはおいでになりません」

あと幾つかの短いものも公表されたが、最近のたわごとは駄目で、それというのはNSAのコード破りのコンピュータどもがこうした労作に一貫して 不確定 の判断を返してくるからだ。ハーストはだけではないのだ。

10.

聖ドニは梅毒患者の守護聖人だ　そしてパリの。これは事実だ。

11.

事実とは何か？ 私は本心から問う。もし(10)が事実なら、それは誰もが、聖ドニが梅毒患者の守護聖人であることを認めるから　コンセンサスによる事実だ。林檎が地面に落ちる、これはまあ、実験で実証できるかもしれない　実証による事実である。しかしハーストが私から得ようとしているのは、このどちらの種類の事実でもないだろうと思う。それがコンセンサスによる事実なら、私が関与しようとしまいと大した違いはないわけだし、事実が実証的なもので、しかも稀少な新たなものであれば、たった一つでも発見できれば探究に生涯を費すような労苦も正当なものとなる。 (けれども、私の生涯では

ない)

しからは、われわれに残されているものは何か？ 詩だ内面の事実だ私の事実だ。そして、それこそまさに私が提出してきた事実ではないか。善意で。くそまじめに. さて、何をご所望ですか？ 嘘？ 半ば詩にして半ば真実？

12.

ハーストからメモ 「単純な問への単純な解答だけでいい。HH」 では、どうぞご質問を。

13.

ハーストからメモ。スキリマンについてもっと語れとのおおせ。HHは疑いもなく知っているのだから、私としては避けるような問題もない。

では事実を。彼は五十代初めの男性、不愛想なほう、相当な生のままの知性。私のようなりべラル派としては、本質的にドイツ人、と想像したくなるような種類の、原子物理学者。タイプは、無念、国際派。五年ほど前、スキリマンはAECでかなりの要職に就いていた。この組織のための、彼の最も顕著な仕事は、特定の構造の氷の洞窟で行なわれる核実験の非探知性を提示する理論の開発だった。これは当時の核「停止」の間のことであった。実験は行なわれ そしてソ連、中国、フランス、イスラエル、さらに(不面目にも)アルゼンチンにまで探知された。スキリマンの氷の洞窟は、実は、遮蔽するどころかむしろ増幅するような効果があることが判明した。この失敗こそ、最近の最も悲惨な一連の実験を促進する因となったものであり、スキリマンは職を失うことになった。

彼はすぐに再就職した ハーストがR&Dの長であるのと同じの団体に。ヴァチカンでのものと同じくちに厳格な保安体制にもかかわらず、上層部にキャンプ・アルキメデスでの活動の本質に関する噂が流布しはじめていた。スキリマンは、より精密な説明を要求し、拒絶され、要求し、etC。遂に、彼をわれわれのささやかな残虐行為の当事者とすることが、但し彼自身がここに居を定めるのに同意するという条件つきで、とりまとめられた。彼が着いた時、パリジンに耐えて生残っていたのはミードと私自身だけであった。ひとたびこの薬の本質を理解し、その有効性を確信すると、彼は自分にも注入せよと主張した。

14.

この点にそぐわしいと思われる、歴史上の興味深い事実。

十九世紀の科学者、オーリアス-テュレイヌは、軟性下疳と梅毒は同一の病気であり、「梅毒接種」の技術によって抵抗力がつき、治療の期間も短くなり、再感染や再発からも安全になる、という仮説を展開した。一八七八年、オーリアス-テュレイヌが死んだ時、彼の遺体は、彼みずからが自身に用いた「梅毒接種」の処置による傷でおおわれていることが発見された。すなわち、梅毒の膿を自分自身の肉体の切開いた箇所を導入していたのである。

15.

かくて、スキリマンの仲介によって実験は第二段階に入った。実際、最初に予想されたことは成就されはじめている。われわれが「純然たる研究」と呼ぶ『黙示録』へのあのさまざまな研究が。

彼を補佐するのは十二人の「クワット」(と彼は侮蔑をこめて彼らを呼び、その見事さに彼ら、彼の犠牲者たちでさえ、感服せざるをえない)。もと学者か助手で、まったく自発的にパリジンに志願してきた連中である。実に競いあってわれわれ全員は天才の最高の飛翔を知ろうとする。ヨルダン川のこちら岸に立ちどまっているわれわれは。私は誘惑から救い出されたことが嬉しい。おれは、と私は考えこむ、屈服してしまっただろうか？

果しなく広がる黄金の王国を見はらす山頂で私にはいまでも誘惑者の声が聞える。「これがすべておまえのものになるのだぞ」

詩。フルストップ。

16.

では事実をもうひとつ、とっておきの年代物の事実です。

はたして性病は一つだけのものなのか(当時、淋病は梅毒と混同されていた)を解明せんものと試みて、エジンバラの研究者ベンジャミン・ベルは一七九三年、学生たちにこの病気を接種した。

オーリアス-テュレイヌよりも用心深い、しかし上等ではない人物ですね。

17.

HHからメモ...「いったい、オーリアス-テュレーン(ママ)のどこがそぐわしいのか？」彼はまた、ヨルダン河のこちら側に止まることの意義をも問う。

オーリアス-テュレイヌがひいては、ベル博士にまつわる私の逸話が関連性を持つというのは、彼が、間違いなくキャンブ・アルキメデスに於るわれらのドクター・ス

スキリマンの動機でもあるところの、如何なる犠牲を支払ってでも知識を究めんとする、同じファウスト的衝動によって動機づけられているらしいという点であります。ファウストは天に対するすべての要求を放棄することをも辞しませんでした。われらのスキリマン博士は、天への期待は殆どなく、更にもっと重大なもの1地上での自らの生命をすら、失う覚悟をしています。これはひとえに或る病理を理解せんがためであります。A-Tの場合には梅毒を、スキリマンの場合には天才を。

ヨルダン川の意味については、申命記(三十四章)とヨシュア記(第一章)をご参照いただきます。

18.

スキリマンの人となりについて。

彼は名声をそねむ。彼は、世間で知った特定の人物について、その業績や能力を自分が嫉んでいることを明々白々にせずには、語るができない。ノーベル賞の受賞者は彼を激昂させる。彼は、自分の分野での専門的な論文を、それが他人の発想になるものかと思うと、殆ど読むことに耐えられない。正当な評価によって賞賛することを余儀なくされればされるほど、それだけ彼は(内心)歯ぎしりする。薬が彼に影響を及ぼしはじめている今(ほぼ六週間になる)、彼の意気が昂まりつつあるのが感じられる。彼の喜びは、先に登った者たちが登撃の最高地点に残していった目印を越えていく、登山者のそれだ。殆ど、彼が名前を照合しているさまが思い浮びそうなほどだ「あれがヴァン・アレン！」とか、「いまハイゼンベルクを越えたぞ」

19.

スキリマンのカリスマ性。

今は否応なくチームワークの時代である。次の世代には、とスキリマンは唱える、サイバネーションがうんと進んで単独の天才が再流行するであろう。彼に必要となる夥しいセルフ・プログラミング・コンピュータを都合できるだけの補助金が得られるならば。

スキリマンは他人が嫌いだが、自分にとって必要なため、他人を利用することを修得している。ちょうど、以前にしぶしぶながら私が車の運転を独習したように。どういうわけか私には、彼はあの「対人テクニック」を心理学のテキストから学んだのであり、部下の一人にヒステリックに小言をいいはじめる時、こんなふうに分身にいつているのだというような気がする。「さあ、これはちょっとしたネガティブな補強のためだぞ」同様に賞賛するときにはニンジンを使い浮べる。彼のままになる最良のニンジンは、自分と話し

合う機会を与えることにほかならない。ただもう凄じい荒廃のご面相ゆえに、彼は近寄り難いのである。

だが彼の最大の強みは、過たず他人の弱点を見抜く力にある。彼が十二人の僥倖をこうも見事に操っているのは、操縦されることを望むような者を念入りに選んだからだ。あらゆる独裁者が知っているように、そうした人間には事欠かないものなのである。

20.

私は、そうなりうるとは思いもかけなかったほど、大きな人格的インパクトをHHに与えてしまったようだ。彼の最新のオフィス間メモほ季刊誌からの断りの添書のように読める 「きみのスキリマン描写は十分に具体的ではない。彼はどういう姿をしているのか含どのように喋るのか？ どういう種類の人物なのか？」

実情をわきまえていなかったなら、私は彼がパリジンを服用しているのではないかと疑ったかもしれない。

21.

彼はどういう姿をしているのか？

華奢になるべく自然が意図した人間である彼は、不本意ながら太っている。手足が貧弱でなければ、蜘蛛になぞらえるのが適切かもしれないー膨れた腹に最小限の四肢。禿げていて、燦めく頭蓋を横切ってまばらな側面の髪の長い房を疏くという、効なき虚栄を培っている。分厚い眼鏡はしみのある青い眼を増幅する。痕跡的な耳たぶ、しばしば私は気がついてみるとこれをじっと眺めている、ひとつにはそれが彼を悩ますのがわかっているからだ。全体的な非実体感、まるで肉はそっくりそのままバターであってその内部のメタリック・スキリマンに何の害も与えることなくそぎとれるかのよう。大層ひどい体臭(同じバターが腐んだというところ)。ひどい喫煙咳。あごの下側にただひとつ永久的な丘疹、これを本人は「ほくる」と呼ぶ。

22.

どのように喋るのか？

かすかに余分な鼻声を伴って。カリフォルニアで修正されたテキサス流。鼻声は私と話すとき強まる。彼にとって私が偉大な 東部エスタブリッシュメント の代表だからだと思ふ遠い昔、ハーバードやスワースモアへの彼の奨学生待遇申請をはねつけた、あの悪意あるリベラリズムの秘密結社の。

しかし、あなたは本当は彼は何をいうのか？ と仰有りたかったのではありませんかな？

そこで、彼の会話を分類することにしましょう

- A. 自己または他人の研究への関心を示す言辞。(実例一「われわれは古い点描派的な爆撃の観念個々の、分離的な『爆弾』から脱却せねばならん、むしろ今はもっと概括的な、『種の霊気、爆性の観念を求めねばならんのだ。私はそれを日の出のようなものとして思い描く』)
- B. みつけたならどこであれ破壊してしまいたいという願望のかなり率直な自認を伴う佳きものへの侮蔑を示す言辞。(これの最上の実例はナチの青年隊の指導者、ハンス・ヨ; ストカチの引用で、それを彼は松材の飾り板に焼きつけて机の上に吊していた一「教養という単語を耳にすればいつでも自分はブローニングの安全装置をはずす」)
- C. 同僚や知人への侮蔑を示す二. 一・辞。(先に私はスキリマンのハースト観を引用した。忠誠このうえないクワットたちにさえ、当人のいないところでは酷評する一そして彼らが出過ぎた真似をしようものなら、面と向って。一度、若いプログラマーのスキパンスキーが、失敗を情状酌量してもらおうとしてこういったことがある、「試みました、ほんとにやってみたんです」スキリマンは答えた、「ところがどうしても芽が出ませんか、え？」まったく他愛のない冷かしののだが、ただスキパンスキーの場合にはおそらくあまりにもそれが的確すぎるのだろう。実際、スキリマンに悲劇的な欠陥があるものなら、それこそド・サドのように、傷つけたい衝動に抵抗できないことになってしまう)
- D. および自分のものであれ他人のものであれおかまいなしの、肉体への憎悪を示す言辞。(例：彼がパリジンの「体細胞のループ・ゴールドバーグ的メカニズム」に対する効果についていったジョータ。もっといい例、彼のスカトロロジー的メタファ好き、以前、食べることと排便することとの違いをいっしょくたにしてしまったふりをして、食堂中を笑いが止まらなくしてしまったことがあった)
- E. 奔放で広汎に亘る知性の所産である言辞や観念。どう解釈してみても、私は彼のいうことすべてを彼に刃向わせることはできない。(まったく公正に口、取後の例を。彼は湖や貯水池など、大量の静止した水の持つ奇妙な魅力を分析しようと努めていた。彼は、こうしたものの中のみ自然はわれわれに、みたくには果しくなく広がるユークリッド平面の景観を与えてくれるのだと述べた。それは、常にわれわれの細胞組織に働きかけている重力の法則への、あの最終的な服従を象徴するものなのだ。ここから彼はさらに進んで、建築学の偉大な業績はユークリッド平面の概念を

とらえてそれをぎりぎりの縁に立たせることにほかならないと述べた。壁というものがかくも印象的な現象であるのは、それが水塊.....を横向きに立たせだものだからなのだ)

23.

どういう種類の人物なのか？

さて、どうやらあなたは私に事実の領域を完全に去らせることになりそうですね。実際、私がスキリマンについて書いたことの過半は、事実よりもむしろ評価しかもあまり偏見のないものではない。私はこの男が嫌いだ、生涯に於て人を嫌ったことはごく僅かしかないのだが。憎んでいるといってもいいと思う、それが非クリスチャン的でありかつまた無作法なことであるのでなければ。

そこで私は、彼は悪人だといって、あとはうっちゃっておくべきなのでしょうね。

24.

ハースト答えていわく「私はそうは思わない」

それでは何がお望みですか、HH？ 私はすでに、この日誌に於て他の誰にかけたのよりも多くの語を費して、ひたすらあの野郎を描写した。われわれの合戦のドラマ化をお望みなら、私がもう少し長く彼の傍にいられるよう、スキリマンのお許しを乞うて下さらねばなりません。彼は、私が彼を嫌っているのと同じくらい、私を嫌っている。われわれは食堂で(あそこでは、無残なや、食事の質ががた落ちです)夕食を二人共とる時以外はめったに会いません、ましてや口をききあうことなど。

スキリマンについてのフィクションを書かせたいのですかな？ それを求めるほどにまで、事実に対する信仰をお捨てになったのですか？小説をご所望で？

25.

HHからメモ。「それでよい」恥知らずめ。

さててしからはば 小説を：

スキリマン

または

人口爆発

物語

ルイス・サケッティ

赤ん坊が蹴るのもものかは、彼は小さな両脚をキャンバス車椅子のしかるべき穴にどうにかさし込んでいた。チンパンジーがいつも知能テストで解くことを求められるような、何か格別に難しい嵌め合せ問題を思い起した。

「忌々しいが多すぎる」とスキリマンはぶつぶついった。

ミナ、右手の側から始めて、彼を手伝って自分たちの四人目の子供、赤ちゃんビルを背負い紐で固定する。吊紐はよだれかけと交叉し、手の届かない尻支えの下で留め具をかけられる。「何が多すぎるって？」と彼女は無関心に訊いた。

「赤ん坊さ」と彼はいった、「くそったれな赤ん坊が多すぎる」

「もちろんよ」と彼女。「でもそれは中国でのことなんでしょ？」

彼は身重の妻を気づかうように微笑みかける。そもそもの最初から、スキリマンにとっての彼女の特別な魅力は、何をいっても確実に理解しそこなうという点だった。それは単に彼女が無知だということではない、もっとも彼女は素晴しく無知なのだが。それよりもむしろ、彼女が彼を、あるいは何であれ今すぐ直接に鈍牛の如き安楽に役立たないようなことを、認識しようとしなないということなのである。わがイオ、と彼女のことを彼は呼んだ。

いつかは、と彼は期待していた、彼女はまさしくダッハウでの彼女の母親のようになるだろう。あの人からは人間特有のあらゆるもの。知性、慈愛、美質、意志。が、あたかも誰かがどこかから栓を引抜いたかのように、潤れ果てていた。くたばりぞこないのフラウ・キルシュマイヤー。

「ドアを閉じて」と彼はいう、彼女はドアを閉じた。

赤いマーキュリーはガレージから出て、スキリマン自身の設計になる無線装置がメカニズムの引金をひいてガレージの扉が閉じた。ミナ、と彼はこのささやかな考案物を呼んだ。高速道路に出ると彼女の手は自動的にラジオのノブに伸びた。

彼の手が彼女の骨太の手首を掴んだ。「ラジオはつけたくない」と彼はいった。

みせびらかしのジルコンの指環で重たい手は引込んだ。「わたしはラジオをつけようとしていただけなのよ」と彼女はおだやかに弁明した。

「おまえはロボットだよ」と彼はいうとフロントシート上で身を横に傾けて彼女のやわらかな頬にキスした。アメリカに来て四年になるいまも彼女の英語はまだ初歩的なもので、「ロボット」というような単語は理解しない。

「わたしにはひとつの仮説がある」と彼はいった。「わたしの仮説というのは、こうしたものの不足が、政府がわれわれに思わせたがっているように、なにもかも戦争のせいなので

はないということだ。もちろん、戦争は事態を悪化させるがな」

「悪化させる……？」と彼女は夢みるようにおうむがえしする。白い線が次々と車に飲み込まれていくのをみつめているとどんどん速くなっていき、やがて個々の線を見分けることはできなくなるただ一筋の線、もうそんなに白くはない。

彼は自動操縦に切換え、すると車は再び加速しはじめる。ぎっしり混みあった第三市線に割込んでいく。

「そうではなくて、もの不足は人口爆発の必然的な結果にすぎんのだ」

「また轡ぎこんだりしないでね、ジミー」

「人々は、ほれ、こんなふう考えたものだ、いずれは横這いになる、カーブはS字型になる、とな」

「人々」とミナは憂鬱にいった。「どんな人々？」

「たとえばリースマンだ」と彼はいった。「しかしあの連中は間違っていた。カーブはただただ上昇し続けるのだ。指数的にな」

「まあ」と彼女はいった。おぼろげながら、彼が彼女を批判しているらしいと感じはじめていた。

「八十億」と彼はいった。「二百八十億。五百四十億。一兆九百億。二兆五千億。五兆。今ではいつ十兆になるかもしれない。レインジャー・ロケットのようにグラフ上を急上昇して突抜けていくのだ」

オフィスでの仕事だわ、と彼女は思った。オフィスでの仕事をうちに持帰ってほしくないものだわ。

「くそ忌々しい双曲線だ！」

「ジミー、お願い」

「すまん」

「赤ちゃんビルのことなのよ。この子が父親がそんなふう話すのを聞くべきじゃないと思うの。それに、ねえ、そんなに悩むことはないわよ。水不足は来春で終るってテレビで聞いたわ」

「それで、魚不足は？ 鉄鋼不足は？」

「そんなこと、わたしたちの問題ではないんじゃないかしら？」

「おまえはいつも、どういえばわたしの気分がよくなるかを知っているんだな」と彼はいった。赤ちゃんビルの上を越えるように身を伸ばしてもう一度彼女にキスする。赤ちゃんビルが泣きだした。

「こいつを黙らせられんのか？」としばらくして彼は訊いた。

ミナはただ一人の息子(それまでの子供は三人とも女の子だった。ミナにティナにデス

ピナ)をあやすように喉の奥を鳴らすと、ばたばたと振りまわしているネルで包まれた腕を愛撫しようとした。最後に、気をおとした彼女は、無理やり黄色い(二歳までの幼児用の)精神安定剤をのませた。

「まったくマルサスそのものだ」と彼は再開した。「おまえやわたしは等比級数的にふえていく、ところがわれわれの資源は等差級数的にしか増加せんのだ。テクノロジーはなしうることをなす、ところが人間という動物はそれ以上のことをなしうるのだ」

「まだ中国のあの赤ちゃんたちのことを話してらっしゃるの？」と彼女は訊いた、

「それじゃおまえは聞いていたのか」と彼は驚いていった。

「ねえ、あそこで必要なのは産児制限なのよ、わたしたちがしているような。ピルを使うことを学ばなきゃいけないわ。それとホモよーあちらじゃホモを合法化しようとしているそうよ!ニュースで聞いたの、そんなこと想像できる？」

「二十年まえならそれは妙案だったろう」と彼はいった。「だが今では、MITのビッグ・コンピュータによれば、何をしようとのカーブを平らにすることはできない。二〇〇三年には二十兆になる、あとに来るのは地獄か高潮か。そこでわたしの理論が登場するわけだ」

ミナはため息をついた。「あなたの理論を話してちょうだい」

「うん、解決策が満さねばならん二つの条件がある。解決策は、問題にいま生きている十兆の人間に、見合ったものでなくてはならん。そしてそれはあらゆるところで同時に効果がなくてはならん。オーストリアで不妊化されたあの一万人の女たちのような、テスト・プログラムに向ける時間はもうないのだ。あれではなんにもならん」

「わたしが一緒に学校へ通ってた女の子の一人が不妊化されたの知ってた? イルザ・シュトラウスよ。彼女いったわ、全然痛くないし、楽しみは.....わかるでしょ...まったく変りないって。ただ、あの.....ほら.....出血がないのね」

「わたしの解決策を聞きたくないのか？」

「もうおっしゃったと思ったけど」

「このアイデアが浮んだのは六十年代初めのある日のこと、民間防空のサイレンが消えていくのを聞いたときだった」

「民間防空のサイレンってなあに？」と彼女はいった。

「ドイツでサイレンを聞いたことがないなどとはいってくれるなよ！」と彼はいう。

「ありますとも」と彼女。「子供の頃はしょっちゅう。ジミー、あなた、わたしたちはまずモハメッドの店に寄るっておっしゃったと思うんだけど」

「ほんとにそんなにひどくサンデーが欲しいのか？」

「あの病院の食事はそれは凄じいものよ。これはわたしのラスト・チャンスなの」

「よし、わかった」と彼はいった。車を低速車線に戻すと手動に切換え、パセニック大通り出口にまわった。モハメッド高級アイスクリーム店は短くて急な丘のてっぺんの小さな横通りにひっこんだところにある。スキリマンはこの店を子供の頃から憶えている。ときおりは品不足のせいでアイスクリームの質が落ちたけれども、ここは三十年前から変わっていない数少ないもののひとつだった。

「赤ちゃんを連れていくべきかしら？」と彼女がいう。

「ここで機嫌よくしてるじゃないか」と彼。

「長居はできないわね」と彼女はいった。苦しい声をもらしながら車から出ると、ふくれたおなかに片手を添える。「また動いているわ」と囁いた。

「もう遠いことではないな」と彼はいう。「ドアを閉じろよ、ミナ」

ミナは右手のドアを閉じた。彼はハンドブレーキを見、そして車椅子の飾りのオレンジ色のプラスチックのまがいのハンドルを穩かにみつめている赤ちゃんビルを見る。

「じゃあな、ぼうず」とスキリマンは息子に囁いた。

ちょうど二人がガラス張りのドアを抜けて入りかけた時、店員が二人に叫んだ。「おたくの車が！ お客さん、おたくの車が！」狂ったように皿ぶきを動いているマーキュリーのほうに振った。

「何だね？」スキリマンはわからないふりをした。

「おたくのマーキュリーですよ」と店員は絶叫した。

赤いマーキュリーは、ギアがニュートラルに入ったまま、ゆるやかな下りのカーブ上を滑走して、小さな横通りを下って交通の激しいパセニック大通りへと向っていた。一台のドッジが右正面にぶつかり、ボンネットの上ののしかかりはじめた。ドッジのうしろにいたコルヴェアが左にそれて、マーキュリーの後尾に衝突し、マーキュリーは衝撃でアコーディオンのように擦じまがった。

スキリマンはアイスクリーム・パーラーの外に立ったまま妻にいった、「あれがまあ、わたしのいおうとしていたことだよ」

彼女はいった、「何ですか？」

彼はいった、「解決策について話していた際のことさ」

おわり

26.

そして常に、逃れ難く、それはあの唯一の事実へと帰りつくのだ、死という事実。ああ……時がかくも液体的なエレメントでなかったなら！ そうすれば心が欄みかかって格

闘し、追い詰めることになるかもしれない。そうなれば、天使もその永遠の相の中に自らを躓わさねばなるまい！

しかし、そうなればまた、そんなファウスト的局面の只中で、苦痛が擁頭してくるだろうから、私の唯一の望みは時間が加速してくれること。そして現状はといえば、右往左往、上へ下へ、熱から寒へ、そしてまたリバウンド。

ささやかな寓話をハーストのために大急ぎで仕上げたから、何日、何時間を閲したか、見当もつかない。いまなお診療所において、これを走り書きしているいまなお大層加減悪し。

27.

最垂心の瞬間が来たのは『スキリマン』を書いた直後のこと。穏やかな発作があって、それが進行していく中で罹った、あれはヒステリー性の盲目状態だったに違いない。

私はいつも、盲になってしまうようなら自殺せねばなるまいと思っていたものだった。光ならずして何を心が糧にできよう？ 音楽は、たかだか、審美上のスープの如きものにすぎない。私はミルトンでもなければジョイスでもない、かつてヤンガーマンが書いたように

眼は耳よりも強し
 眼は見ることができる、愚かな耳は
 聞くことしかできない

これに、願いをこめて、こうつけ加えた

盲であったなら、みつけたかもしれない
 何かの用途を、耳のため
 人の心というものは
 おかしなことができるものだよ、皆の衆

ひどく加減が悪くて、何も考えられず、することもできない。まるで、ひとつひとつの思考の圧力が、疼く脳の縫合線に感じられるような気がする。たぶん、開頭手術こそが答だ！

28.

ベッド脇のテーブル上にハーストからのメモが、実に威圧的に散らばっている。勘弁してくれ、HH、ぼくがまだそれを見てもいないとしても。

私は日の光を希いながら、水の入ったタンブラーを、寝具のリネンの生地をみつめて、時を過している、

ああ、恢復期の官能性！

29.

ハーストは『スキリマン、または人口爆発』に対して数々の不平を抱いていた。主として、中傷的だというものである。HHには本物の出版者の心性がある。私のフィクションが幾つかの真実に合致している（スキリマンは実際にミナと呼ばれるドイツの女学生と結婚した、彼女の母親は実際にダッハウに住んでいる。彼らには実際に五人の子供がいる）ことも、ハーストの眼でみると、私の欠陥を悪化させることにしかない。

（「悪化させる……？」とハーストは夢みるようにおうむがえしする。）

思い出してくださいよ、獄吏さん、あなたがあの小説を求めたんです、私の意図はただひとつ、スキリマンが悪人だという私のテーゼを敷衍することだったのですよ。実にもう、私がこれまでに知る、最悪人ですな。彼はハルマゲドンの聖杯を探求しているのです。愛なき彼は、ダンテの地獄のまさに最下圏に沈むことでしょう　ブレゲトン川よりも下、自殺の森よりも下方、妖術師たちのリングの彼方、まさにアンテノラの中心へ。

30.

ハースト来訪。彼は私には理解できない形で悩んでいる。しばしば、陳腐な言説の途中で急にやめ、不意に沈黙して凝視し、まるでその動きによってあらゆるものがその瞬間に結晶に変容してしまったかのようなのだ。

何にとりつかれたのか？ 罪の意識？ いや、そんな観念はいまなおHHには手の届かぬものだ。むしろ、胃の調子でもおかしいのだろう。

（アイヒマンがいったとされていることばが思い出される　「一生涯、私は不安をおぼえていたが、何に対してなのかはわからなかった」）

冗談で訊いてみた、おたくもパリジンに志願したのかと、彼もジョークで打ち消そうとはしたものの、そんなことをいわれて気を悪くしたのは目にみえていた。しばらくして彼はたずねた　「なぜだね？　以前よりも利口に見えるかね？」

「ちょっぴりね」と私は認めた。「もっと利口になりたくないんですか？」

「ないね」と彼はいった。「きっぱりお断りだよ」

31.

HHが遂に、エイミー・バスクがもうキャンプAに関係がない理由を説明。彼が解任したわけではなく、彼女のほうから逃げ出したのだ！

「私には理解できんよ」と彼は嘆いて、「なぜ彼女がそんなことをするのか！ 実験に従事するのに選抜されたと聞いたとき、彼女は大喜びだった。ここでの給料はそれまでの倍だったし、おまけに生活費も全額支給されていたんだよ！」

私は、牢獄というものは看守にとっても囚人の場合とまったく同じように閉所恐怖症を招きかねないものだ、同じ鉄格子が双方を囲っているのだと、そう示唆しようとした。ハーストはどうしても納得しなかった。

「彼女は、そうしたければいつでもデンヴァーへ旅行できたのだよ。ところが一度もそれを望まなかった。仕事を愛していたのだ。だからこそ、わけがわからんのだよ」

「きっと、あなたの思っていたほどには愛していなかったんでしょね」

ハーストは呻いた。「安全保障が！ ここを気密にしておくためにあらゆる手を尽してきたというのに、こんなことになるとは！ 彼女が頭の中におさめている情報をどうするつもりなのかは神のみぞ知る。中国に売るだろうな あいつらがパリジンのようなものをどうするか、わかるかね？ 奴らはなにしろ無節操だ。何があろうと思いとどまったりはせんだろう」「彼女をみつけようとは、もちろんしたんでしょ？」

「あらゆる手をおったよ。FBI。CIA。全州の警察に手配書がまわっている。そして主要な全都市の私立探偵社が彼女を追いかけているよ」

「彼女の写真を新聞やテレビに出せばいいでしょう」

ハーストの笑いはヒステリーの瀬戸際に迫った。

「失踪以来、まったく足どりは掴めないんですか？」

「さっぱりね！ 三か月半の間一言の報せもない。おかげで、私はもう心配で眠れんのだよ。あの女が、このプロジェクト全体を台なしにしてしまえるだけの力を持っているのは、わかるかね？」

「そうですねえ、彼女がその力を行使するのを三か月半の間、慎んでいたとすると、かなり見込みはありますよ、無期限に慎しみ続けそうにも思えますがね。かつてダモクレスにとって大いに慰めとなったに違いない考えですよ」

「誰だって？」

「ギリシャ人ですよ」

彼は、わけのわからぬギリシャ人のことなど持ち出した私に非難がましい一瞥を投げると、去ってしまった。この気苦労だらけの世の中で、ギリシャ人などに何の用があるというのかね？

気苦労だらけの世の中を支配するこの連中は、なんと傷つきやすいのか！ 思い出すのは、初老のアイゼンハワーの仔犬のような顔、ジョンソンのペルソナの脆弱さ、そもそもそんな不出来なもの。

きょうの私はなんと奇妙な気分なのか。この調子だと、次はチャールズ国王にも情状酌量してしまいそう！ ま、それもよろしいんじゃないでしょうか？

32.

はっきりと壁が揺らめいている！

そして私の息は切れかけている。

こんな時、とりついているのが私の天分なのか病気なのか、なんともいえない。

視えざる者の免れ難い様相！

33.

今はよくなっている。それとも、低くなっているというべきか？

ここ数日前から、リプリー流のささやかな 事実の博物館 を創設する気になっている。このまえ医務室にいた間に、不意に新聞への渴望をおぼえた。スクラップブックまるまる一冊分を集積したので、そこから次に二、三、ランダムな抜粋を書き写す

34.

信じようと信じまいと

元ワッツにいたオーガスタス・ジャックス師は、なおもロサンジェルス地区で並みはずれた人気を博しつつけている。全国的なテレビ各ネットワークはなおもジャックスに対して、この元福音派の牧師を一夜にして有名人にのしあがらせた「白い良心への呼びかけの放映許可を、「扇動的」だとの理由で拒んでいる。このような拒絶はあっても、それに妨げられることなく、大半の国民はすでにラジオもしくは地方の系列外テレビ局を介して講演を聞く機会を得ている。先週、ビヴァリー・ヒルズにあるジャックスの\$90,000の家を放火しようとしたメリーランド大学の二年生は、ロサンジェルス郡拘置所の独房にこのニグロ牧師の訪問を受けたのち、ジャックスの申し出た司法扶助を受け入れることに同意した。

35.

これは事実です

トリップトラップが、ラスヴェガスの有力な賭博場としては二軒目のことだが、ブラツクジャックおよびポーカーを中止するとの決定を公表、これによって、それらのテーブルでハウス側が空前の凶運に見舞われているとの噂が確認された。「どんな方式が使われているにしても」とトリップトラップのオーナー、ウィリアム・バトラーは語った、「それはうちのディーラーたちがこれまで一度も直面したことはないものですな。勝つお客はみんな違った方式でプレイしているようなんですよ」

36.

不思議に思われようとも

東ドイツの「ハード」ミュージックの作曲家、アドリエヌ・レーヴェルキューンがコロラド州アスペンに帰還、本年八月、三〇日の彼女の「スペシャル・フーガ」の初演が、原告側の受けた肉体的、精神的な傷害の、直接的にして有責なる原因であったと主張する、原告の会によって彼女に対して申し立てられた告発に答えるため、出廷するのが目的である。原告の一人、フェスティバルのディレクター、リチャード・サードは、この公演によって鼓膜が破裂し、永久的に聾になったと宣誓証言している。

37.

のるかそるか

ノースウエスト・エレクトロニクスの副社長で、次期社長との噂があったウイル・ソーンダースが、先頃の株式分割の直後、同社を退社した。彼は自らの会社を設立する意向を表明、その正確な性格は明らかにしていない。映画用ホログラムの新方式の基礎となるかもしれない特許を彼が握るのではないかと、との趣旨の、ウォール・ストリート・ジャーナルに公表された推測を、彼は否定していない。

38.

この奇妙な世界

アルマ・ならびにクレア・ヴェイジーの殺害犯人、もしくは犯人たちは、なおも追求されている。ミネアポリス警察は、いまだにこの奇怪にしておぞましい犯罪をとりまく環境

のすべてを新聞に公開しておらず、全国の新聞各紙に送られた「公開状」で示された犯人の自慢が、すべて真実となるのではないかと恐れられているすなわち、これらの殺害が、実際になされた方法では実行が不可能だったと思われるようになるであろう、というものである、何人かの探偵小説家が警察に協力を申し出ている。

39.

小説よりも奇なり

ジェリー・ブリーンの *Traje de luces* つまり、光の服 が、ファッション雑誌三誌に、新たな流行を定着ミせる秋期号の表紙に男女両方をモデルにして載せて、特集されたことで、このファッション革新は実質上、成功のお墨付を得ている。光の服とは、微細な燐光性素材の透明な蜘蛛の巣状の網にほかならず、たえずパターンを変えながらキラキラまたたき、その輝きの大小ば着る人の動きと気分によって決定される。親密さを示す特定のジェスチャーをすれば、瞬間的な「消灯」がもたらされて、その間、着用者が彼または彼女自身の臨機応変の才能に全面的に頼るしかなくなる、というようにプログラムすることもできる。ブリン氏はヴオーグ誌に公表されたインタビューで、ワイオミング州シャイアンにある現在の家から引越したいとの決意を表明、同地で長年、同氏はトラジェ・ド・リュセの製造元、I・W・ライルのウエスタン衣料のデザイナーを務めている。

40.

嘘のようだが本当

SMU の驚異の快進撃は続き、ジョージアを 79 対 14 で圧倒。クォーターバックのアンソニー・ストレッチャーは歓喜の群衆によって意気揚々とスタジアムから運び出され、市中を練り歩いた。シーズン四試合目のこのゲームで解説陣はストレッチャーの複雑な新「巻き返し」フォーメーションの七つの新たなヴァリエーションを検出、これで SMU のレパトリー上の多彩な「巻き返し」プレイの総計は三十一となった。最終クォーターでオールディング・コーチは新入生チームをフィールドに送り出し、ジョージアのすでに惨澹たる傷口に塩を擦りこんだ。

41.

あなたはこれを信じますか

チューレーン大学の理事会の強硬な主張である石工が職を追われる。彼は新しい図書館の入口の上に次のエピグラフを彫んだ。

THE PEN IS MIGHTIER THAN THE SWORD (ペンは剣よりも強し)

理事会は、この石工が意図的に二つ目と三つ目の単語の間を縮めたと主張している。

42.

私は試しを受けている。キャンプ A は遂に逃走中のバスクの後釜をみつけたロバート（「ボビー」）・フレッドグレン、快活なカリフォルニア流の産業心理学者だ。籠一杯の八月の漿果さながら、「ボビー」には純粋な陽光がぎっしり詰まっているようだ而日焼けして、輝き、非の打ちどころなく若い彼は、ハーストが夢の中で思えがいている自画像そのものだ。この日焼けがわれらの幽明のホールの中で色あせていくのを眺めるのは楽しみとなるだろう。

だが、私が忌み嫌うのは彼の美貌ばかりではない。むしろ（それにも増して）、ディスクジョッキーと歯科医の間にあるような、彼の態度だ。DJ と同様、彼は微笑と口あたりのいいおしゃべりのかたまりで、次から次へと身震いするようなアンチ不安の歌を、青空と陽光のケーキの皿を繰り出してくる。歯科医と同様、こちらが悲鳴を上げようとも、本当は痛くないのだと言い張る。彼の不正直さはどんなに精力的な攻撃にも耐え、英雄的ともいえそうなほどだ。たとえば、きのうのこんなやりとり

ボビー：さあ、ぼくが始めといたら、ページをめくって問題にとりかかってください。始め。

私：頭痛がするんだけど。

ボビー：ルイ、きみは協力的じゃないね。きみが心を向けさえすれば見事にこのテストができるのはわかっているよ。

私：でもそのぼくの心が痛いんだよ！ ぼくは病気なんだ、こんちきしょうめ。こんな気分の悪いときは、おたくのくそつたれテストを受けなくていいんだ。それが決まりなんだよ。

ボビー：ぼくがきのう言ったことをおぼえているかい、ルイ 心の抑圧についてなんだけど？

私：あんたは、ぼくの病気は自分で思っているだけのものだよと言ったんだよ。

ボビー：おや、そのほうがいいよ！ さあ、始めといたら、ページをめくって問題にとりかかって。オーケー？（でっかく愛想のいいペプソデントの微笑を滙べて。）始め。

私：ファック・ユー。

ボビー：（ストップウォッチから眼をそらさずに。）もう一度やってみようじゃないか？ 始め。

43.

ポビーはサンタモニカに住んでいて、子供は二人、男の子と女の子だ。地元の活動には積極的で、民主党の郡支部の会計係を務めている。政治的には、自分では「強いていうならりべラル」だと思っている。現在の戦争については文句がある少なくとも「いわゆる中立国」に於る、わが国の細菌兵器攻撃を話し合いで終らせようという、ソ連側の提案を受け入れるべきだ、と思っている。しかし、良心的兵役忌避者は「行き過ぎ」だと考える。

彼はいい歯をしている。

彼は私の戯曲の中のゾンリッヒのまさに原型だ。時おり私は、自分の筆がこの愛想のいい怪物を産み出したのだという、穏やかならぬ気持になる。

44.

いかにも模範的な青年重役然としている(したがって)チームワークの信奉家たるポビーは、彼のモルモットたちのために、連帯して行なわなくてはならないテストを考案。きょう私はこの知的チェーン・ギャングを初体験した。白状すると、私はこれを他愛もなく楽しみ、ポビーのほうは、テレビのクイズ番組の司会者ごっこをする嬉しさに我を忘れていた。われわれの一人が格別に難解な質問に答えると、彼はやんやと囁きたてる「そいつは凄いよ、ルイ　　きみは断然、とてつもないことをやっているんだよ！　大変なものではありませんか、みなさん？」

かわいそうなスキパンスキーは、私と共にこうした競技をするよう拘束されているのだが、われわれのゲームをまるっきりエンジョイしていない。「彼はぼくを何だと思っているんですかね？」と私に愚痴をいった。「何か芸をする猿だとでも？」

クワットたちの中でのスキパンスキーの渾名はチータという。顔だちに、生憎なことにチンパンジーに似たところがあるのだ。

45.

スキパンスキーとまたテストを一ラウンド。ゆうべ、(44)を書いているときに気づいたのだが、私はこのクイズ番組が続いてほしいと大いに望んでいた。なぜか？　また、なぜ、私の心はほかの時にずっともっと生きいきしているというのに(本物の　事実の博物館　をジョージの放棄した劇場に建設しようと構想を練りはじめている。ドイツ語で幾つかの興味深い詩を作っている。レヴィ・ストロースに対するバロック的な議論を練っている)なぜ、強制的な競技に費す一日のうちのたった一時間のことを、ここでくどくどと論

じたりするのか？

答は単純なもの 私は孤独なのだ。休みの時だけが、ほかの連中と話のできる時間なのだ。

46.

きょう、ラウンドの合い間にスキパンスキーに、スキリマンとどんな仕事をしているのか訊いてみた。彼は、私をけむに巻けるだろうと思ったに違いない、テクノロジー用語を並べた曖昧な返事をした。私がこのサーブを手際よく返したところ、まもなくスキパンスキーは安心して活発に話すようになった。

そこから推測すると、スキリマンは地質学爆弾とでもいうようなものの可能性に注意を振向けているらしい。モホールで偶発的に起きた出来事に類するが、それよりもずっと大がかりなスケールでのものだ。地球から新たな山脈を盛上らせたがっているのだ。ファウスト的衝動というのは常に目の眩むような高みに向うものだ。

こんなエーデルワイスの小枝を摘む短い静かなひとときののち、私は実に穏やかに、そうした研究に関わってくる可能性のあるモラル上の問題にふれてみた。あらゆる大学院生は地殻変動の秘儀に入門を許される明らかな権利を有するものか？ スキパンスキーは凍りついてあわや緊張病に近い状態になった。

この失策を埋め合わせようとして、私はボビーを会話に引き込もうと、以前うちあけられた細菌兵器戦についての感想を引き合いに出した。地質学戦争のほうが、と試してみたら、どちらかというひどいもの、どちらかという無責任なものじゃないだろうか？ ボビーはなんともいえなかった。それは彼の与り知る分野ではないというわけだった。いずれにせよ、キャンプAにいるわれわれは純然たる研究にのみ関わっている。道義性に関ってくるのは知識の応用面であって、知識そのものではない、というような香油が、さらにたっぷり。しかしスキパンスキーは一向に雪融けの兆をみせなかった。私は間違ったボタンを押してしまったのだった、それこそ完全に。

それできょうのテストは終りだった。スキパンスキーがオフィスから出ていくと、ボビーはその温厚な性格の許す限り懲罰的になった。「ひどいことをしたもんだねえ」となじたのである。「きみはあのかわいそうな青年を完全に落ちこませてしまったんだよ」

「いや、ぼくはしないよ」

「したよ」

「おや、元気を出して」といいながら、私は彼の背中をぼんと叩いた。「あんたはいつも物事の暗いほうを見ているんだよ」

「わかってるんだ」と彼は鬱ぎこんで言った。

「そうしないよう努めているんだけど、時には、そうしないではいられなくなってしまうんだよ」

47.

スキパンスキーが昼食の時、私の一杯のテーブルにやってきた。「お邪魔でなければ……？」なんと控え目な態度！ まるで、もし私の邪魔になるとしたら、自らのあまりにもむきつけな存在を抹消するスイッチを押してしまいかねない様予だった。

「とんでもないよ、スキパンスキー。このごろは附合ってもらえるのを有難く思っているんだよ、きみたち新人は、まえにいた子羊の群れとは大違いで、群居性がないんだねえ」

これは単なる社交辞令以上のものだった。しばしば私は食事の際に一人きりになってしまう。きょうはスキパンスキーのほかに三名のタワットが食堂で食事をしていたが、人とは交わらず、数でもかぞえるように黙々と、飾り気のないピザを咀嚼していた。

「あなたはきっとぼくに軽蔑以外のことはおぼえていないでしょうね」とSは冷たいホウレンソウのスープを不幸せそうにスプーンでかきまわしながら切り出した。「きっとぼくには心がないと思ってらっしゃるんでしょうね」

「一緒にあのテストを受けたあとでかい？ とんでもない」

「ああ、テストですか！ いつでもテストではうまくやってきましたよ、ぼくのいおうとしたのはそんなことじゃないんです。でも、大学では、あなたのような人は……文科系の学生は……彼らは、理科系の勉強をしているというだけで、人のことを、まるで全然……ごくしゃくしゃになったスープをしずくの滴るスプーンの先で押しやった。

「魂がないみたいに思う、というのかい？」

彼はスープに眼を固定したまま頷いた。「でも、そんなことはないんです。ぼくらにだって感情はあるんです、ほかのみんなと同じように。ただ、たぶんぼくらはそれをそんなに明らかに示さないだけのことなんです。あなたのような経歴があれば、それは気軽に、良心だとか……そんなようなことを云々できるでしょう。誰もあなたに、卒業時に、年に\$ 25,000を申し出たりはしないでしょう」

「実をいうと、ぼくの元の同級生で、詩人が絵かきになるはずだったのが、広告やテレビの仕事でその倍も稼いでいる奴を大勢知っているよ。近頃では万人向けの一種の売節とでもいえるものがある。何はともあれ、組合の指導者にはなれるよ」

「うーん。何を召し上がってるんですか？」

と彼は私の皿を指さしながらたずねた。

「Truite braisée au Pupilin」

彼は黒い制服のウェイターに合図した。「ぼくにもそれを少々」

「きみを誘惑したのが本当に金銭だったとは想像もしてみなかったんだがね」といいながら私は彼にシャブリを少し注いだ。

「ぼくは飲みません。ええ、ぼくも本当に金銭じゃなかったんじゃないかと思います」

「学校での専攻は何だったんだい、スキパンスキー？ 生物物理学かな？ 一度でも、その学科を、それ自体のために、好夢になったことはなかったかい？」

彼は、ことわったワインのグラスの半分をぐっとあけた。「ほかの何よりもね、ええ！

この世の中のほかの何よりも好きですよ。時どき、理解できなくなるんです。正直な話、理解できないんです、なぜみんながぼくと同じように思わないのか。時には、それがひどく強くなって、ぼくには……ぼくにはまったく……」

「ぼくも同じように思うよ、ただし、詩についてだがね。あらゆる芸術についてなんだが、中でもとりわけ詩についてはね」

「そして、人間のことも？」

「人間はその次だね」

「そうすると、奥さんのこともですか？」

「そういうことになれば、ぼく自身のことですらね。それで、きみは今、不思議に思っているわけだね、ぼくが、ぼくらがそんなふう感じているのに、いったいどうしてぼくが厚かましくもきみに対して道義を云々できるのかと」

「ええ」

「それは、ぼくがまさにそのことについて 感情について語っているからだよ。倫理というのは、当人が現にやっていることに関ってくるものなのだよ。誘惑をおぼえるのと、それを実際に行なうのとは、別物だよ」

「だったら、芸術は罪なんですか？ あるいは、科学は？」

「過剰な愛好というのは、神そのひとの愛に及ばぬ限りは、みんな罪深いものなんだ。ダンテの地獄には、デイス以上に、好ましいものをそんなふうちょっと愛しすぎた人がわんさといるよ」

スキパンスキーは赤くなった。「こんなことをいっても勘弁していただけたら、サケッティさん、ぼくは神を信じていないんです」

「ぼくだって同じさ。ただ、しばらくの間、信じていたことがあってね、だから彼がぼくの隠喩に忍びこんできたら、勘弁してくれたまえ」

スキパンスキーはくすっと笑った、眼が揺らぎながらテーブルから上がって、一瞬、私の眼と会い、それから、ちょうどウェイターが運んできた鱈のほうへと退いた。それだけで、私にとっては、彼が鉤にかかったのだと知るには充分だった。

イエズス会士にならなかったことで、どれだけのキャリアを私は逸したことが。公然た

る誘惑は別にして、この折伏ほど心をうっとりさせるゲームはほかにはない。

追記

私はこの日の大半を闇の中で音楽を聴いて過ごさざるをえなかった。眼が……気まぐれな肉体をどんなに私が恨んでいることか!

48.

自発的に、彼がきょう私の薄暗い部屋に来て、身の上ばなしを聞かせてくれた。そのすべてを語るのには実はじめてのことのような印象があった。これまでは誰も、そんなことには関心を示さなかったのではないかと思う。実に面白味のない話だ。彼の押入れの中のネクタイを一目みれば、それだけで推測できる、モノクロームの生活そのままに、あまりにも一本調子なのだ。

両親が離婚した、その子供であるSの青春は、不連続で一杯だった。同じ学校に二年と続けて通うことは滅多になかった。申し分なくよく出来たけれども、並はずれた不運によって、いつもクラスで二番目によく出来る子供、いつも二位だった。「ぼくは」と彼はいった、「生来の次席なんです」ライバルたちが苦もなく手に入れるものを必死に得ようとして、妄執的なまでに競争に打ちこむようになった。そんな人間に、友情などありえない。停戦が前提になるからだ。Sは自分が青春を幻影の偶像のために犠牲にしたことを認識している。青春を空費してしまった今は、人生をそのために犠牲にしている。

彼は二十四だが、理科系のがり勉屋に共通のあの永遠の若者の相貌をしている。貧弱なひよろひよろした肉体、さえない顔、にきび、クルーカットというにはちょっと長すぎ、横に寝るには短すぎる髪。落し卵のような眼はメランコリ!を湛えるが同情を誘わず、たぶんこれはマクナマラ・タイプの眼鏡のせいだろう。話しはじめる前に唇をすぼめるとりすました女々しい癖。驚くには当たらないが、サヴォナローラと同様、見栄のいいものに憤慨する。強さ、美、健康、さらにはシンメトリーさえも、気にさわる。はかのクワット連中がテレビでスポーツを観るとき、スキパンスキーは部屋を去る。フレッドスキンのように、見栄のよさ。そのもののような手合いはSの中に実に激情的な屈辱感と羨望をかきたてるため、彼はたちまち緊張病に向ってしまい、これはどんなものであれ強い感情をいただいた時の第一の反応となる。

(思い出されるのは私自身の恨みがましいフレッドグレン描写。私が素描しているのはスキパンスキーの特徴なのか、それとも私自身のものなのか、と認しみはじめてしまう。彼は、ますます私自身の悪夢のイメージ、ずっと昔、高校生の頃、「ドノヴァンの脳髄」とモルデカイに渾名されたあのルイス・サケッティ像に近づいてくる。)

それを埋め合わせる特色はないのか？ あのウイットかな、まあ。しかし、だめだ、というのは、私はしばしば彼のいうことに笑わざるオエなかったものの、彼はいつも変わらず自分のジョークの対象で時にははなはだ贅しく、時にはひそやかな推測によってそのために彼のウイットはたちまちその沈黙と同様に悲痛なものとなってしまうのだから。あれほど執拗な白己中傷には、どこか厭しいナルシスト的なところがある。自漬、と呼んだほうがよくはないか？

そんな人間の悲哀は、その最大の（そして或る人にとっては抵抗しがたい）魅力が、彼らがただもう全く人好きのしないことだという点であるということだ。こんな世間のつまはじきの人間の唇こそ、聖者たちが接吻するようにしなくてはならないものだ。

49.

輪転機をとめる！ 埋め合わせる特色を発見したぞ！

彼がきょう告白したのだ、恰もそう認めることを恥じるかのように 「ぼくは音楽が好きです」彼は、自分の自由時間のすべてが、言及に価するこの熱中に捧げられているという事実に気づかぬまま、身の上のあらゆることを物語ってきていた。嗜好（メシアン、プーレ、シュトックハウゼン et al）の範囲内では、Sはよく知っているし識別力もあるが、ただ（いかにも彼らしく）それらの作品を体験したのはすべて録音版を通じてのこと。一度もなまのコンサートやオペラに行ったことがないのだ！ スキパンスキーはわれわれ社会的動物の一員ではないよ、ほんと！ ところが私が *Et expecto resurrectionem mortuorum* に馴染みがないと認めると、なんとも伝道者的な熱情を示して、それを聴かせに私をライブラリーへひきずっていったのである。

そしてこの曲はなんと素晴らしい、耳の新たな効用であることか！ *Et expecto* のあと、*Couleurs de la Cité Celeste* と *Chronchromie* と *ept Hailais* を聞いた。どこで私は生気に漲ったことがあるか？（パイロイトで、そう、あそこでなら。）メシアンはジョイスが文学にとってそうであったように音楽にとって決定的だ。ただこれだけをいわせてもらおうわお。

（こう書いたのは私だったのか 音楽は、たかだか、審美上のスープの如きものにすぎない？ メシアンはまさに感謝祭の正餐だ。）

一方、折伏の営みも進捗。Sは、マルローが *Et expecto* を二度の世界大戦の死者を祀るために製作依頼したことに言及、この曲は実にそれにそぐわしい作品であるため、何を記念しているかに触れずにこれを論じるのは不都合となる。大半の同時代人と同様、Sの歴史に対する態度も、やきもきしたじれったさ。その賂しい非合理性には戒めとしての力はまるでないわけだ。だが、そこまで完璧な事なかれ主義者たりつづけることは、ことに血

管の中にパリジンの黄金があるとあっては、容易でない。

50.

ハーストから私に会いたい旨のメモ。所定の時刻に行ってみると、とりこみ中。控えの間には、興味の持てそうなものというヴァレリーが一冊あるきり、これを私は拾い読みし陸じめた。すぐに、下線の施された次のような件りにぶつかった

無比たらんとする大望に押し流され、全能への熱情に導かれて、大いなる精神を持つ男は、あらゆる創造、あらゆる営為、さらには自らの高遠なる企図すらも超えた。一方、それと同時に、おのれに対するいっさいの思いやりと、おのれの願ひに対するいっさいの特恵を棄てた。一瞬にして彼はおのれの個性を犠牲に供する……ここに至るまでは、その白負が精神を導いてきた、ここに至って自負は費消される……(精神は)……自らを不如意で裸で、対象なき力であるという無上の貧窮へと還元されていると知覚する……彼(天才)は本能なしに、殆ど心像もなく存在する、そして彼はもはや目的を持たない、彼に似るものは無だ。

この一節の傍に、誰かが余白になぐり書きしていた 「無上の天才は遂に人間であることをやめた」

ハーストが私に会えるようになった時、スキリマンではないかと思いながら、この本を控えの間に置いていった人を知らないかと訊いてみた、彼は知らず、図書館で調べてみればどうかといった。そうしてみた。最後にこの本を借り出したのはモルデカイだった。おそまきながら彼の筆跡だと認められた。

気の毒なモルデカイ！ 自分がもう人類の一部ではないと感じるという恐怖以上に恐ろしいことが 或は、人間的なことが またとあろうか？

悲惨……ここでなされていることの表現を絶する悲惨さ、

51.

ハーストには、話をして二、三分すぎさないかという以上に面会を求める差迫った用件はなかった。彼もまた、どうやら、孤独なのだ。アイヒマンはおそらくユダヤ人移住局の執務室で実に「孤独」だったろう。彼のとりとめもないおしゃべりに耳を傾けながら、私ははたしてハーストがその罪の審判を受ける ドまで長生きできるだろうかと思った。彼がアイヒマンのおぞましいガラス箱の内にある姿を想像しようとしてみた。

バスクはなおも逃走中。よくやるね、

52.

スキパンスキーが物語る、スキリマンにまつわる直叙の逸話、それは六年前、NSAの後援のもと、MITで彼のもとで夏期講習を受けていた時のこと。

講座は核テクノロジーの概観で、ある講義の際にスキリマンが、学者仲間内で「ドラゴンの尻尾をくすぐる」として知られているプロセスを実演してみせた。つまり、二つの放射性物質の塊をじわじわと接近させるわけで、そうすれば或る一点で、実際はそこまでは行かなかったが、臨界質量に達するはずなのである。Sはこの剃刀の刃渡りのような作業でスキリマンがみるからに楽しんでいた様子を詳しく語った。デモンストレーションの途中でスキリマンは、いかにも偶発的な事故のように、二つの塊を近づけあわせすぎてしまった。ガイガー計数管がヒステリーを起し、クラス中が出口へ殺到したが、保安警備員は誰も外に出させてくれない。スキリマンは彼ら全員が致死量の放射能を浴びたと宣告した。学生のうち二人がその場にくずれ落ちた。これはすべていたずらだった。塊は放射物質ではなく、ガイガー・カウンターには仕掛けがしてあったのだ。

この痛快な悪戯はNSAの心理学者たちの協力の下に手配されていて、彼らは本物の「パニック状況」のもとでの学生たちの反応をテストしたがついていたのである。これは、心理学がわれらの時代の異端審問になったという私のテーゼを支持するものだ。

このジョークを契機として、スキパンスキーはスキリマンの下で働きはじめることになった。彼は、いっさいの狼狽、悲嘆、恐怖、不安の徴候を「実験」に対する良性の好奇心以外の何ものをも、示さなかったことによって、NSAのテストに合格したのだった。これ以上に根強い平静さは死体にしか発揮できなかつたろう。

53.

太鼓腹のスパイダーマンと一戦、これでおそらく私は打負かされたのではあるまいか。

スキパンスキーが部屋に来て、こうたずねた(とうとう好奇心のほうを上回って)なぜそこまでドン・キホーテのように、兵役忌避者として投獄されていると言い張るのか、簡単に(年齢、体重、また妻帯という状況も考慮に入れた上で)こっそりと軍隊から逃げ出せるだろうに。機会を与えられてこの話題に到達しない人間には会ったことがない。(聖人たることの些細な不便もまったく不本意ながら、告発者となって、会う相手の誰にも疾しさを呼び起してしまうことだ。)

スキリマンが 岩眼 と 忠僕 にエスコートされてご入来。「お邪魔でなければいいんだが?」と愛想よく問う。「いいえ、ちっとも」と私は答えた。「どうぞお楽に」

スキパンスキーが立ちあがった。「失礼しました。まさか、あなたがこんなに」

「かけたまえ、チータ」とスキリマンは無無をいわせぬ口調でいった。「私が来たのはきみを連れ去るためではなくて、きみやきみの新しい友人とおしゃべりするためだ。シンポジウムというわけだ。われわれの遊び場の管理人、ハースト氏は、私がもっとこちらと附合すべきだ、彼にオブザーヴァとしての特殊な才能を発揮するチャンスが与えられねばならん、と唱えとったよ。私は、どちらかというとなをないがしろにしてきたのではないか、サケッティ氏に十全の信を置いていなかったのではないかと恐れる、というもきみが、チータ、私に気づかせてくれたように　彼は危険でなくもないんでね」

私は肩をすくめた。「カエサルからお誉めにあずかり……」

スキパンスキーはなおも優柔不断に席の上に腰を浮かせていた。「ええ、その、いずれにしましても、あなたにぼくが必要になるとは」

「奇妙なことだが、必要なだよ。だから、かけたまえ」

スキパンスキーは腰をおろした。二名の衛守は扉の両側に対称形に身を配した。スキリマンは私の向いの席に着き、資格に疑義のある魂がその間に。

「お話のつづきですが？」

54.

情景を再構築していると、すぐ身のまわりの世界、タイプライターと散らかったテーブルとパリンブセストの壁の世界が、リズムカルに縮んだり膨れたりする、いまは要するに有界的に、いまは無限定にど。眼が痛い。胸腺と脳が、まるで悪い食べ物に当たったけれどもまだ嘔くのは抑えられているとでもいったふうに、むかついてくる。

ストイックだが、ちょっぴり泣き言をいわずにいられるほど、ちょっぴり同情を求めずにいられるほどストイックではない。

がんばれ、サケッティ、がんばるんだ!(スキリマンもきょうは加減が悪かった。普段はあんなにも訥弁な手が悪寒に震えていた。あごの下の「ほくろ」がすっかり紫になり、咳をすると、屈か、いたんだマヨネーズのような、硫黄くさい匂いを放つ。自分の腐敗の徴候に、まるでそれらがすべて、彼が自らの肉体の反逆に対して申し立てている訴訟の眼目ででもあるかのように、ひねくれたよろこびをおぼえている。)

55.

彼のモノローグ。

「さあ、さあ　われわれに教訓を垂れてくれよ、サケッティ。そんな黙んまりは、きみ

らしくないぞ。善くするのがなぜ善いのか言ってくれ。逆説で徳に導いてくれそれとも、天国にか。だめかね？ 微笑じゃ答にならんよ。私はそれを買わんね。微笑も、逆説も、美德も買わんよ、それにまた天国もね。そんなものはみんな地獄へ墮ちろだ。だが、地獄は買うよ。少なくとも、地獄があると信じることは可能だ、地獄とは、事物の中心にあるあの有名な惨たらしい穴のことだよ。きみは疑わしそうだが、それはあるんだよ、きみ、どうしようもなく明白に見えているじゃないか。別なふうにいてみようか。地獄とは、熱力学の第二法則のことだ。うんと長生きすることを悲惨にする、あの凍りついた永遠の方程式のことだよ。普遍的な 無秩序 だよ、あらゆるものがばらばらになってしまって、どこへも行きようがない。そして地獄はそれ以上のものだ。地獄はわれわれが作れるものなのだ。それこそが、最終的に、その魅力なんだよ。

きみは私を軽薄だと思っているね、サケッティ。唇を歪めるが、答えない。そんなことをしようとするのは無分別だと心得ているんじゃないのか？ なぜなら、正直であろうとすれば私の側につくことになってしまうからだ。きみはそれを避けるが、それはきみの顔前に迫るルイ二世の勝利は近いぞ。

ああ、そうとも、きみの日誌を読んだのだよ。ほんの一時間前にばらばらと拾い読みした。ほかのどこでこんな調子のいい弁舌を手に入れたと思うんだね？ チータにも読ませるべき箇所があるよ。そうすれば彼もあんな嘆かわしい個性を改良しようとするかもしれないんでね。面と向ってだと、あれほど彼に対して軽蔑的になれるかどうか疑問だね。なあ、おまえさんのようなつまはじきの人間の唇こそ、ルイスのような聖者たちが接吻するようにしなくてはならないものだそうぞ。いやはや、実になんともフロイト的な隠喩だよ！

だが、われわれはみんな人間なんじゃないのかね？ 神でさえも人間的だ、われらの神学者たちが発見して無念に思ったようにね。神について話してくれよ、サケッティ、きみがもう信じていないと公言しているあの神について。価値について、そしてなぜわれわれが幾らか買うべきなのか、話してくれ。われわれは、チータも私も二人とも、価値がかなり不足しているんでね。どうも私はそいつを建築学の根本規準のように、経済学の法則のように、実に独断的だと思いがちなんだよ。これが価値に関する私の問題でね。独断的というか、もっと悪いことには、利己的だとね。つまりだ、私だって食べるのは好きだがね、だからといってピーナツバターを不滅の、不朽のパンテオンに奉獻する理由にはならんよ、神かけて！ きみはピーナツバターを嘲笑するがね、私はきみという人間を知っているよ、サケッティ。きみは別のベルの音に唾を湧かせるのさ。パテ・フォワグラ、トリュイト・ブレーゼ、トリュフ。きみはフランスの価値のほうがお好きだが、腸まで行った頃にはみんな同じ乳糜になっているんだよ。

私に話してくれよ、サケッティ。何か永続的な価値を示してくれ。きみの流童の神の玉座には何の光輝も残されてはいないのかね？ 力はどうか？ 知は？ 愛は？ さだめし、この古い三幅対のうちひとつづらいは、声を大にしてわれわれに語る値打があるんじゃないのか？

実をいうと、力はわれわれモラリストにとっては些か問題がある、些か露骨でね。もっと父性的な相での神と同じく、或は爆弾と同じように、力はどちらかという非情なものとなる傾向がある。力は他の価値によって定められる（そしていわば困り込まれる）必要がある。たとえば？ ルイス、なぜ黙りこくっているんだ？

知だ 知についてはどうかね？ ああ、どうやら知も避けて通りたい様子だな。この林檎には些か食傷、というんじゃないか？ となると、いよいよ落ちつく先は 愛 だな、ほかの誰かのピーナツバターになりたいというあの欲求だよ。いかにエゴは切望することか、その狭い境界を打ち破ってまさに万人の上に薄いペーストとなって拡大していきたいと。きみは私が実に一般論を語っているというだろうね。これがいつの場合にも最も賢明なのだよ、愛 について語る時には個々の例を避けることがね、それらは利己的なものに思えがちなものだから。たとえば、人が自分の母親に対して感じる愛情がある人間の愛のまさに範例となるものだが、それを考える際には、おっぱいに向けて唇がすぼむを感じずにはいられない。それから、人が自分の妻に対して感じる愛情があるが、これもやはり、パブロフ的な「報酬だ!」との講りを免れない。といっても、ご褒美はもう、ピーナツバターじゃないがね。こういうのよりももっと広がりのある愛もあるが、最も高尚なもの、最も利他的なものでさえ、その根はわれわれのあまりにも人間的な本性の中にあるように思える。天なる花婿がテレジアの上に降臨した時の彼女の、修道尼院の壁の彼方での仇惚を、考えてもみるがいい。ああ、フロイトが書きさえしなかったなら、われわれはみんな、どんなにかもっと幸せでいられるだろう！ 何か愛の弁護をしてやってくれ

さあ、サケッティ。手遅れにならないうちに。

価値！ こんなものがきみの価値か—どれひとつとして、われわれの足を人生の踏み車の上にしっかりと保っておいては、歯車をそれらにとって実に高貴なあの日々の循環に勤しませておいてはくれない 消化管、日々と夜々の循環する世界、鶏から卵、卵かヤリヤヤら鶏、鶏から卵への閉回路に。正直な話、時おり抜け出したくならないか？

56.

彼のモノローグ、つづき。

「神が遂に死んで、それで結構。彼はあんなやかまし屋だったんだ。古典学者の中には、ミルトンの共感が彼の悪鬼に向けられていて、神に寄せられなかったことを奇異に思うと

称している連中がいるが、とやかくいうほどのことはない。福音書の書き手でさえ、その火を天国よりも地獄から拝借していることのほうが多いんだ。彼はきっとそちらのほうにずっと細心の注意を向けているよ。そのほうが、適切だとはいわないまでも、うんと興味深いというまでのことさ。地獄のほうが、われわれの知る事実に近いんだよ。

われわれの正直さをもうちょいとばかり押し進めようじゃないか。地獄は、単に天国よりもまだというだけではない。来世について(つまり、それに向って努力するだけの値打のある目標について)人間の想像力が考案できた唯一の明瞭な概念なのだ。エジプト人、ギリシャ人、ローマ人たちは、われわれの文明を創建し、そこに彼らの神々を住ませ、そしてその冥界の知恵のもとに、足の下の天国を形造った。一部の異端的なユダヤ人がその文明を承継いで、その神々を悪霊に変え、天国を地獄と呼んだ。ああ、彼らは屋根裏のどこかに新たな天国があると装おうとしたが、それはなんとも説得力のない欺瞞だった、われわれが屋根裏への階段をみつけた今、その住むものもなく無窮の虚空のどこであれ、好きなところをぶんぶん飛びまわれる今、ゲームは終わっているのだ、完全に、あの天国についてはね。ヴァチカンが今世紀の末まで生き延びるかどうかは疑問だね、といっても決して無知の力を過小評価すべきではないがね。ああ、ヴァチカンの無知じゃないよ、滅相もない!彼らはカードがどう仕組まれているか、いつだって知っていたさ。

天国はもう沢山、神などもう沢山だ! どっちも存在しやしない。われわれがいま聞きたいのは地獄と悪魔のことだ。力や知や愛じゃない。無力と無知と憎悪、サタンの三つの顔だ。私の率直さに驚いているかね? 私が手の内をあかすと思うかね?全然ちがうね。すべての価値はいつのまにか融けて正反対のものになってしまう、ちょっと出来るヘーゲル学徒なら誰でも知っているよ。戦争は平和、無知は強み、そして自由は隷属だ。おまけに、愛は憎悪だとね、フロイトがあますところなく証明してみせたように。知識についていえば、われらの時代のスキャンダルだよ、哲学が削ぎけずられて骨ばかりの認識論に、それからもっと貧相なアグノイオロジーにされてしまったとは。私はきみの知らない単語をみつけたんじゃないかな、ルイス? アグノイオロジーとは無知の哲学、哲学者のための哲学のことさ。

無力については、きみに、チータ、語ってもらってはどうか? おや、こいつの赤面ぶりを見てくれよ。どんなに彼が私を憎んでいるか、その憎悪を表現するのにどんなに力がないか。むくれるなよ、チータこれが、根底に於て、われわれの共通の状況なのだ。遂に、あらゆる事物の窮極に於て、各原子はそれのみで存在するのだ。冷たく、不動で、孤立して、他の微粒子と接触せず、いかなるモーメントをも分与せずに、独立市民というわけだな。

そしてこいつはなんとも恐い宿命じゃないかね、まったく? かの大いなる日来たら

ば、宇宙はうんと秩序あるものとなるだろうね、ごく控え目にいって。万物が均質化され等距離にあって、静穏になるのだよ。これは私に死を想起させ、私はこれが気にしている。

ところで、リストに含めるのを忘れていた価値がある死だよ、なるほど、われわれがあつたうんざりする古い日常から脱出するのに役立つものがあるよ。存在を信じるのが困難でない来世があるよ。

それこそ、私がきみに、チータ、そしてきみにも、サケッティ、さしだす価値だよ、受けとる度胸があればのことだがね。死だよ！ きみ自身の個々の、そしてことによると取るに足りない死にすぎないものではなくて、宇宙的な次元での死だ。ああ、たぶん時の終りの熱死じゃないな そいつは注文が多すぎるよ それでもかなりその線に近い死だよ。

終らせるのだよ、サケッティ、くそつたれな全人類をね。意見はどうだね、きみ これを買うかね？

それとも、私の提案は唐突すぎますかね？ 百科事典セットのご購入をお考えになったことはおありですか、そうですか？ まあ、時間をかけることですね、得心のいくまで。一週間後にまたお伺いしましょうか、奥さんととっくりお話し合いになったあとで。

しかし、結びにいわせてくれ、ほんのちょっぴりでもおのれを知る者なら誰しも、自分が仲間はずれになることほど強く願っているものはほかにはないと、知っているものだ、存分に仲間はずれになることをね。われわれは、フロイトの雄弁なことばでいえば、死者たらんと願っているのだよ。

或は、きみ自身のものを引用すれば おお悪の傀儡よ、滅却せよ。すべてを滅却せよ、そしてわれらを。

エキサイティングなのはね、ほら、それがまったく可能だということだ。完全に神の如き力を持つ兵器を作ることが可能なのだよ。爆竹でトマトを破裂させるのに使った方法で、この小さな世界をこっぴ微塵に吹き飛ばすことができるのだよ。われわれとしては、兵器を作ってそれをわれらの親愛なる諸政府に与えれば、それだけでいい。そこから先は、彼らが引受けてくれると、あてにしていいよ。

われわれに手を貸すといってくれないか？ せめても、精神的な支援を与えてくれるだけでも？

おや まだ黙んまりかね？ まったく話相手として面白くない人間だな、サケッティ、さっぱりだよ。彼の何がきみを楽しませたのか、疑問に思うよ、チータ。さてと、きみの支度ができているなら。何か為すべき仕事があると私は信じるんだがね」

57.

彼らは衛守たちを従えて、連れ立って部屋を去ったが、スキリマンは駄目押しの捨て台詞のために引返してこずにはいられなかった。「しおれるなよ、ルイス。私はきみを打負かして当然だったのだよ。なぜなら、なにしろ私には宇宙が味方についているんだからね」

スキパンスキーが居させて心を乱すおそれもないので、こころおきなくしっぺ返ししてやった。「それぞれまさしく通俗というやつだと思いますがね」

彼はしょげていたようだ、というのは私の沈黙をあてにして来たのだから。不意に彼は大魔王ではまったくなくなって、ただの中年の、おつむの薄い、みすぼらしい、第一級とはちょっといい難い管理職になっていた。

58.

何たる好都合か、結局のところ、われらの敵を哀れむことは。おかげでわれわれは、憎悪という、より大きな労が省ける。

労……あまりに大きな労だ、こう言うことさえも、「痛い」と。

59.

私は未恢復だ。対決の時に無力であったことで、今、自分を責める。沈黙は、いつも神には実によく資したものながら、畢竟、わが籠手にしてわが盾では、なかったのだ。それが痛い。

だが、どんな返答をすればよかったというのか？ スキリマンは、そうかもしれないとわれわれみんなが恐れていることを、思い切って言ったのであり、キリストでさえも、最終的には、誘惑者 に対して、これをいうより以上の論法を持たなかったのだ、去れ！

ああ、サケッティ、なんとおまえは常にそこに帰りつくことが。キリストの摸倣 に。

60.

私は低い、低い。

病の水が土手のまわりに寄せてくる。もう砂囊はない。私は、わが家の屋根の上から、洪水を待つ無人の街路を眺める。

(お助けください、ああ紳様。水は私の魂にも入りこんできているのですから。私は深

い泥沼に溺れ、そこにはまったく立ってられないのです　私は深い水中に入りこんで、そこでは洪水が私の上に溢れるのです。)

私はいま一度みつめる、医務室で、水のグラスを。今では始終、鎮痛ピルに頼りきりだ。誰も私を訪ねてこない。

61.

さらに低し。

一度には一時間しか読めず、そのあとは活字が眼を蝕しはじめる。ハーストが立寄って(私の寂しい訴えの故か?)そこで私は、誰か読んで聞かせてくれる相手を指名するわけにはいかないかと訊いてみた、考えてみようと彼はいった。

62.

ミルトンよ、汝、この時間に生きてあるべし。或は、よりよくは、汝が三人の娘たちこそ。哀れな　忠僕　は韻文が読めず、他の言語を知らず、長い単語に立往生。遂に私は彼にウイトゲンシュタインを読ませはじめた。彼の困惑した渋々ながらの伝達と神託的な音節とのコントラストには、一種の音楽がある。

私の持っている版はモルデカイの書棚から出たもので、彼の手になる注解つき。二度に一度は、その注釈が理解できない。

63.

私はよくなっているのか、悪くなっているのか?　どんな徴候で解釈したものか、もう殆どわからない。再び病床を離れてはいるものの、なお薬浸りなのだ。　忠僕　は私の指示の下、私の構想になる　事実の博物館　建設に従事。

マグナム・オパスの設備が、まだ、放棄された劇場にあった。ハーストはそれを別室に移させたが、その取扱いに際してはこの上もなく細心のデリカシーを払うよう強く求めた。迷信がわれわれを振りまわすのだ、死んだものさえも。

64.

追補

オーガスタス・ジャックス師は病名不明だが急性の病気のため、ホワイトハウス訪問を延期しなくてはならなくなった。

65.

最近の掘出し物

著名なイギリス系アメリカ詩人、リー・ハーウッドが、自らの考案になる言語で書かれた作品を公表しはじめた。この「新語」を検討した言語学者たちは、自らの言語が本質的に、口語であれ文語であれ、他のいかなる言語から派生したものでもないとの、ハーウッドの主張を正当なものと実証している。ハーウッドは、アリゾナ州ツーソンのはずれにユートピア的なコミュニティを設立して、そこで彼の言語が話され、「その周囲に、それにそぐわしい文化が発達する」ことのできるようにすべく、企図している。すでに十二の州から三百名の応募者がこのプロジェクトに参加している。

66.

招待状を発送。博物館のオープンは明朝十一時の予定。招待状を出すのは、ハーストがすでに私に、全員が来ると請け合っていたのだから、余計な仕事だった。

67.

博物館は開館し、そして閉館した。十二分の証しがあって、私の目的は達成された。

集積された加数から最初に総和を得たのはスキリマンだった。彼は、殺人犯/たちが思いやり深くも新聞のために提供した両ヴェイジー殺害の写真の前で、急に咳の発作を起した。呼吸を回復すると、彼は怒って私にくっついてかかった 「いつから知っていたんだ、サケッティ？」

「どれも厳密に分類された情報ではなかったんですよ、博士、みんな新聞から出たものなんです」もちろん、スキパンスキーを通じて、スキリマンが新聞の読者ではないということも確かめてあった。

今では、大半のクワットたちにも事情が呑みこめはじめていた。ひそひそ話をしながら私たちのまわりを集ってきた。ハーストは、災いの前兆に直面して、なすすべもなく、解説者を求めてあたりを見まわしていた。

スキリマンは目にみえて気の転倒を緩和し、礼儀正しさの方向へ舵をとっていた。「これらの切抜の最初のものの日付がいつなのか、伺えませんか？」

「アドリエンヌ・レーヴェルキューンの スペーシャル・フーガ の初演は八月三〇日です。けれども、彼女の件はかなり問題のあるものです。私がこれの展出に踏切ったのは、アスペンが非常に近いからで、また彼女がきっとレスビアンだからです」

「そういうことか！」と彼は、再びたまらず怒りだして言った。「なんと私は阿呆だったのか」

「あなたもですか？」と私は誠心よりたずねた。これを彼は愉快には受けとらなかった。彼がほんのわずかでも自分の肉体と懇意にしていたなら、きっと私を殴っていたはずだ。

「きみたち二人は何について話しているのかね？」とハーストが、クワットたちの間を掻き分けて進みながらたずねた。「これは何なのだ？ なぜ、きみたちはみんな、こんな……ニュースの切抜の束をめぐって昂奮しているんだ？ あれは恐るべき殺人だったよ、私もそれは認めるが、いまにきっと、警察が犯人を捕まえるはずだ。そうだろう？ きみたちは犯人が誰なのか、見当をつけたのかね？」

「あなたが犯人なんですよ、HH。ぼくがこの何か月もの間、説明しようとしてきたようにね。ジョージ・ワグナーの殺害の犯人、モルデカイの、ミードの、そしてまもなくぼくの、ね」

「ばかな、ルイス！」彼は精神的支援を求めてスキリマンのほうに振向いた。「彼は気が狂ったんだ、みんな、末期に向うと発狂するようだ」

「その場合には、早急に世界が彼に追いついているでしょうね」と、クワットたちのうちで大胆なほうの一人、ワトソンが口を挟んだ。「なぜなら、呪われた全世界がなにはともあれ、全国があなたのパリジに感染してしまっているのは、確実なことのよう思えますんでね」

「不可能だ！」とハーストはなおも揺るぎない確信をもって宣告した。「絶対に不可能だ。われわれのセキュリティ体制は……」そして今、それはさしものハーストにも思い及んだ。「彼女が？」

「いかにも」と私はいった。「エイミー・バスクですよ。ええ、疑間の余地なく彼女です」彼は神経質に笑った。「まさか、老獺ジークフリートが？ きみは誰かが彼女の蕾を散らせたなどというつもりじゃないだろうね？ 笑わせないでくれよ！」

「彼女の蕾でないとして」とスキリマンがいった、「それだと、どうやらジークフリート要塞線は包囲されて背面から攻撃されたということになりそうですな」

ハーストの皺のネットワークが締まって当惑の篩に変わった。それから、理解と同時に、嫌悪が来た。「しかし、いったい誰が……私は真面目に言っているんだぞ！」

私は肩をすくめた。「われわれの誰でも可能性はありましたよ、と思いたすがね。全員が彼女のオフィスで個人授業を受けましたからね、ぼくじゃなかったのは請け合えますよ。いちばん可能性のあるのは、モルデカイでしょうね。おぼえていらっしゃるかどうか、彼の短中篇のヒロインはあの名医にもとづくものでしたよ。また、あの小説の中に、ヒロインのルクレチアがオカマを掘られていることを仄めかす箇所がひとつだけありまし

てね、とはいってもこの点の疑惑が、まあ、後から眺めてのものにすぎないってことは認めますけれど」

「そうか、あの畜生め！ 私はあの黒んぼおかま野郎を実の息子のように信頼していたのに！」

68.

これには、個人的な裏切り以上のものが関わっているのだと、ハーストが認識できるようになるまで、しばらくかかった。その間にスキリマンは群れに紛れてこっそりとその揚を離れ、事の重大な先行きを思案しにいった。彼の最初の、そして最も強い反応は、証かされたという思いだったはずだと確信する あんなにも自分自身の手で世界をおしまいにしてしまいがっていたのだ。

69.

ハーストが私に明確な説明を要求。私はメモ帳類と、疫病の進展の度合に関するさまざまな観測を示した。

バスクのアドヴェンチュアが、キャンプを去った(六月二十二日)直後に始まったものと仮定すれば、彼女の播いた種子の最初の果実は、八月の半ば乃至は末頃までには姿をみせはじめていたでしょう。進展の度合についての私の見積りはキンゼイの新版にもとづくもので、そのため、おそらく保守主義の方向に誤りがあるでしょう。乱交(および性病)が同性愛者の間ではより一般的だという事実は、これまた同様に、このプロセスを加速する傾向があるでしょうし、ことにその初期の段階では、急速な伝播が決定的ですから、なおさらでしょう、私の博物館にある諸々の事実は、同性愛が最も盛んなあれらの領域 芸術、スポーツ、ファッション、宗教、そして性犯罪の領域に於る、「大躍進」の優勢を示したもののなのです。

あと二か月以内に、成年人口の30乃至55パーセントが、天才への急上昇の途上にあることになりましょう。政府が直ちにこの件に関するすべての事実を明らかにしない限りは、です。性病に対する、明確さに欠ける警告ぐらいでは、乱交に対して、三十年間、軍の訓練映画がそうであったのと同様、効果はないでしょう。それ以下でしょうね、なぜなら当節、われわれはコンドームよりもむしろペニシリンに信を置くようになってきているのですから。ペニシリンは、悲しい哉、パリジンに対しては何の効果もないのです。

70.

ハーストは今このすべてを理解していることと思う。危険を完全に明らかにする以外には、何をしても何の効果も挙げ得ないのだ。すでに、私のグラフによれば、職業的娼婦の半数が感染している。疫病は幾何級数的に蔓延するであろう。

71.

医務室へ戻る問合いが縮ってきている。心は、一方、わが道を行く。

「私は何について話していたのか？ ああ、そうだ」

私は、誰がこれほどまでに起りそうもないロマンスを創始したのか、思いめぐらせて楽しんでいるまた、なぜか、と。モルデカイだろうか？ そして、それは純粹に個人的な恨みから出たもの、アメリカの グレート・ホワイト・ビーチ に尻を向ける最後のチャンスというわけだったのか？ 或は、バスクがどう反応するかについての何らかの直観があつて、彼の復讐はもっと普遍的なものだったのか？

そして (La) バスク自身は なぜ汚らしい小さなスピロヘータを招き入れるのだろうか？ 彼女のどこかの部分 (たとえば、尻) が、あの歳月の間、ただひたすら、何かでっかい黒い雄が侵入してくる日をぶらぶら待っていたというのか？ それとも、もっと先見の明があつたのか？ モルデカイは、ただ必要な道具、切望される病気と彼女の血との仲介役にすぎなかつたのか？ きっと彼女の屈服には何らかのファウスト信奉者の要素があつたのだろう。だとしても、プロメテウスの贈物を持ってキャンプ・アルキメデスを脱出することまで、計画の一部だったのだろうか？ パンドラが見知らぬ男の匣を受けとつたのは、男が去つた途端にそれを開けることができるためにすぎなかつたのか？

来週またこの番組にダイヤルを。

72.

きのう一日中、ハーストには手が届かなかつた。今は朝 なおも彼は私と話をすることを拒んでいる。

テレビにはまだ何ひとつ (ホワイトハウスでの動きも、ウォール街での変動も、真相に迫っていきそうな噂も) 公表の準備が整えられつつある徴候はみられない。政府は、ニュースが遅らせるわけにはいかないことを認識していないのか？ 一般市民の 30 パーセントに被害が及べば、産業社会はもうまったく、整合的に運営していくことができなくなってしまうのだ。

そして、それが最大の危険では、まずあるまい。突如として解放されたこれほどまでの方向性なき知性の、まったく分裂的な力を考えてもみるがいい。すでに各種機関は亀裂をみせはじめている。たとえば、わが国の大学制度が存続していくかどうか、疑問に思う。(それとも、これは希望的観測だろうか?) 宗教はすでにあらゆる方向に逸脱しつつある(例、ジャックス)。カソリック教は、少なくともその聖職階層は、独身主義のおかげで維持していけるはずである。

しかし、それ以外のどこでも、感染しそうなのは、まさしく、その安定に不可欠な人々なのだ。コミュニケーション産業、郊外に住む管理者層、法曹界、政界、医師、教育界。ああ、めざましい大崩壊となることだろう!

73.

わが光は消衰　　私は長い待機を開始する。

忠僕は不慣れな仕事で気むずかしくなっている。新たな要求で彼の好意に負担をかけるのは気が進まない。

点字はどうか?

だが手は震える。

まだ記憶の視力はある　　スイスの高原(本当に、山々よりも素晴らしい)での散歩、アンドレアと一緒に磯で貝殻やおはじき用の小石をさがしてまわったあの日、彼女の微笑、眼の下の血管の好ましくない紫色、そして日常世界のテーブル上に積上げられた光輝く静物のすべて。

74.

ラフォグルはそう書いた　　Ah, que lavie est quotidienne!

だがそれが、まさにそれこそが、その美点なのだ。

75.

記憶にはまた、そのミュージックがある(そうであって当然だ、なにしろミュージズたちの母だったのだから) 聞かれたものも、また聞かれなかったものも。聞かれなかったもののほうが甘美だ。私は暗いベッドに横たわって囁く

光輝が宙から墜ちてくる

女王ら若く清らかに死んだ

塵がヘレンの眼を閉じた
私は病気だ、死ぬはずだ

主よ我等にお慈悲を！

76.

これをいっていなかったのではないか？ それほど多くのことばでは。ただ一語では
盲。

77.

ゆっくりとタイプ打ち、心はいつもどこか他処。私のタイプライターのキイは、この記
録を続けられるよう、刻み目がつけられた。そして私は遂に告白すべきか？ 日誌が好
きになっていると。今のように孤独でいると、何か継続性のあるものを持つのは慰めと
なる。

78.

ハーストは訪ねてこないし、衛守や医師たちは、全面的な疫病蔓延を回避するため何か
がなされているかどうか、いってくれない。忠僕は私に、ラジオやテレビはいま医務室で
は禁じられているという。否応なく、彼を信じなくてはならない。

79.

彼が私を見守っているかどうか、まるでわからない。彼がそうしているとすれば、私は
おそらくこの項を最後まで見届けることはできないだろう。

隔てのある同意者であり、愚痴の自発的な聴き手であった 忠僕 が、私の拷問者にな
った。日毎へ彼はその残酷さを実験精神（滴定法）で少しずつ押し進める。最初のうち
私は努めてパブリックな場所、図書館、食堂、etcへ出入りしようとしたのだが、そのよ
うな場面が助長の要因となったのだと 仄めかし、押しこころした笑い、フォークの行方
不明から 明らかになった。きょう、朝の紅茶のために腰をおろそうとしたところ、忠
僕が椅子を引き離れた。それから大きな笑い声。背中が傷ついたと思う。医師たちに訴え
たのだが、恐れが彼らをオートマトンにしてしまっている。彼らは今では、症状を問う以
外にはいっさい私に話しかけないことを旨としている。

ハーストに会わせるといって、忙しいといわれる。衛守たちは、私がもう実験に関連性がないと見て、スキリマンを見倣い、彼は公然と私のふがいなさを嘲り、私をサムソンと呼んで髪をひっぱる。私が食べ物を保っておけずにいるのを知っていながら、彼は問う

「自分がどんな糞を食っていると思っているんだ、サムソン？ 彼らがきみの皿にどんな糞を盛っている？」

忠僕は、部屋にいないか、さもなければ、私のタイプするものを読んでいないに違いない。彼を追っばらうため、一日の大半を、フランス語で詩をタイプ打ちして過した。この同じ愚痴を他の諸言語でも表わしてみたが、何の反応もないところをみると、HHはもう私の書くものをわざわざ翻訳させたりはしていないと推測せざるをえない。或は、私がどうなろうと、もう気にかけてはいないのだ、と。

妙なものだ　ハーストが殆ど友人のように思えるようになっていたとは。

80.

スキパンスキーがきょう来訪、二名のクワットを連れて　ワトソンとクワイア。この問題については一言も話されなかったものの、暗に、私の沈黙が論戦に勝ったとの示唆。(やりたい放題にやらせておけば、どんな極悪人もいつかはきっと自滅してしまうもの。)

きのうとおととい、スキパンスキーは、私の加減がひどく悪くて会えないといわれたそうだ。やっとのことで衛守の脇を通り抜けられるようになったのは、フレッドグレンの協力を得たおかげ　そしてストライキに突入するぞと威した末のことだという。私はスキリマンによって面会禁止を宣告されていたのだ。フレッドグレンは、スキパンスキーを病棟に入らせるために、スキリマンの頭越しにハーストに直訴しなくてはならなかった。

この来訪は、歓迎すべきものではあったものの、概ね、私の強まりつつある疎外を思い知らせる働きをした。彼らはベッドのまわりに坐って、黙っているか陳腐なことを眩くかで、さながら私が彼らの瀕死の親で、私に対しては何もいうわけにはいかず、私からは何も期待できないとでもいわんばかりだったのである。

81.

彼らがここにいた間、きょうが何日かと訊く勇気がなかった。それがわからなくなってしまっているのだ。あとどれくらいもつと認定されているのか、知らない。知りたくない。私の惨めさは、遅いよりはむしろ早くなるほうがいと望む境地にまで達する。

82.

気分は
ちょっぴり

よくなった。 だが大してではない。スキパンスキーがサークの
ニュー・レコーディングのメシアンの Chronochromie を持ってきた。それを聴いている
と、心の歯車がゆっくりと現実のギヤと噛み合っているのを感じることができた。スキパ
ンスキーは、いた間、全体で五つの単語とは口にしなかった。
盲いていると、沈黙を解釈する手掛りはほんの僅かだ。

83.

スキパンスキーだけが来訪者ではない。忠僕は、勤めは免除してやったのに、しばしば
機会をみつけては、ちょっとしたいたずらを仕掛けてくる、おもに食事の時間のことだ。
彼の足音が聞き分けられるようになった。スキパンスキーは、ハーストが彼を抑えつけよ
うと約束したと私に請け合うのだが、結局のところ、どうすれば人をその人の護衛に対し
て護衛できよう？

84.

しばしば鎮痛剤の注射のあと、心が仮象のヴェールの彼方を見通せるように思える、エ
ピファニー的な瞬間がある、そのあと現実世界に戻って、遠い彼方から持ち帰った金塊を
見てみると、患者の黄金だと知れる。誰がからかわれているのか問いたもうなからかわれ
ているのは私なのだ。

無念心が、いまなお、化学薬品の桶にほかならず、その真埋の瞬間が、その酸化の率の
作用にすぎぬとは。

85.

トマス・ナーシュがなおもとりついている、私は彼の押韻詩をロザリオの祈りのように
唱える。

薬は効けばもう無用
物事すべて終りあり
疫病は、全速力で疾け抜ける

私は病気だ、死ぬはずだ

主よ我等にお慈悲を！

86.

スキパンスキー、ワトソン、クワイア、そして新たな転向者バーネスが、輪番制で私の番をして一日を過した。これは、スキリマンの隠れもない命令に（彼らは否認するものの）背いてのことだ。大半の時間、彼らは自分の好きなことをしているが、時どき読んで聞かせてくれたり、話をしたり。ワトソンが、私の新たな、より有利な立場からみて、もう一度チャンスを与えられてもやはり忌避者になりたいか、と質問。私はどちらとも判定できなかった、ということつまり、そうなるだろうということではないかと思う。人はなんと多くのことを、ただ首尾一貫していると思われたいというだけの理由でやることか！

87.

スキパンスキーが遂に真相吐露の恐怖を克服。スキリマンがわれわれの邪魔に入った晩以来、スキパンスキーは雄弁な 悪の軍勢 と寡黙な 善の軍勢 との間の例の平衡を失ったまま決着のついていない対話に巻きこまれっぱなしだった。

「理をみつけないくはと自分に言い聞かせ続けました。ところが理は常に二つ一組でやってくるんです 賛と否、テーゼとアンチテーゼ、完全に互角なんです。遂に効を奏したのは不合理な考えでした。ヴィッカーズが Die Frau Ohne Schatten の鳴鐘転調アリアを歌うのを聴いていました。それだけのことなんです。そして思ったんですこんなふうには歌えさしたらなあ！ もちろん、ぼくの年齢やらなにやらを考慮すれば不可能だろうとは思いますが、でも、本当にそうしかったんです、ほかのどんなことであれ一度だって望んだことのない望み方で。そしてそれこそがぼくの待ち望んでいたものだったに違いありません、その後は全然ジレンマがあるようには思えなかったんですから。

もしもここから出られたら、そして死ななくてもいいのなら、それこそが、自分でやっていくつもりでいることです。声楽を勉強するつもりなんです。それが、その決心をしたんだということがわかると、気分が……とても爽快なんです。そして、いざ生きたいと思うようになっている今、ひどいことに、そうはいかないんですよ」

「ここで残された時間をどうするつもりなんだね？」と私はたずねた。

「実は、医学の勉強を始めたんです。すでにかなり生物学の心得がありました。難しいことじゃありません。医学部でどこまでやらなきゃならないかなんてことは実のところの

はずれな問題です」

「それで、ワトソンやクワイアやバーネスは？」

「この企画は元々、ワトソンのものだったんです。彼には、羨ましいことに、どんな時でも自分のしていることこそ、唯一の論理的で道理に叶った実行可能なことだと信じる才能があるんです。スキリマンは彼と話し合ってもどうにも埒があかなくて、それで彼の頑固さがぼくらみんなの助けとなるんです。それに、今ではぼくらは四人　あなたを含めていいなら五人　ですから、彼のいうことに、彼のする脅迫に、うろたえずにいるのもずっと容易ですよ」

「勝ち目があると思うかい？」

数分間の沈黙。それから「すみません、サケッティさん。首をふるのがあなたに見えないうつことをつい忘れてしまうんです。いいえ、実のところ、あまり勝ち目はありませんね。治療法をみつけるのは、いつの場合も、多かれ少なかれ試行錯誤の問題になるでしょう。それには、時間が、費用が、設備が要ります。主として、時間がかかります」

88.

HHがいうには、不埒な財団の役員連中は疫病の存在を認めようとしないう。独自にスピロヘータを発見した数人の医師たちは、買収されるか、何かもっと不愛想な方法で沈黙させられた。

その間にも、新聞の見出しは日毎に奇怪なものになっていく。またもスーパー殺人の波がダラスとフォートワースで起った。一週間に三件の美術館強盗があり、カンサス・シティ市議会はアンディ・ウォーホルを公園局長として雇用。まさに、世界は終りつつある。氷によってではなく、火によってではなく、遠心力によって。

89.

卒中発作。左手が麻痺して、私はこれを右の人差指でタイプ、骨の折れる作業だ。

大半、私は己れの闇の広さを熟視、或は、ミルトン流に、聖なる光を頓呼。

90.

歌は、ナーシュのものでも私自身のでも、今はミュージックと同様、慰めとはならない。まさに至高の思考が、この恐怖で突き破られて、垂直に地上へ墜ち、木々の枝を折る。

ハンターがそれにとびかかっていく、完全にではない、それは完全に死んではいない。翼が上がり、萎え、また上がる。完全にではない、完全に死んではいない。

91.

肉がばらけていく。肺がひずみ、胃は正しからぬ酸を製造。あらゆる食べ物が嘔き気を催させ、私は30ポンドを失ってしまった。歩きたくない、鼓動は乱調。話すと痛む。

それでもなお私は闇を、あの暗箱を恐れる。

92.

私が藪でありさえしたなら！ 昔なじみのメタファたちを信じられさえしたら！ この最後の日々に、もう少し愚かになれさえしたなら！

93.

スキリマンは衛守を呼びに行き、一方、クワイアはハーストをさがす。ちょっとした対決めいたものあって、それを手短かに物語ると

スキパンスキーと3名の友人が、また2名のクワットを連れて枕元に。これだけこちらについたとなると、スキリの助手団は真二つ、6対6に分裂だろう。会話は相変わらず治療法の見込をめぐる。きょうわれら臨界質量に達した筈、遂に純医学的解決の通則から脱却した故。数十余の非実用的発想の中には錠に噛合うものもあるかも！（無論Mがああ錬金術的プロジェクトに援用したような破れかぶれの推論によるものながら）われら語り

脳波の機械的な複製と貯蔵の研究。治療法が開発される時まで、ヨガその他の方式、例、フリーズドライ法で生命仮停止。さらには、なんと、タイムトラベル同じく恒星間航行、目的は同様、即、未来（非相対論的意味で）世界への帰還。スキパさえ、われらは結局、奇蹟を求めている故、神から何らかの応答を奪取する全地球的努力がなされないものかと提案。大胆なパーネスの案は脱出（！！！！）これに私は異論、秘密保持の見込み薄い故、われらの筋書は衛守たちが始めから知っていてもうまくいくものでなくては。時間切れ。残念、100まで行きたかったのに。

94.

主はわが光にしてわが救い、それを恐れることがあろうか？主はわがいのちの力なり、それを怖れることがあろうか？

悪しき者、まさにわが敵、かたきども、わが肉を啖わんと迫りし時、躓きて倒れり。

たとい大軍、われに対して陣を張ろうと、

わが心、恐れることなからん。たとい戦さ、われに対して起ろうと、これにわれ確信あらん。

われ、主に願いたるひとつのこと、希求せん。わが生涯のすべての日々、彼の館に住まいて、土の美を拝し、みもとにて尋ね奉らん。

私は実に素晴らしく、実に猛烈に、実に純一に、実にまったく予想に反して、幸福だ
巨大な善意ある蒸気ローラーによる如く幸福に圧倒され、善に押しつぶされている。
私は見る事ができる。肉体は十全だ。いのちが返され、そして世界は、素敵な再び帰
てきた世界は、少なくとも、その出発命令を拒否するチャンスなしに、ハルマゲドンへは
向うまい。

おそらく、説明せねばなるまい。だが、ただもう歌いたいのだ！

筋道を、サケッティ、筋道を　始めと、中と、そして終りを。

前述 93 項は、スキリマンが、忠僕を含むかなりの人数の衛守と共に、医務室に再登場したことによって打ち切られた。

「オーライ、膿づらぼうやども、もう立去る時間だぞ、サケッティさんは大層お加減が悪くて見舞客の相手ができんのだ」

「失礼ですが、博士、ぼくらはここにとどまります。なにしろハースト氏からそうする許可を得ているんですからね」これは、震える声で、スキパンスキーから。

「きみたちは、六人とも　クワイアはどこだ？　自力で即刻、その扉から歩いて出ていきたまえ、さもないと一人ずつ運び出されることになるぞ。公正にみて正当と判断される限りで、手荒な扱いをしてくれてもいいと衛守たちにいっておいた。誰か、あの騒々しいタイプライターから、あの不愉快な手を取除いてくれんかね？」

この任務を引受けたのは、予想どおり、忠僕だった。私は冷静なそぶりでタイプライターから顔をそらせようとしたのだが、忠僕はずいぶん近くに来ていたに違いない(衛守たちがもう部屋中に散らばっていたのか?) 右手を掴んで私を椅子から引き出しながら、絶妙な拷問の要領で、それを捻ることができた。(彼の唇から小さな満足の喘ぎがこぼれた。) 痛みは、何分も後まで続いた。いやそれどころか、最後の最後まで。

「ご苦労さま」とスキリマン。「では、諸君、これより……」

以下省略となったのは、ハーストがクワイアとともに登場したことによる。HHは当惑した声でいいはじめた「私が連れてこられたのは事情を　」

「ようこそそのおでましで、將軍！」とスキリマン、冷静に即興の機略でまくしたてた。「もうほんの一早くおいで下されば、上官抵抗の全景をご覧いただけたでしょうに。ま

ず、なさるべきことは 私が現在の危険状態をあなたと論じ合えるようにするためこれらの若者たちを各自の部屋へ連れて行かせることです」

六名のクワットは抗議と説明の叫びで妨害したが、そんな乱流をも越えてスキリマンのかん高い雄弁はアーチを架渡し、鋼のオレンジよろしき画然たる双曲線をえがいた

「將軍、ご忠告申し上げますこれら若き共謀者どもを互から隔離なさらなければ、キャンプ・アルキメデスの保安は重大な危機に晒されるであります。ご自身の経歴と名声を重んじられるなら、閣下、私の言をお聞き届け下さい！」

ハーストは不明瞭にもごもごと言っただけだったが、スキリマンに従えとの衛守たちへの合図が伴っていたに違いない。クワットたぐは抗議しながら部屋から連れ出されていった、

「思うに」とハーストは切り出して、「きみは山をモグラ塚だと大袈裟にみているのかもしれんぞ」何か言い間違えをしたようだと思いついて、そこでいいやめて考え込んだ。

「提案してよろしいでしょうか、將軍、これちの問題をもっと論じる前に、サケッティをここに残して医療スタッフの看護に委ねてはいかがでしょう？ 些か……その……彼には聞かれたくないことがあるもので」

「だめだ！ 彼がそんなことをいうのには理由があるんだ、ハースト。今、ぼくの前で、運命を定めてくれ、でないと思えるところのない議論になるかもしれない。ぼくは彼を疑っているんだ」

「彼の疑いなど、煩わしいかぎりですぞ！ 事は保安に係るのです。それとも、死体には好きなようにさせておけとおっしゃるのなら、一緒に上へ連れていかせるがよろしかろう」

「上、どこだね？」とハーストはたずねた。

「上ですよ これまでは時どき上へ行く認可を下さったでしょう。なぜ今、逡巡なさるのです？」「逡巡？ 私は逡巡などしておらんよ！ さっぱり理解できんね」

「ここではその問題を論じたくないんですよ！」

(いまなお私には、スキリマンがこのとき何のために固執していたのか、定かではなく、それは決定的なことを実に予見し難い方法で説明しようとするようなものだった、というのも、よもや、予見されていなかったのか？ この点で自分の思いどおりに、まったく独断的にやれば、もうあとはどんな問題でもそうやっていけるという、確信にすぎなかったのだろうか？)

「よかろう」とハースト、その声の(これまでになく習慣的な)黙諾には、彼の年齢が聞きとれた。「サケッティが同行するのを手伝ってやってくれんかね？」と衛守たちに求めた。「それから、何か彼に外套のようなものをみつけてやってくれ。毛布でもいい。上は

寒いんでな」

私ぐわれわれのエレベーターの或るもので行なつた最長の旅の何倍もかかるものだった。われわれ六人(忠僕とあと二名の屈強な衛守が、私の逃亡を防止するのに必要とされたのである)は私の耳のはじけるような音を除いては完全な沈黙の中で上昇。

エレベーターの籠を出ると、ハーストがいった、「さて、もうあんな謎めかしはやめて、何が問題なのか説明してくれなきゃならんぞ。ルイスが何をそんなに恐いことをしたんだね？」

「上官抵抗を企て、あわや成就寸前のところまで持つていったのです。しかし私の行きたかったのはここではありません、もっと安全でしょう……外のほうが」

衛守たちが、両腋の下にそれぞれ手を入れて私を案内、カーペットの敷かれていないフロアを越え、扉を抜け、また扉を抜けると、顔にそよかぜを、まるで死んだと信じていた最愛のひとの息吹のように感じた。よろよろと三段おりた。衛守たちが掴んでいた手を放した。

空気！

そしてスリッパ穿きの私の足の下にあるのは、ユークリッド的なそっけないコンクリートではなく、不慣れで多様な感触のある大地だった。このときはたして私が何をしたのか、声をあげて叫んだのか、盲いた眼から涙が流れたか、また、どれくらいの間、顔を冷たい岩に押し当てていたのかも、まるでわからない。我を忘れていた。生涯にそれまで一度も感じたことのないほどの幸福をおぼえた。なぜなら、それは何か月も前に私が排除された世界の、本物の空気であり、紛れもない岩だったのだから。

彼らは二人はたぶん数分間話し合っていた。今は、私をめざめさせたのが、ハーストのびっくりした「何だって！」だったのか、極度の寒さなのか、それともわが身の危険に対する意識が甦ってきたからに過ぎないのか、思い出せない。

「彼を殺すんです」とスキリマンが抑揚のない声でいった。「さあ、これ以上明解になれとおっしゃっても無理ですよ」

「彼を殺す？」

「彼が逃げようとしている間に。ほら、彼の背中はわれわれに向けられているでしょう。彼は逃走中に毛布を失くしました、あなたは発砲しなくてはならなかったのです。まさに古式ゆかしい情景じゃありませんか」

ハーストはなおも気の進まぬ様子を示したらしく、スキリマンはさらに押した

「彼を殺すんです。そうしなくてはならないんです。彼がひきつづきキャンプ・アルキメデスに存在すれば、その行きつく結果はひとつしかありえないということ、私は論理的

に明らかにしました。まもなく彼の増大する知力は、一緒にいる時でさえもいったいどんな巧妙な網を張りめぐらしているのやらだれにも見当すらつかないところまで行ってしまおうでしょう。彼がきょう彼らに何を話していたか、申し上げたでしょう 脱出ですよ！ われわれが彼らの全計画を盗聴しても、それでもなしうる脱出でなければならないと彼はいったのですよ！ 想像してみてください、彼がわれわれにおぼえているに違いない軽蔑を！ 嫌悪を！」

想像の中で、ハーストの頭が弱々しく左右に揺らいているのを見ることができた。「しかし……私にはできんよ……私にはできない……」

「しなくてはならないんです！ しなくてはならないんです！ しなくてはならないんです！ ご自身でなさらないのなら、衛守の一人をご指名ください。志願者を募るので。一名はよろこんでお手伝いするでしょう、必ずや」

忠僕 が即座に、忠僕ぶりを発揮して、進み出た。「自分でありますか？」

「さがっていたまえ！」とハースト、その声には弱々しさは微塵もなかった。それから、尻すぼみの態度で、スキリマンに 「衛守にさせるわけにはいかんよ……そんな……」

「だったら、ご自分の銃をお使いなさい。今すぐ手を下さないと、すでに彼の網の中に捕われていないとは言い切れなくなりますよ。あなたがこのフランケンシュタインの怪物を創ったのです、ですからあなたが滅ぼさなくてはならないのです」

「そんなことはできんよ、私には。彼とは懇意だった……あまりにもしばしば……それに……しかし、きみは？ きみではいかんのか？ 銃がきみの手にあったなら？」

「お寄越しなさい 直接的にお答えしましょう！」

「衛守、きみの銃をスキリマン博士に渡したまえ」

このやりとりのあとの長い沈黙の中で立ちあがってふりかえると、吹きさらしの風を顔に受けた。

「いいか？ いいか、サケッティ？ 何かいいたいことはないか？ 辞世の二行連句は？ 生意気なせりふは？」声の緊張の中に、彼が意志の鞍に完全に安定して乗ってはいないと示唆するものがあつた。

「ひとつだけ。あなたに感謝するということを。再びここに來られて、実に素晴しかった。もう表現できないくらい素晴らしい。風、そして……いつてくれないか？ 夜なのか……それとも、昼？」

答えたのは沈黙、それから銃声。また一発。

全部で七発。それぞれのあと、私の幸福は新たな直径へとはずむように思えた。

生きている！ と私は思った。私は生きている！

七発目の銃声のあとには最も長い沈黙が続いた。それからハーストが 「夜だよ」

「スキリマンは……？」

「彼は銃弾を 星に向って発射したのだよ」

「文字通り？」

「そう。特にオリオンの帯を狙っているようだったな」

「わけがわからない」

「きみは、土壇場で、十分に大きな標的ではなかったのだよ、ルイス、彼の悪意の並々ならぬ大きさにとっては」

「それで、最後の銃弾は？ 彼は自分で……？」

「たぶんそうしかつたろうが、そこまでは踏み切れなかった。最後の一発は私が撃つたのだよ」

「まだ理解できない」

鼻風邪で濁ったバリトンで、ハーストは「私は築きます、天国への階段を」のふしをハミングした。

「ハースト」と私はいった。「あなたは……？」

「モルデカイ・ワシントン」と彼はいった。

二枚の毛布を私の肩に戻した。私は考え込みはじめた。

「何にしても今は下へ戻るのが一番のようだな」

95.

大団円の構成要素

ハースト/モルデカイは私を昔の劇場のすぐ脇の部屋へ案内、私があ の 事実の博物館を築いていた際、彼の マグナム・オパス の装備が保管されていた場所だ。衛守たちは私よりも忠僕に気を奪われていた。忠僕は彼らの手荒な扱いに大声で、たじろぎながら抗議した。

装備は、大失敗（だと私はあ のとき判断したものだ）の晩にあったままの姿に組み上げられていた。忠僕と私が、それぞれ、ハーストとモルデカイの席に着いた。あらゆる推論を、もごもごと感謝をこめて棚上げしながら、私は身をゆだね、絆創膏を貼られ、固定された。それまでに、何が進められているのかに、かすかにではあれ、気がついてきたに違いなく、自分を抑えて結果を非難しなくてはならない。スイッチが入れられた時、心が空白になっていったのをおぼえている。眼を開けて、私は見た……

そして、それが半分の驚異だった 私は見たのだ！……私自身の肉体、袋一杯の病氣と古びた肉、まさに死の寸前にあるものを。その肉体は轟いた、その眼が開いた 間に。その両手はその顔へと動いた。その顔は絶叫した。私は殆ど気絶しそうな感嘆をこめ

て私自身の肉を見おろした。これを私自身のものと呼んでいいのか？ それとも、まだ大いに忠僕のものなのか？

96.

大団円の構成要素（続篇）

モルデカイが説明した、いかに、キャンプAでの最初の数か月間に、囚人たちが疑いを招くことなく秘かに意志を伝えあえる方式が考案されたか。彼らの「錬金術的」駄弁はすべて暗号だったのであり、コードとしてはエジプト語を凌ぐ複雑さ、そこに絡まってこみいらせたのは頻発される自由形式の奔放な思いつき要するに、空電となるもので、いよいよ結構なことに、NSAのコンピュータ群をまごつかせることになる。ひとたびこの言語が確立されると、幾つかの研究が試みられたが、最も有望だったのは、スキパンスキーらがわれわれのつい先頃のブレインストーミングでその一端に触れたもの 脳波の機械的な複製と貯蔵、ケンブリッジでのフローリーの研究の線に沿ったものだった。われわれを阻んだ考察は、いかにして脳の内容を貯蔵庫からとりだすか？ そのための理に叶った容器はただひとつ、他人の肉体であろう。

モルデカイと仲間たちはこの結論を引出した、そしてお次は どのような方法を開発したとしても、それは一発で録音と再生を行なえりるももるものでなくてはならない、即ち、それは精神互換装置となる、と。彼らが、その間ずっと「マグナム・オパス」のペテンを保ち続けながら、そうした装置を最小限の実地の実験で開発できたこと、その無害性を証明するために招き入れられたエレクトロニクス技師たちに対して、目的とする用途を隠蔽しおおせるものに設計できたこと、そして、最初の実地操作であれほどまでの成功に持っていったということ これこそ、私がこれまでに見たパリジンの力の最も畏怖すべき証拠である。

（ささやかな事後のイロニーをひとつ。私は、互換装置の主要部分の配線図を、ポオの方式で、Mの机の上のごちゃまぜになった書類の中に匿されているのを目にしていたのだ。ジョージ・ワグナーの 歳出簿 の中にあるのをみつけた「王様」と首の格子文様の絵だったのである。）

97.

大団円の構成要素（完結篇）

ハーストの心が、突然自分がモルデカイの疲弊した体躯の中にあるのに気づいて、栓塞を引起すほどにまで猛烈に慌てふためこうとは、嬉しい誤算だった。彼を破滅させたの

は、自分がニグロなのかと思ったことだったと、モルデカイは主張する。

ハーストがこの何か月も前から死んでいて、その間ずっと私が彼を訪問していたのかと思うと!ふりかえてみると、私がハーストの上に認めた変化の多くは手掛りとして読みとれるものだったかもしれないとわかるが、全体としてはなんとも見事に完遂されたペテンだった。

だが何の目的でこんなペテンを？ モルデカイは徐々に乗取る必要性を説明して、いかにもハーストラしい振舞いをしている限りに於てのみ、ハーストの権威を発揮できると指摘。刑務所長になったあともなお囚人なのだ！

次第に他の囚人たち（僧正、サンドマン、etc）も精神互換装置を使ってキャンプ A のスタッフに侵入、時には医療スタッフの一員を、また時には衛守を彼らの「代替肉体」とした。私がここに来たことによる最も奇妙な結果のひとつは、非暴力のお手本を示すことによって、囚人のうちの三人、就中バリー・ミードに、「復活！」の見送りを納得させてしまったということ。彼らはいずれも、そのために他人に死を宣告するよりも、自らの死を遂げることを選んだのだった。

私が同じように自己犠牲を主張するのではないかと恐れたからこそ、モルデカイは最後の最後まで、私が不可逆的に犠牲者の肉を継承してしまうまで、秘密を保ち続けたわけだ。私は殉教者たらんと主張したろうか？ 今はこの肉を、生命と健康を大いに愛しているので、それは信じられない。おそらくそうしていただろう！

98.

さて、未来である。探求はすでに予防接種に向ってかなり進行している。希望が、登りやすい二十の峰の頂上から、いさおしく輝いている。そして、われわれが倒れるとすれば、少なくとも戦いながら倒れることだろう。

だから歌うのだ、ハイホー！

99.

いや、そこまで大浮かれではない。恐怖もある。ハースト/モルデカイの顔の仮面の奥に、いまひとつ、更に先の未来についての暗い認識が潜んでいる。最初の薔薇色の峰々の彼方にある一層の高み、死の如く極度に冷たく未知なるものについての。ヴァレリーのいうとおりだ！ 窮極的に精神は不如意で裸なのだ。窮極的にそれは対象なき力となるという至高の貧しさへと還元されるのである。

私は本能なしに、殆ど心像もなく存在する。そして私はもはや目的を持たない。私に似

ているものは無だ。毒が示した効果は、二つ 天才と死ではなく、一つだ。それを何とでも好きな名で呼ぶがいい。

100.

終えるのにいい、端数のない数字だ。

十二月三十一日だ、これも切りがいい。きょうモルデカイがいった 「われわれの知らない恐ろしいことがうんとある。まだ発見すべき素晴らしいこともうんとある。端に行きつくまで航行しようじゃないか」

(完)